

松江市文化財調査報告書 第122集

春日山古墳群
寺ノ脇遺跡

国道431号手角工区特定交通安全施設整備工事に伴う
発掘調査報告書

平成21（2009）年3月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団



春日山古墳群から大山を望む



春日山古墳群全景（東側上空より）

例 言

1. 本書は、島根県松江県土整備事務所の依頼を受けて、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が平成19・20年度に実施した、国道431号 手角工区 特定交通安全施設整備工事に伴う春日山古墳群・寺ノ脇遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺跡の所在地は、松江市手角町春日山548-1、手角町字町並72-3である。
3. 春日山古墳群は平成19年7月2日～平成20年4月30日にかけて調査を行い、調査面積は1,470㎡である。寺ノ脇遺跡は平成19年5月1日～6月29日、平成20年9月8日～11月17日にかけて調査を行い、調査面積は165㎡である。
4. 調査の組織は下記のとおりである。

依頼者 島根県松江県土整備事務所

主体者 松江市教育委員会

[平成19年度]

事務局	松江市教育委員会	教育長	福島 律子
	〃	理事	友森 勉
	〃 文化財課	課長	吉岡 弘行
	〃	係長	飯塚 康行
	〃	主任	後藤 哲男

調査機関 財団法人松江市教育文化振興事業団

	〃	理事長	松浦 正敬
	〃	専務理事	中島 秀夫
	〃	事務局長	松浦 克司
	埋蔵文化財課	課長	廣江 眞二
	〃	課長補佐	錦織 慶樹
	〃	調査員(嘱託員)	廣濱 貴子 (調査担当者)
	〃	調査補助員	廣江 理佳 (平成19年9月まで)
	〃	調査補助員	宇津 直樹 (平成19年10月から)

[平成20年度]

事務局	松江市教育委員会	教育長	福島 律子
	〃	理事	友森 勉
	〃 文化財課	課長	吉岡 弘行
	〃	係長	飯塚 康行
	〃	主任	後藤 哲男

調査機関 財団法人松江市教育文化振興事業団

	〃	理事長	松浦 正敬
--	---	-----	-------

調査機関 財団法人松江市教育文化振興事業団

〃	専務理事	中島 秀夫 (平成20年10月15日まで)
〃	事務局長	松浦 克司 (10月16日から専務理事事務代行)
埋蔵文化財課	課長	廣江 眞二
〃	課長補佐	錦織 慶樹
〃	主幹	中尾 秀信
〃	調査員(嘱託員)	廣濱 貴子 (調査担当者)
〃	調査補助員	宇津 直樹

5. 現地調査および報告書の刊行に当たっては、以下の方々に有益なご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表させていただきます。(敬称略、順不同)
渡辺貞幸 (島根大学法文学部教授・松江市文化財保護審議会委員)、池淵俊一、東森晋 (以上、島根県教育庁文化財課)、中村唯史 (三瓶自然館 学芸員)、稲田陽介 (島根県埋蔵文化財調査センター)
6. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
7. 本書に記載した遺物の実測、浄書は下記のものがおこなった。
(実測) 松島春江 飯野正子 松尾澄美 高尾万里子 石倉紀子 宇津直樹 廣濱
(浄書) 飯野正子 北島和子 中谷美枝子 宇津直樹 廣濱
8. 本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。
SK…土坑、SX…墓墳、SB…掘立柱建物跡、P…ピット、SD…溝状遺構、K…杭
9. 遺物番号は春日山古墳群、寺ノ脇遺跡それぞれに通し番号で記した。
10. 本書に記載した写真は宇津直樹、廣濱が撮影した。
11. 本書の執筆は、調査に至る経緯を松江市教育委員会 (後藤哲男)、その他の執筆、編集は廣濱がおこなった。
12. 出土遺物、実測図面、写真等は松江市教育委員会で保管している。

目 次

巻頭カラー

例言

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の概要	4
第1節 春日山古墳群	
1. A区	6
2. B区	37
3. C区	42
4. まとめ	45
第2節 寺ノ脇遺跡	
1. 調査の概要	48
2. 土層堆積状況・遺物出土状況	48
3. 第2遺構面	51
4. 第3遺構面	51
5. 主な土層の出土遺物について	58
6. まとめ	84
遺物観察表	86

図版

抄録

挿 図 目 次

春日山古墳群

第1図	松江市位置図	
第2図	遺跡位置図 (S=1:25,000)	1
第3図	周辺の遺跡 (S=1:25,000)	3
第4図	春日山古墳群開発範囲・調査範囲図	5
第5図	春日山古墳群調査前地形測量図 (S=1:400)	7
第6図	A区遺構配置図 (S=1:400)	8
第7図	1・2号墳土層断面図 (S=1:80)	9~10
第8図	1号墳第1・第2・第3主体部実測図 (S=1:60)	11~12
第9図	2号墳主体部実測図 (S=1:60)	14
第10図	3・4号墳土層断面図 (S=1:80)	15~16
第11図	3号墳主体部実測図 (S=1:60)	17
第12図	2・3号墳間溝出土遺物実測図 (S=1:3,1:2)	18
第13図	土器棺墓実測図 (S=1:20)	19
第14図	土器棺墓出土遺物実測図 (S=1:3)	19
第15図	4号墳第1・第2主体部実測図 (S=1:60)	21
第16図	5号墳土層断面図 (S=1:80)	23~24
第17図	5号墳第1・第2主体部実測図 (S=1:40)	25
第18図	5号墳第1主体部実測図 (S=1:25)	26
第19図	5号墳第1主体部出土遺物実測図 (S=1:2)	26
第20図	5号墳周辺出土遺物実測図 (S=1:2,1:3)	27
第21図	6号墳実測図 (S=1:60)	29
第22図	7号墳実測図 (S=1:60)	30
第23図	SX01実測図 (S=1:20)	31
第24図	SX01出土遺物実測図 (S=1:3,1:2)	31
第25図	SK01実測図 (S=1:20)	32
第26図	SK01出土遺物実測図 (S=1:3)	32
第27図	SX02実測図 (S=1:60)	33
第28図	SK02実測図 (S=1:20)	33
第29図	SK03実測図 (S=1:20)	34
第30図	SK04実測図 (S=1:20)	34
第31図	SK05実測図 (S=1:40)	35
第32図	SK05出土遺物実測図 (S=1:3,1:2)	36
第33図	B区調査成果図 (S=1:150)	38
第34図	B区土層断面図 (S=1:80)	38
第35図	SB01 (掘立柱建物跡) 実測図 (S=1:80)	39
第36図	SB02 (掘立柱建物跡) 実測図 (S=1:80)	40
第37図	B区出土遺物実測図 (S=1:2,1:3)	41
第38図	C区調査後測量図 (S=1:150)	42
第39図	C区調査後地形測量図 (S=1:150)	43
第40図	C区土層断面図 (S=1:80)	43
第41図	C区出土遺物実測図 (S=1:3)	44
第42図	奥才型木棺の分布	45

寺ノ脇遺跡

第43図	寺ノ脇遺跡開発範囲・調査範囲図 (S=1:400)	49
第44図	南北土層断面図 (S=1:60)	50
第45図	第2遺構面実測図 (S=1:100)	52
第46図	第2遺構面・遺構内出土遺物実測図(1) (S=1:3)	53
第47図	第2遺構内出土遺物実測図(2) (S=1:5)	54
第48図	Ⅱ区第3遺構面実測図 (S=1:100)	55
第49図	Ⅱ区第3遺構面・遺構内出土遺物実測図 (S=1:3)	56

第50図	暗茶褐色砂質土出土遺物実測図(1) (S=1:3)	59
第51図	暗茶褐色砂質土出土遺物実測図(2) (S=1:3)	60
第52図	暗茶褐色砂質土出土遺物実測図(3) (S=1:2,1:3)	61
第53図	暗褐色砂質土出土遺物実測図(1) (S=1:3)	64
第54図	暗褐色砂質土出土遺物実測図(2) (S=1:3)	65
第55図	暗褐色砂質土出土遺物実測図(3) (S=1:3)	66
第56図	暗褐色砂質土出土遺物実測図(4) (S=1:3)	67
第57図	暗褐色砂質土出土遺物実測図(5) (S=1:2)	68
第58図	暗褐色砂質土出土遺物実測図(6) (S=1:1)	69
第59図	暗褐色砂質土出土遺物実測図(7) (S=1:3)	70
第60図	暗褐色砂層出土遺物実測図(1) (S=1:3)	71
第61図	暗褐色砂層出土遺物実測図(2) (S=1:3)	72
第62図	暗褐色砂層出土遺物実測図(3) (S=1:3)	73
第63図	暗褐色砂層出土遺物実測図(4) (S=1:3)	74
第64図	暗褐色砂層出土遺物実測図(5) (S=1:3)	75
第65図	暗褐色砂層出土遺物実測図(6) (S=1:3)	76
第66図	暗褐色砂層出土遺物実測図(7) (S=1:3,1:2)	77
第67図	暗褐色砂層出土遺物実測図(8) (S=1:3)	78
第68図	暗褐色砂層出土遺物実測図(9) (S=1:3)	79
第69図	オリーブ色砂層出土遺物実測図 (S=1:3)	81
第70図	黄褐色砂礫層出土遺物実測図 (S=1:3)	81
第71図	黄灰色砂礫層～淡黄褐色砂質土出土遺物実測図 (S=1:3)	82
第72図	青灰色砂礫層出土遺物実測図 (S=1:3)	83



第1図 松江市位置図

図版目次

春日山古墳群

- 図版1 A区 調査前全景 (西から)
B区 調査前全景 (東から)
C区 調査前全景 (北東から)
- 図版2 春日山古墳群 調査後全景 (北側上空から)
1号墳主体部 (西から)
- 図版3 1号墳 全景 (西から)
1号墳主体部 土層断面 (南西から)
1号墳主体部 土層断面 (北から)
- 図版4 1号墳第1主体部 (北東から)
1号墳第2主体部 (北東から)
1号墳第3主体部 (北東から)
- 図版5 2号墳主体部 (北から)
2号墳主体部 (西から)
- 図版6 2号墳主体部 南北土層断面 (西から)
2号墳主体部 東西土層断面 (南から)
3号墳東側溝 遺物出土状況 (南から)
- 図版7 3号墳 全景 (西から)
3号墳主体部 (南から)
- 図版8 土器棺墓 (東から)
土器棺墓 (南から)
土器棺墓完掘状況 (北から)
- 図版9 4号墳 全景 (北東から)
4号墳第1主体部 砂礫床検出状況 (北東から)
- 図版10 5号墳第1主体部 礫検出状況 (北東から)
5号墳第1主体部 (北東から)
- 図版11 5号墳第1主体部 刀子出土状況 (西から)
5号墳第1主体部 縦断土層断面 (西から)
5号墳第1主体部 横断土層断面 (南西から)
- 図版12 5号墳第2主体部 (南西から)
5号墳周辺 遺物出土状況 (北から)
5号墳周辺 遺物出土状況 (北から)
- 図版13 6号墳 全景 (北から)
6号墳主体部 (南西から)
7号墳 全景 (北西から)
- 図版14 7号墳主体部 (南東から)
SX01完掘状況 (南から)
SX01遺物出土状況 (南から)
- 図版15 SX01遺物出土状況 (西から)
SK01完掘状況 (西から)
SK01遺物出土状況 (南から)
- 図版16 SX02完掘状況 (北東から)
SK02完掘状況 (北東から)
SK03完掘状況 (南東から)
- 図版17 SK04完掘状況 (南から)
SK05石出土状況 (南東から)
SK05完掘状況 (南から)
- 図版18 B区 全景 (北東から)
B区 全景 (西から)
- 図版19 B区土層堆積状況 (北西から)
SB01遺物出土状況 (南西から)
SB02遺物出土状況 (南西から)

- 図版20 C区 全景 (北東から)
C区土層堆積状況 (北から)
C区土層堆積状況 (北から)
- 図版21 2・3号墳間溝出土遺物
土器棺墓出土遺物
5号墳第1主体部および周辺出土遺物
- 図版22 SX01出土遺物
SK01出土遺物
SK05出土遺物
- 図版23 B区出土遺物
C区出土遺物

寺ノ脇遺跡

- 図版24 調査前 遠景 (西から)
I区調査前 近景 (北西から)
II区調査前 近景 (西から)
- 図版25 I区調査後 (南から)
II区調査後 (南から)
- 図版26 南北土層断面 (南東から)
I区第2遺構面 (南東から)
- 図版27 II区第2遺構面 (南東から)
II区第3遺構面 (南から)
- 図版28 I区第2遺構面遺物出土状況
暗褐色砂質土遺物出土状況
暗褐色砂層遺物出土状況
- 図版29 第2遺構面・遺構内出土遺物
- 図版30 第2遺構面出土遺物
II区第3遺構面・遺構内出土遺物
- 図版31 暗茶褐色砂質土出土遺物
- 図版32 暗茶褐色砂質土出土遺物
- 図版33 暗茶褐色砂質土出土遺物
暗褐色砂質土出土遺物
- 図版34 暗褐色砂質土出土遺物
- 図版35 暗褐色砂質土出土遺物
- 図版36 暗褐色砂質土出土遺物
- 図版37 暗褐色砂質土出土遺物
- 図版38 暗褐色砂質土出土遺物
- 図版39 暗褐色砂層出土遺物
- 図版40 暗褐色砂層出土遺物
- 図版41 暗褐色砂層出土遺物
- 図版42 暗褐色砂層出土遺物
- 図版43 暗褐色砂層出土遺物
- 図版44 暗褐色砂層出土遺物
- 図版45 暗褐色砂層出土遺物
- 図版46 暗褐色砂層出土遺物
- 図版47 暗褐色砂層出土遺物
- 図版48 オリーブ色砂層・黄褐色砂礫層出土遺物
黄灰色砂礫層～淡黄褐色砂質土出土遺物
- 図版49 青灰色砂礫層出土遺物

表目次

春日山古墳群一覧表

第1章 調査に至る経緯

島根県によって計画された、国道431号手角工区特定交通安全施設等整備事業は既存国道に歩道を整備する事業である。

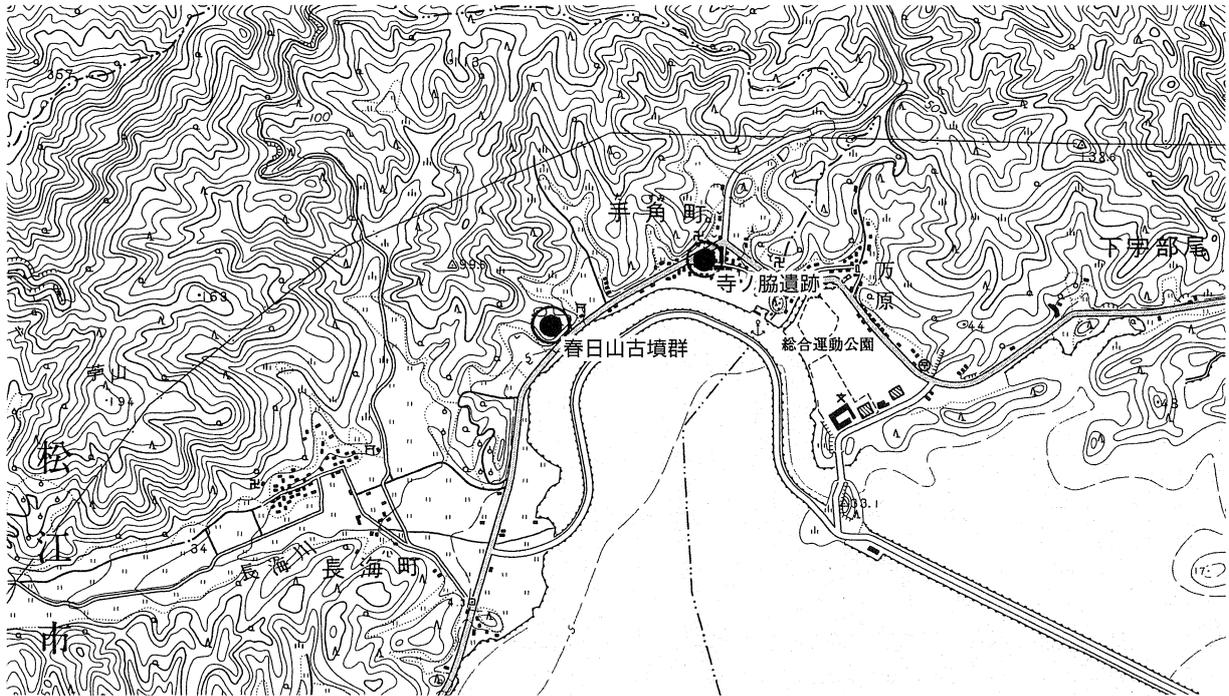
この事業予定地の沿線には周知の遺跡である「寺ノ脇遺跡」「権太作遺跡」「長海条里制遺跡」などが存在する。

平成17年11月、島根県松江土木建築事務所（現、島根県松江県土整備事務所）から松江市教育委員会文化財課に対して埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。

平成17年12月に島根県教育委員会と松江市教育委員会が現地踏査を実施した結果、春日神社南西側の山林山頂部で方墳5基を発見した。さらに中海に面した斜面部でも平坦地が2箇所みられ、住居跡等の遺構の存在が推定された。

また、春日神社から東へ約400mの地点で行った試掘調査では、縄文時代から古墳時代にかけての土器片や黒曜石片を検出した。ピット状のプランも見られたことから遺構の存在する可能性も推測され、検出された遺物の年代構成から隣接する周知の遺跡「寺ノ脇遺跡」の範疇に含まれるものとして取り扱うこととした。

これらの結果をもとに、松江市教育委員会と島根県松江土木建築事務所は遺跡の保護について協議を行ったが、計画変更は困難との結論に達し、発掘調査を実施することとなった。



第2図 遺跡位置図 (S=1:25,000)

第2章 位置と環境

春日山古墳群は島根県松江市手角町春日山548-1に、寺ノ脇遺跡は同じく手角町字町並72-3に所在する。両遺跡とも島根半島北東端の中海沿岸に位置している。中海沿岸のこの地域は、急峻な丘陵が海岸線近くまでせまり、その谷間に水田と集落が存在している。寺ノ脇遺跡は、谷間が中海沿岸に向かって開けたところ、谷口に存在し、50～60m南に中海がひろがる。

春日山古墳群は、標高30m程の小高い丘陵上の遺跡である。尾根の頂上からは、中海から大根島、境水道、遠くは伯耆富士と呼ばれる大山の雄姿を一望することができる。

縄文時代 中海北岸のこの地域一帯には、縄文時代の遺跡が多く存在する。海蝕洞窟を利用した洞窟遺跡として、サルガ鼻洞窟住居跡（4）は特に有名である。4穴の洞窟からは縄文土器や骨角器、貝輪、人骨などが出土している。また、この遺跡の北東には権現山洞窟遺跡、小浜洞窟遺跡が存在する。他に池ノ尻遺跡（5）や寺ノ脇遺跡（3）、柳瀬遺跡からも縄文土器が出土し、夫手遺跡（7）からは縄文時代前期初頭の漆液容器が出土している。

中海の豊富な魚介類と山から採取した木の実などで、縄文人にとっては良好な生活の場所であったことが遺跡の多さからも垣間見られる。

弥生時代 夫手遺跡や権太作遺跡（6）、寺ノ脇遺跡、杉戸遺跡（14）から弥生土器が出土しているが、数は少ない。手角町から南西側の中海沿岸には本庄町があり、的場遺跡が知られている。的場遺跡からは弥生時代後期の住居跡が検出され、周辺の遺跡から弥生土器が出土している。弥生時代になると人々の生活の場が南の方に移動した可能性も推測される。

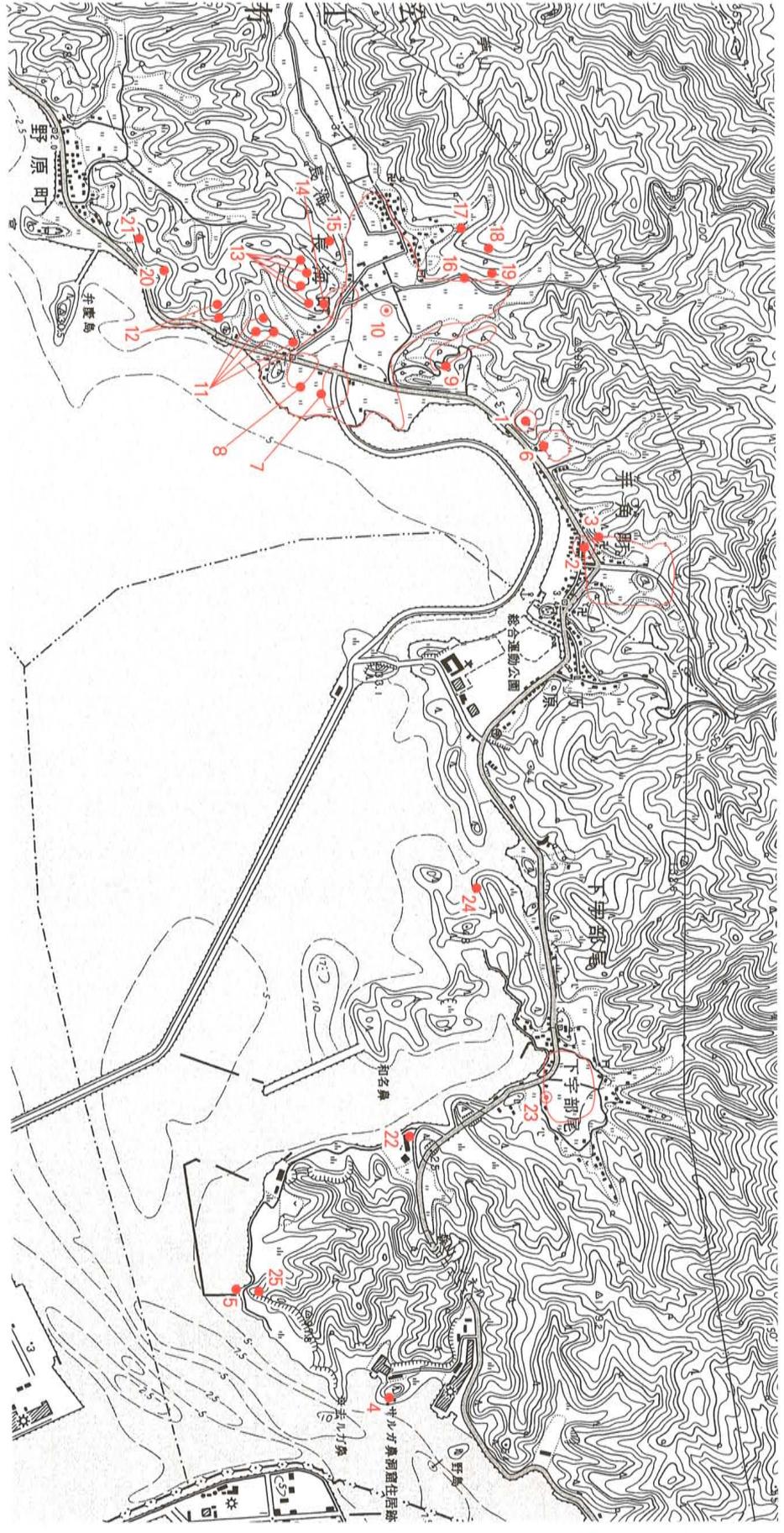
古墳時代 古墳時代になると、中海周辺の丘陵には古墳が造られるようになる。前期の古墳として有名なのは、中海西岸の丘陵に造られた八日山1号墳である。春日山古墳群より直線距離にして南西に4.6kmの八日山1号墳からは、三角縁神獣鏡が出土し有力な支配者の墓と考えられる。他に、出土品はないが藤田古墳群（11）の2号墳も前期の古墳である。藤田古墳群の西側には淵切古墳群（13）があり、全長20～30mの前方後円墳や前方後方墳があり、墳丘の特徴などから、中期に築造されたものと思われる。堀越古墳群（9）の8号墳からは石棺が出土し、出土遺物から、中期頃の古墳と考えられる。善尾古墳（17）、堀越7号墳は後期の古墳で、両古墳からは、石棺式石室の一部がみつまっている。長海川流域周辺の丘陵には多くの古墳が存在し、古墳を造ることのできた有力者の存在が窺われる。

夫手遺跡、寺ノ脇遺跡、杉戸遺跡からは古墳時代前期から中期の遺物が出土した。生活用具も多く、周辺に集落跡の存在を示唆している。

歴史時代 寺ノ脇遺跡から奈良時代の土師器や須恵器が出土しているが、他に出土例は知られていない。長海川流域と下宇部尾に条里制の痕跡が残されている。また、下宇部尾の尾崎遺跡では、奈良時代の公的な施設と考えられる建物跡が調査されている。

参考文献 山本清「美保関町サルガ鼻・権現山洞窟住居跡について」『島根県文化財調査報告書 第三集』島根県教育委員会 1967年
島根県文化財愛護協会『寺ノ脇遺跡』島根県土木事務所 1969年
松本岩雄「原始から古代へ」『郷土誌 ふるさと本庄』本庄地区町内連合会・本庄公民館 1994年
島根県美保関町「第1章 原始・古代の美保関」『美保関町誌 上巻』美保関町誌編さん委員会1986年

- 1. 春日山古墳群
- 2. 寺ノ脇遺跡
- 3. 寺ノ脇遺跡 洞窟住居跡
- 4. サルの刀鼻遺跡
- 5. 池の尻遺跡
- 6. 権太作遺跡
- 7. 夫手遺跡
- 8. 柳瀬遺跡
- 9. 姫越古墳群
- 10. 長海条里制遺跡
- 11. 藤田古墳群
- 12. 藤田南古墳群
- 13. 刈切古墳群
- 14. 杉戸遺跡
- 15. 御供田古墳
- 16. 善尾遺跡
- 17. 善尾古墳
- 18.
- 19. 舟森古墳
- 20. カンタ遺跡
- 21. カンタ遺跡 群
- 22. 早田遺跡
- 23. 下宇部尾冬里制遺跡
- 24. 埴焼鼻遺跡
- 25. 各霊塔上遺跡



第3図 周辺の遺跡 (S=1:25,000)

第3章 調査の概要

春日山古墳群・寺ノ脇遺跡は松江市手角町に所在する。

春日山古墳群は春日山神社の南西側丘陵に位置し、北東から南西にかけて尾根が続いている。本遺跡の発掘調査は平成17年におこなわれた現地踏査の結果から、遺構の存在が推定される箇所について調査をおこなうこととなった。

尾根と尾根から続く南西側緩斜面、南側斜面の一部をA区、緩斜面から南西に下った斜面の2段の平坦面をB区、尾根の中央から南へ下った斜面の2段の平坦面をC区として調査をおこなった。当初、南西側緩斜面は調査範囲に入っていなかったが、遺構の存在が窺われたため、トレンチ調査をおこなった。その結果、土壇墓が確認され、全面を調査することとなった。また、B区、C区についても同様にトレンチ調査をおこなった結果、ピットや遺物包含層が確認されたため、全面調査をおこなった。

木の伐採後、調査をおこなうことになったが、調査区内に廃土置き場がなく、廃土の持ち出しも困難であったため、尾根の南側斜面を削り、パイロット道路を造って廃土置き場とした。

平成19年7月2日から平成20年4月30日にかけて調査をおこなった。

調査の結果、古墳7基、土器棺墓、土壇墓2基、土坑5個、掘立柱建物跡2棟を検出した。

寺ノ脇遺跡は国道431号と手角町内にはいる旧道との間に位置する雑種地である。調査区は分割して調査をおこなうこととなり、平成19年度調査地をI区、平成20年度調査地をII区として調査をおこなった。調査は分割しておこなったが、本報告書においては一括して報告する。

I区の調査を平成19年5月1日から同年6月29日まで、II区の調査を平成20年9月8日から同年11月17日まで実施した。

第1節 春日山古墳群

1. A 区

A区は標高26.0m～31.0mの丘陵と南西側緩斜面、南側斜面の一部である。丘陵の南側は北側に比べると急な斜面である。

伐採終了後、調査前の地形測量をおこなった。その後、土層観察用の畦を墳丘中央で十字に交差するように設定し、調査をおこなっていった。表土から地山まで0.3～0.5m程度で、地山は砂質の淡黄色土や橙色から橙褐色土に白色、桃色のブロックが混じった土層で、墓壙内埋土と区別がつきにくく、遺構検出には苦慮した。古墳は北東側から尾根にそって、調査した順に1号墳、2号墳、3号墳…とした。

1号墳 (第7、8図)

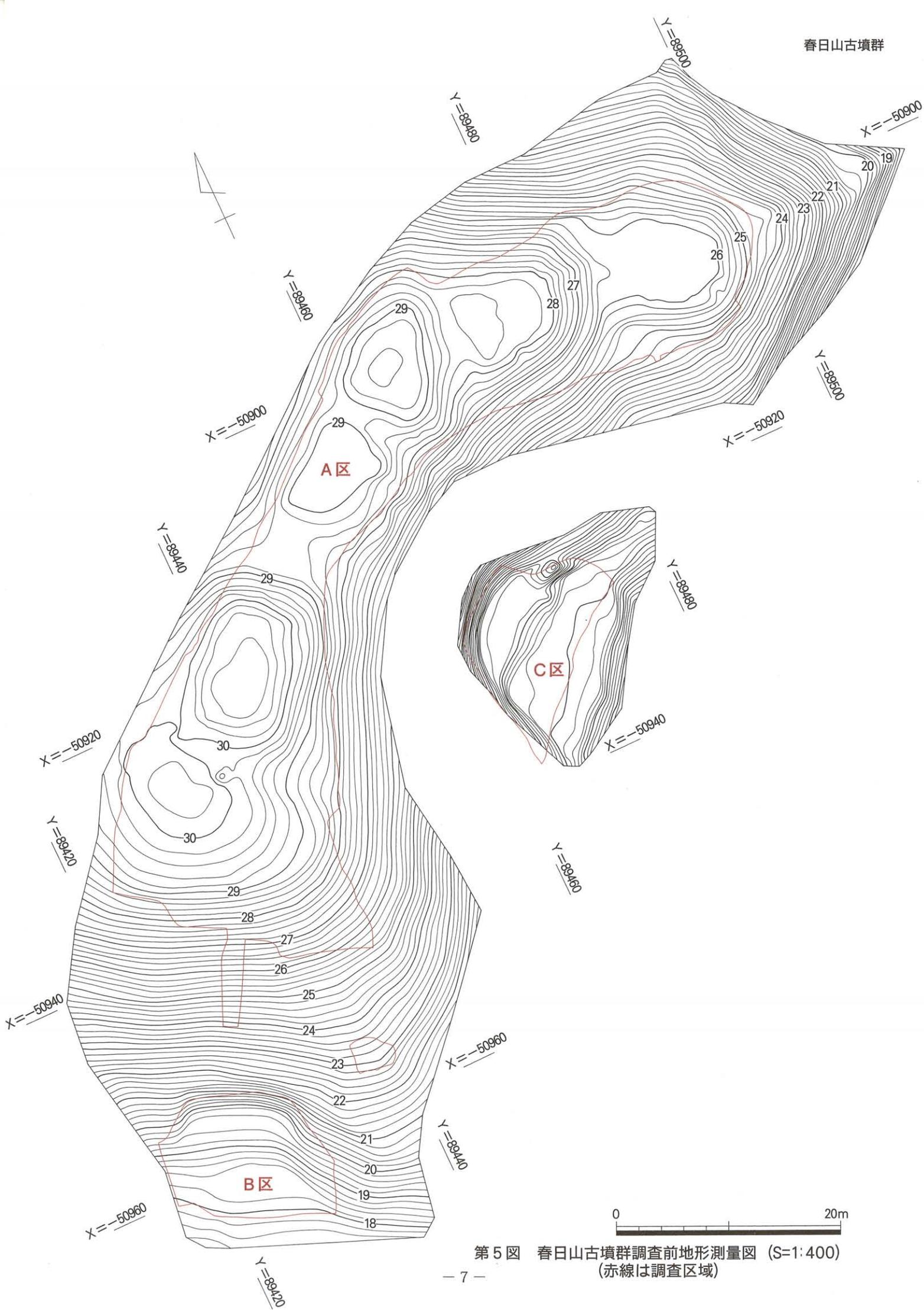
尾根の北東端に位置する。東西15.3m、南北13.9m、墳頂標高25.9mを測る方墳である。墳丘の南東側は根によって攪乱され、南側は7号墳築造時に削平されたと考えられる。2号墳西側土層断面には旧表土がみられるが、1号墳土層断面にはみられず、旧表土を残さず地山まで削り出し、西側だけに薄く盛土をして墳丘を築造している。1号墳は2号墳墳頂から約2m低く、2号墳から5号墳を仰ぎみる場所に立地している。2号墳との間に区画溝が掘られていた。幅2.5m、1号墳平坦面からの深さ0.4mを測る。土層断面から2号墳との新旧関係はわからなかった。

墳頂平坦面から3基の主体部を検出した。墳頂平坦面に比べて、主体部が占める面積割合が大きい。3基の主体部は長軸を北東から南西方向にとり、切り合っている。中央の主体部を第1主体部、第1主体部の南東側を第2主体部、2号墳側を第3主体部として調査をおこなった。土層断面から、3基のうち中央の主体部が最初に造られ、そのあと両側の主体部が造られたことは確認できたが、両側の主体部の新旧関係はわからなかった。

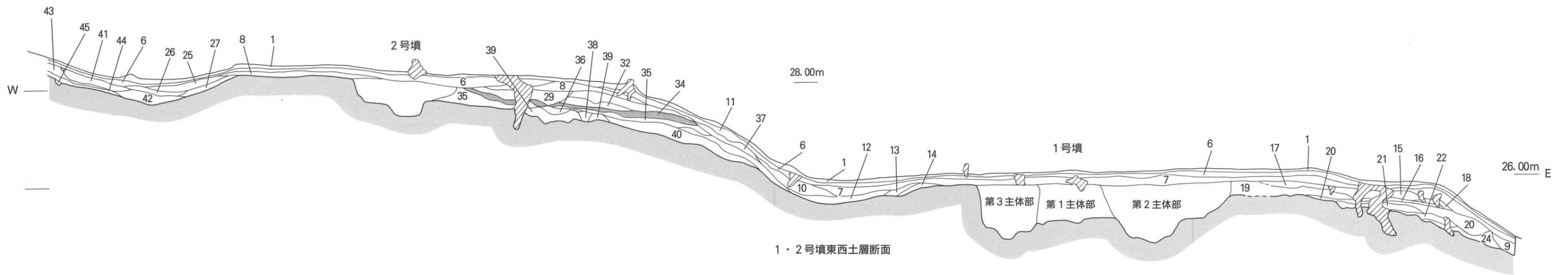
第1主体部 (第8図) 3基の主体部の中央の主体部である。長辺側壁は第2、第3主体部掘削時に失われたと思われるが、主体部土層断面、第27層(淡黄色土)は壁の一部と考えられる。墓壙の規模は長辺4.1m、短辺1.6m、検出面からの深さ0.8mを測る。主軸方位はN-37°-Eである。墓壙底には幅0.2～0.35m、深さ0.1mの溝が長楕円形状に掘られ、墓壙底は緩やかな弧を描くように窪んでいた。刳抜き木棺を据え、棺台の周囲を掘り窪めたものと考えられる。土層断面から棺の痕跡、第26層(淡橙褐色土)を確認した。棺の内法は長辺2.55m、短辺0.65m、土層断面から推定される棺の深さは0.5m程度と考えられる。墓壙底の高さから、頭位は北東側と推測される。第1主体部から遺物は出土していない。

第2主体部 (第8図) 第1主体部の東側に隣接する主体部である。墓壙の規模は長辺3.95m、短辺2.5m、検出面からの深さ1.15mを測る。主軸方位はN-31°-Eである。南東側だけが2段掘りで、墓壙底まで深いため、墓壙を造る際の足場であった可能性も考えられる。2段目の掘り込みは長辺3.0m、短辺0.95mを測る。壙底面には長辺2.0m、短辺0.3～0.5mの浅い壙が掘られ、この壙は棺を据える際に安定させるためものと考えられる。

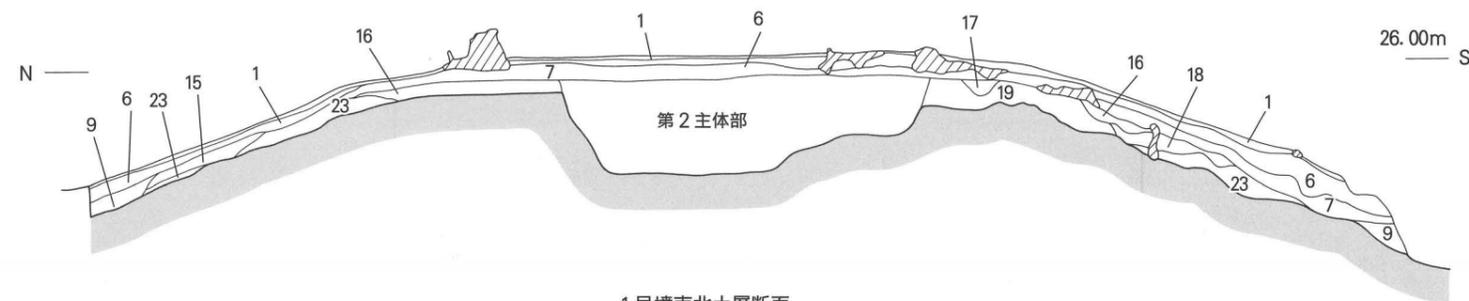
土層断面から棺の痕跡、第8層(浅黄橙色土)を確認でき、刳抜き木棺と考えられる。棺の長辺側



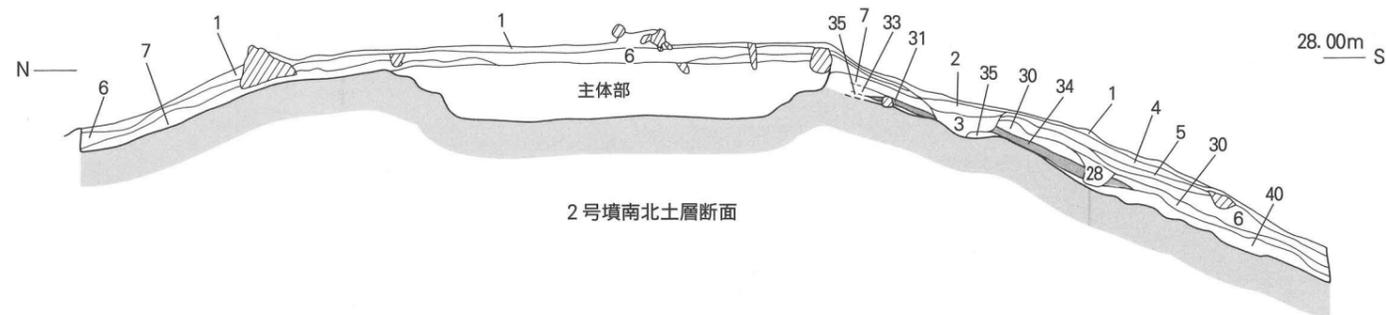
第5図 春日山古墳群調査前地形測量図 (S=1:400)
(赤線は調査区域)



1・2号墳東西土層断面



1号墳南北土層断面

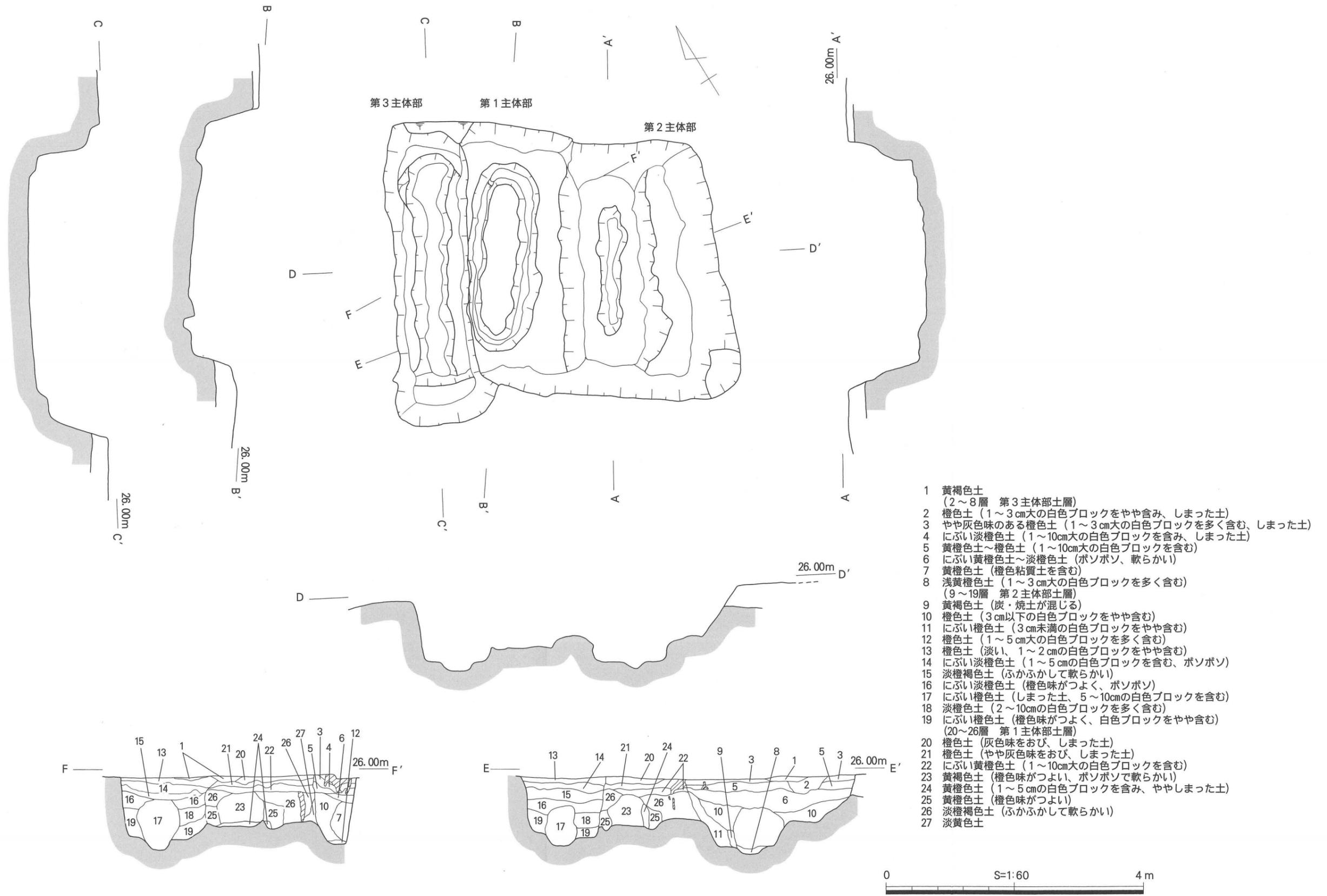


2号墳南北土層断面

1. 表土
2. 灰橙色土
3. 橙色～明橙色土 (ボソボソ)
4. 明褐色土
5. 暗灰色土
6. 黄褐色土
7. にぶい橙色土
8. ややにぶい橙色土
9. 淡橙褐色土
10. 灰色味のある黄褐色土 (炭を含む)
11. 橙褐色土 (橙色が強い)
12. 橙色～にぶい橙色土 (炭を含む)
13. 橙土 (やや灰色味をおびる)
14. 橙褐色土
15. 明褐色土 (5 cm以下の白色ブロックを含む)
16. 明褐色土 (1～3 cmの白色ブロックを含む)
17. 暗黄褐色土
18. 橙色～ややにぶい橙色土
19. 明褐色土
20. 暗褐色土 (白色ブロックを少量含む)
21. 橙褐色土 (白色ブロックを少量含む)
22. 明橙褐色土
23. 橙土 (10cm大の白色ブロックを含む)
24. 褐色土 (軟化した白色ブロックを含む)
25. 橙色～黄褐色土
26. 橙土 (やや灰色味をおびる)
27. 橙土 (第26層よりやや明るい)
28. にぶい黄色土
29. 暗黄褐色土 (やや黒味をおびる)
30. 黄褐色～にぶい橙色土
31. 明褐色土 (3 cm以下の白色ブロックを含む)
32. 黄褐色～黄褐色土 (やや粘質)
33. 黄褐色土
34. 暗黄褐色土 (黒味をおびる、旧表土)
35. 黄色粘質土 (炭をやや含む)
36. 橙褐色粘質土
37. にぶい暗褐色土 (3 cm以下の白色ブロックを少量含む)
38. にぶい淡橙色土
39. 橙褐色粘質土
40. 橙褐色粘質土 (白色ブロックを含む)
41. 暗赤褐色土 (粘質、炭を含む)
42. 橙土 (3～4 cmの白色ブロックを多く含む)
43. 橙褐色土 (やや灰色味をおびる)
44. 橙褐色土 (橙色が強い)
45. 赤褐色土 (土器棺墓の埋土)



第7図 1・2号墳土層断面図



第8図 1号墳第1・第2・第3主体部実測図

内法わからないが、短辺側は0.5mである。頭位は墓壙底の高さが南西側に比べて、北東側がやや高く、北東側と推定される。第2層（橙色土）から土師器の細片が出土した。この土器は埋葬後に供献された土器と思われるが、器種は不明である。

第3主体部（第8図） 第1主体部の西側（2号墳側）に隣接する二段掘りの主体部である。墓壙の規模は上面で、長辺4.6m、短辺1.6m、検出面からの深さ1.1mを測る。主軸方位はN-23°-Eである。墓壙の東側は第1主体部の壁を掘削して掘り込んでいる。2段目における墓壙は狭長で、長辺3.62m、短辺0.6m、深さ0.1~0.15mを測る。

土層断面から刳抜き木棺の痕跡を検出した。棺の長辺側内法はわからないが、短辺側内法は0.45mを測る。長軸は2段目墓壙の辺縁と同じぐらいと考え、3.5m前後の長い棺が納められていた可能性も窺われる。埋土から遺物は出土していない。

2号墳（第7、9図）

1号墳の西側に位置する。墳丘は、西側と北側は地山を削り出し、南側と東側は旧表土を一部残し、0.2~0.3mの厚さで盛土をして築造している。墳丘の規模は東西14.0m、南北13.8m、墳頂標高は28.2mを測る方墳である。

墳丘の東側と西側で区画溝を検出した。1号墳と3号墳間は浅いU字状の溝によって区画され、3号墳側の溝は幅4.7m、墳丘平坦面からの深さ0.6mを測る。3号墳側溝の土層断面から、3号墳築造後、溝がある程度埋った後に2号墳の溝が掘られたと考えられ、2号墳が3号墳より新しいと推測される。

表土より0.2m程下げた面で掘り方を検出し、主体部は尾根に直交して造られている。

主体部（第9図） 主体部は二段掘りの墓壙で、平面形は長方形を呈し、規模は長辺4.6m、短辺2.1m、検出面からの深さ0.8mを測る。主軸方位はN-8°-Eである。墳丘平坦面の面積に対して、大きな墓壙が掘られている。2段目の墓壙は長辺4.0m、幅0.7~1.0m、深さ0.2mを測る。墓壙底は平坦で、わずかに北側が高くなっており北側が頭位であったと考えられる。

土層断面から棺は箱式木棺と考えられる。推定される棺の規模は、箱式木棺の縁部にあたる第13層の内側で計測して、長辺3.0m、短辺0.53mとなる。棺材の痕跡は確認できなかったが、土層断面から棺内がある程度、土で埋るまで棺材が残っていたと推測され、棺身の高さは0.5m程であったと思われる。第15層は暗黄褐色粘質土で墓壙底の整地土と考えられる。

2号墳に伴う遺物は出土していない。

3号墳（第10、11図）

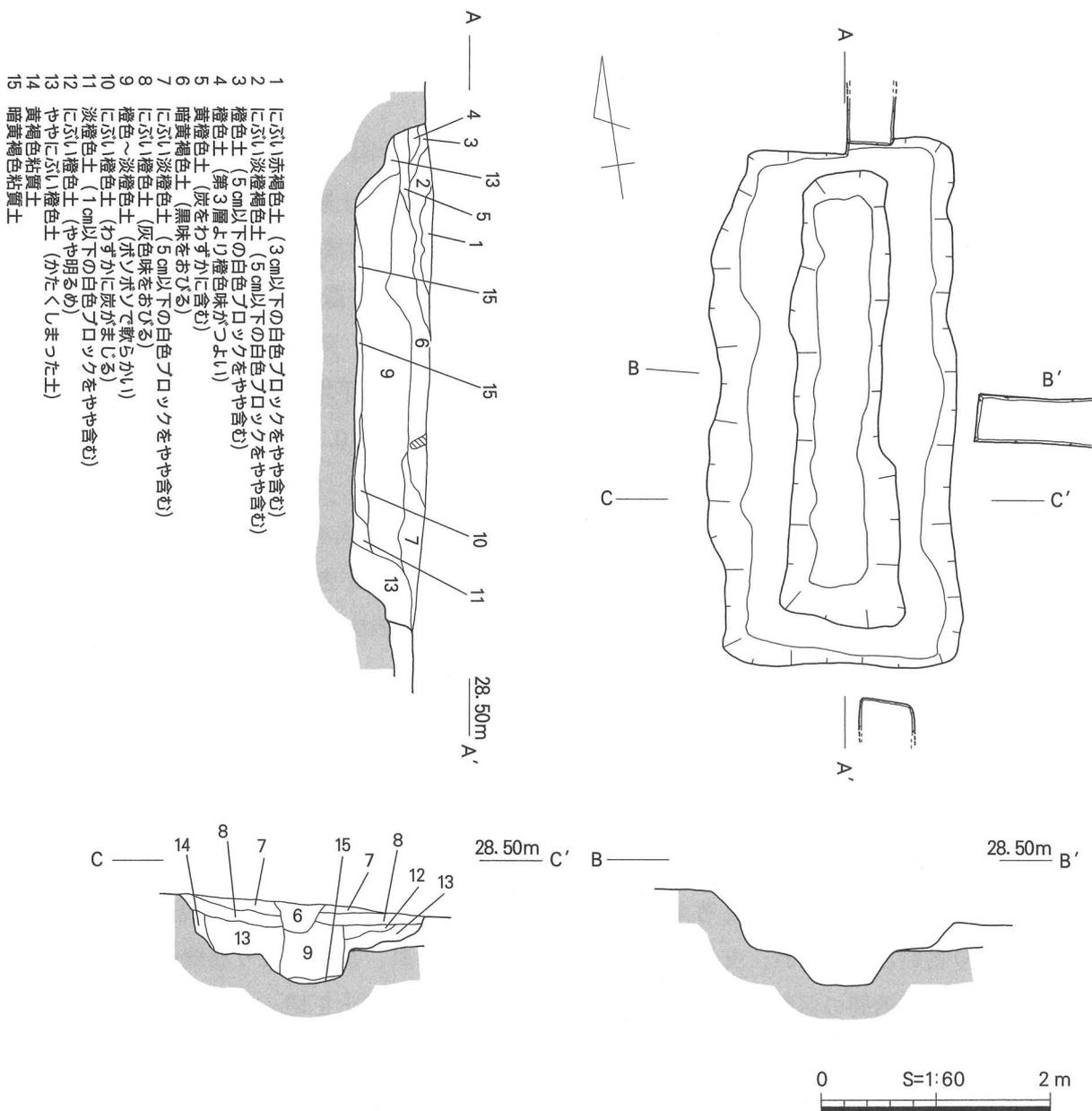
2号墳の西側に位置する。土層断面に旧表土はみられず、地山面まで削り出し、墳丘を造るために南側に盛土をして、墳丘を築造している。墳丘の規模は東西13.5m、南北11.0m、墳頂標高29.2mを測る。墳丘は築造時には方墳であったと考えられるが、現状は台形状を呈している。前述したように、3号墳は2号墳より古いと考えられ、2号墳の溝を造る際に削平され、現状のような墳形となった可能性も考えられる。3号墳間の区画溝は、土層断面から4号墳の溝の埋土を切って造られており、4号墳より3号墳が新しいと推測される。溝は幅3.0m、深さ0.7mを測り、断面U字状を呈する。

尾根に直交する主体部を1基検出した。主体部の南西側は倒木痕によって崩壊している。

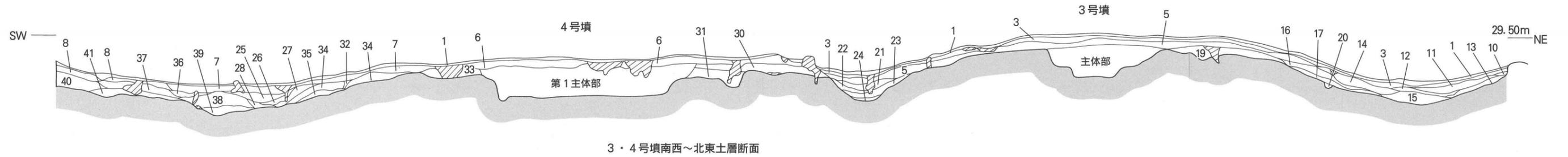
主体部 (第11図) 2段掘りの墓壇である。規模は長辺3.55m、短辺2.55m、検出面からの深さ0.7mを測る。主軸はN-1°-Wである。墓壇の南側は2段掘りであるが、北側は3段になっており、作業する際の足場であった可能性も考えられる。2段目(一部3段目)の墓壇は長辺2.0m、短辺1.3m、深さ0.2mを測る。土層断面から棺の内法は長辺1.35m、短辺0.8mであったと推測される。墓壇底のレベルは北側がやや高く、頭位は北側であったと考えられる。主体部から遺物は出土していない。

出土遺物 (第12図) 2号墳との間の区画溝の埋土(第11層 橙色~黄橙色土)から、土師器の甕片と鉄製品の茎が出土した。土層断面からこの土層は3号墳に伴う溝の埋土と考えられ、3号墳の出土遺物として掲載した。

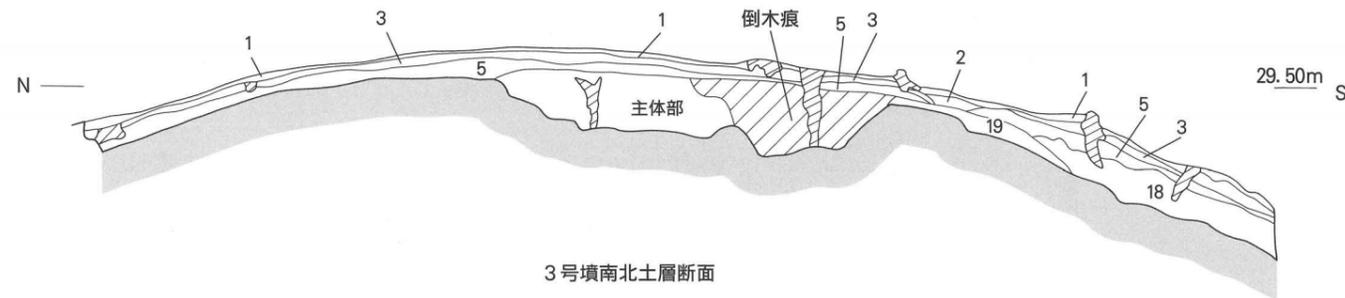
第12図の1は土師器の甕片である。頸部から胴部の破片で、外面はハケ目、内面は工具による縦方向の削りをしている。2は鉄剣などの茎と考えられ、目釘穴はみられない。残存長8.0cm、最大幅1.1cm、最大厚0.6cmを測る。



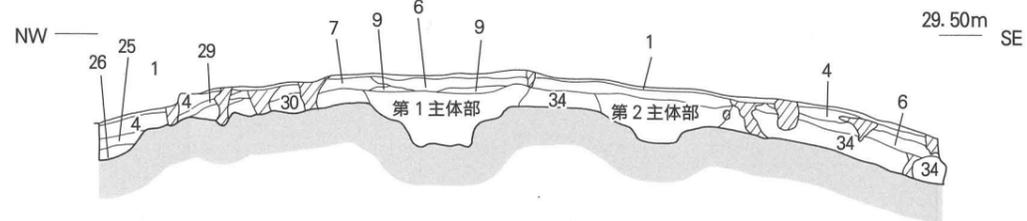
第9図 2号墳主体部実測図



3・4号墳南西～北東土層断面

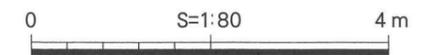


3号墳南北土層断面

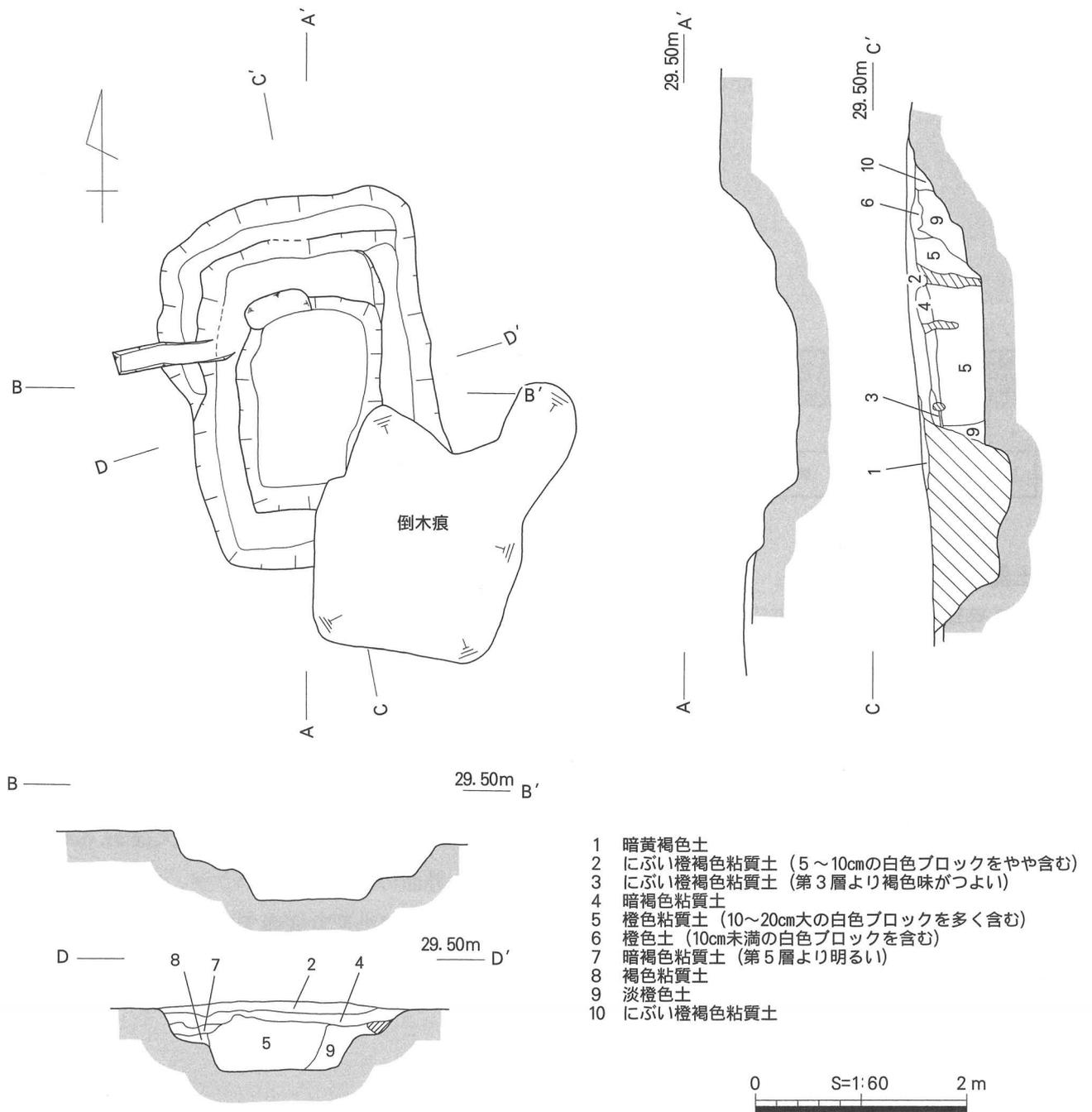


4号墳北西～南東土層断面

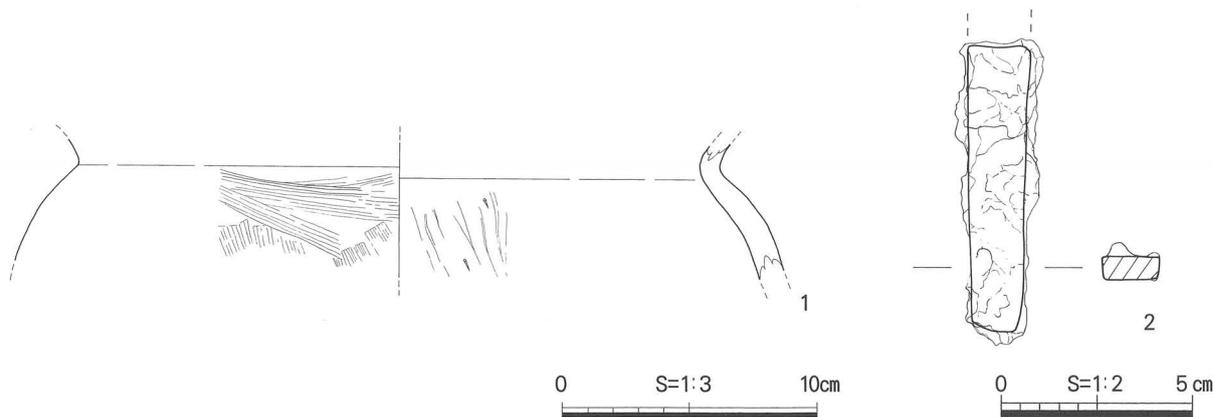
1. 表土
2. 灰色土
3. 黄褐色土
4. にぶい黄橙色～橙色土
5. 黄橙色土
6. やや暗い橙色土
7. にぶい黄橙色土
8. 浅黄橙色土 (炭をやや含む)
9. 明橙色砂質土
10. ややにぶい橙色土
11. 橙色～黄橙色土
12. 橙色土 (やや灰色味をおびる)
13. 橙色土 (第12層よりやや明るい)
14. 暗赤褐色土 (粘質、炭を含む)
15. 橙色土 (3～4 cmの白色ブロックを多く含む)
16. 橙褐色土 (やや灰色味をおびる)
17. 橙褐色土 (橙色味が強い)
18. にぶい暗橙色土
19. にぶい橙色土 (しまった土)
20. 赤褐色土 (土器棺墓の埋土)
21. 暗黄橙色土 (やや灰色味をおびる)
22. 黄橙色土 (橙色味が強い)
23. 明赤褐色土 (やや粘質)
24. 明橙色土
25. 淡灰黄褐色土 (炭を含む)
26. にぶい黄褐色土 (やや灰色味をおびる)
27. にぶい橙褐色粘質土 (やや灰色味をおびる)
28. 黄褐色粘質土
29. にぶい黄橙色土
30. にぶい橙色粘質土
31. にぶい黄橙色粘質土
32. にぶい褐色粘質土
33. 浅黄橙色土
34. 橙色粘質土と明黄褐色土の混合土
35. 明褐色土
36. 明黄褐色土 (炭をやや含む)
37. にぶい橙色粘質土
38. 明黄橙色土
39. 明黄褐色土 (桃色ブロックをやや含む)
40. にぶい橙色土 (褐色味が強い)
41. 明橙色土 (やや砂質)



第10図 3・4号墳土層断面図



第11図 3号墳主体部実測図



第12図 2・3号墳間溝出土遺物実測図

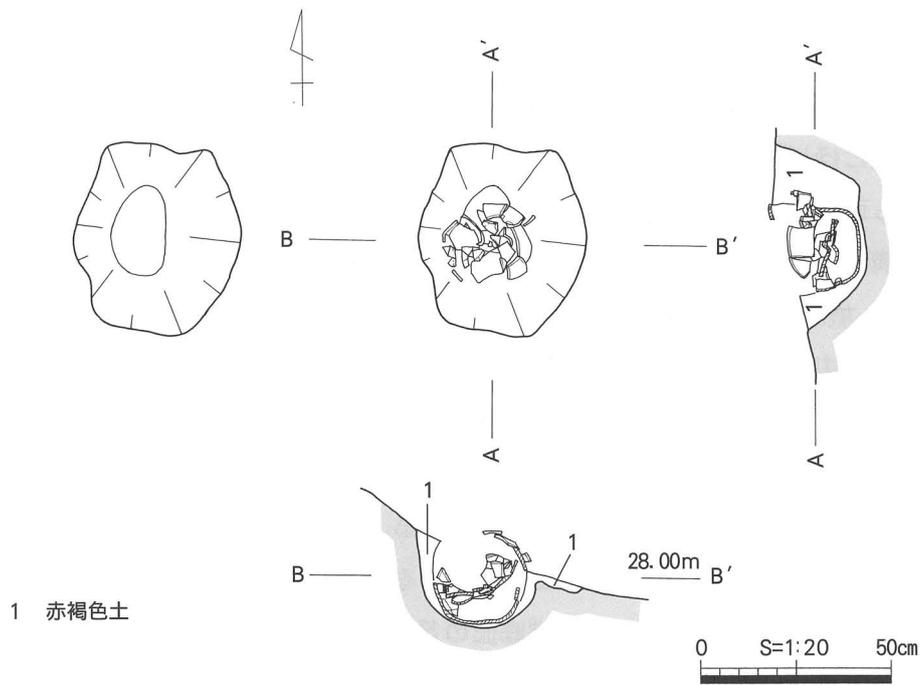
2・3号墳間溝出土遺物

挿図 番号	種類	器種	法 量 (cm)			色調		調整		形態・文様	備考
			口径	頸部径	器高 (残高)	内面	外面	内面	外面		
1	土師器	甕	—	25.2	5.5	暗褐色	暗褐色	ヘラケズリ	ハケメ		
2	鉄製品	茎	残存長8.0	最大幅1.1	最大厚0.6		茶色				

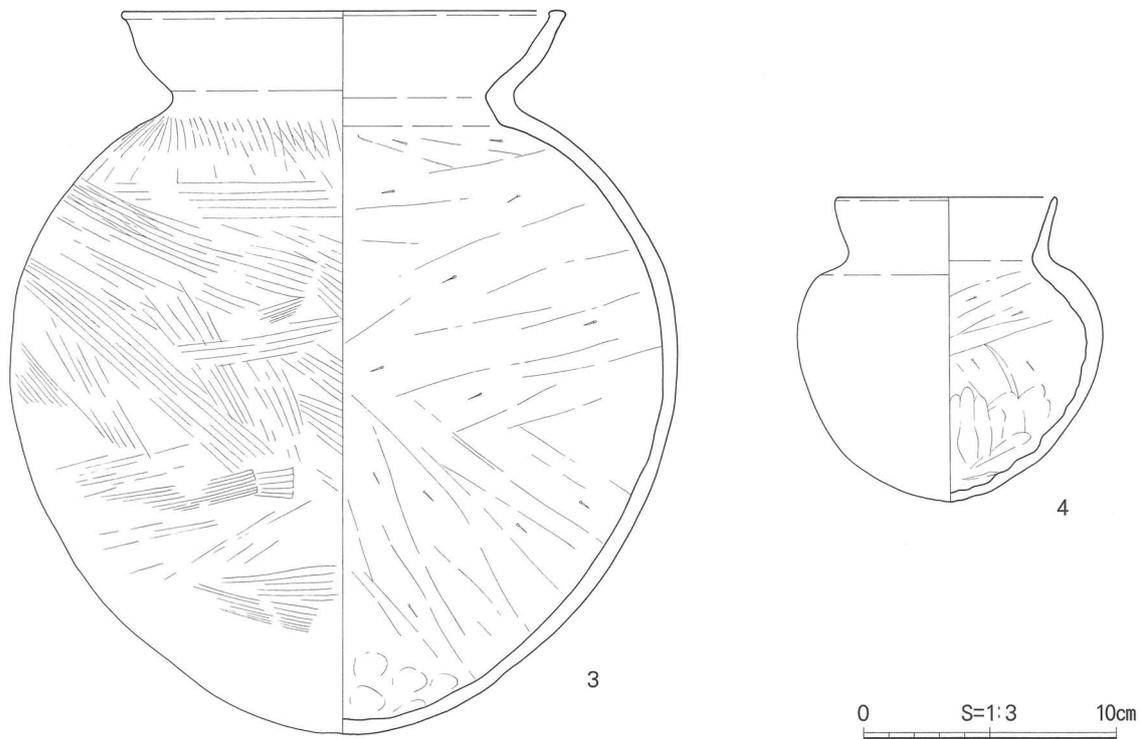
土器棺墓 (第13、14図)

3号墳東側墳裾で検出した楕円形状の土坑に土師器甕を納めた土器棺墓である。標高は28.13m、規模は南北0.5m、東西0.44m、深さ0.25mを測る。2、3号墳間トレンチ掘削時に検出した遺構で、発見時には土器の一部が壊れていた。甕の口縁を北に向けて倒し、その口縁を小型丸底壺の口縁で蓋をしていた。墳の大きさからすると、乳幼児（嬰兒）を埋葬したものと考えられる。また、3号墳の墳裾から検出されたことから、3号墳の被葬者に関わりのある者ではなかろうか。

第14図の3は単純口縁のいわゆる布留甕で、口径17.8cm、器高29.0cm、胴部最大径26.6cmを測る。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部に平坦面をもつ。外面の調整は粗いハケメ、内面は斜め方向のケズリが施され、底部付近に指頭圧痕がみられる。第14図-4は小形丸底壺で、口径8.8cm、器高12.1cm、胴部最大径12.1cmを測る。外面は風化していて調整は不明であるが、内面にはケズリと指ナデの痕がみられる。



第13図 土器棺墓実測図



第14図 土器棺墓出土遺物実測図

土器棺墓出土遺物

挿図 番号	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態・文様	備考
			口径	頸部径	器高 (残高)	内面	外面	内面	外面		
3	土師器	甕	17.8	13.6	29.0	茶褐色	明赤褐色	ヘラケズリ 指頭圧痕 ナデ	ナデ・ハケメ		布留系
4	土師器	小形丸底壺	8.8	7.9	12.1	橙褐色	橙褐色	ヘラケズリ 指ナデ ナデ	ナデ、指おさえ		

4 号 墳 (第10、15図)

3号墳の南西側、尾根上の屈曲点に位置する。墳丘は南北9.6m、東西11.8m、墳頂標高28.8mを測る方墳で、3号墳とほぼ同じ高さで並んでいる。旧表土はみられず、墳丘の西側から北側は地山を削り出し、東側から南側にかけては地山面まで削り、盛土をして墳丘を築造している。

5号墳との間の溝は、土層断面から5号墳の周溝がある程度埋ってから掘られたと推測され、幅1.5m、深さ0.5mを測る。墳丘平坦面から2基の主体部を検出した。主体部は長軸を南西から北東側にとって並んでいた。北側の主体部を第1主体部、南側を第2主体部として調査をおこなった。土層断面から新旧関係はわからなかったが、第1主体部が平坦面中央にあるのに対して、第2主体部はそれよりやや南寄りにあり、第1主体部の後に第2主体部が掘られた可能性が考えられる。

第1主体部 (第15図) 2段掘りの墓壇で砂礫床を有する。墓壇は長辺4.25m、短辺1.85m、検出面からの深さは0.55mを測る。主軸方位はE-42°-Nである。この主体部では土層断面から木棺の痕跡を検出しており、副室の存在も確認した。墓壇底面の長辺側には、幅5cm、深さ4cmの浅く幅の狭い溝が、南西側小口とその小口から0.55m内側には、幅0.25m、深さ0.05mの溝が掘られていた。この溝は棺材を置くための溝と考えられる。北東側小口には同じ様な溝はみられないが、土層断面から副室が存在していたと推測される。墓壇内に木棺を組んだ後、中央の仕切りに礫を敷きつめたものと考えられる。主室と2つの副室ともつ主体部である。砂礫床および土層断面から、主室の内法は長辺1.8m、短辺0.47mとなる。主室と副室を合わせて、長辺3.0mとなる。

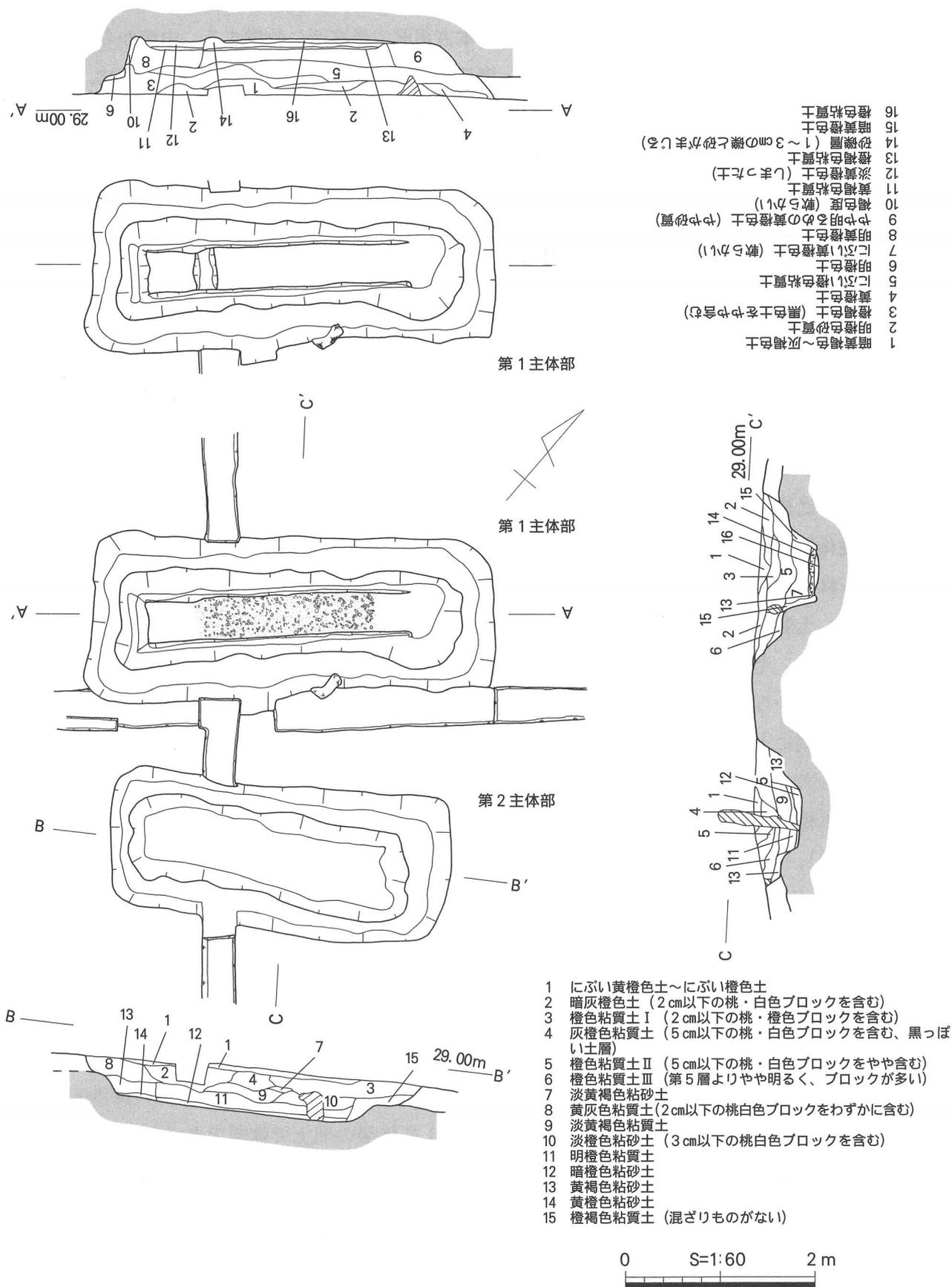
砂礫床は、淡黄色の地山面に橙色粘質土を敷いて整地し、その上に砂礫を敷いている。砂礫層は1～3cmの扁平な礫と砂が半々ぐらいの割合で混じっていた。礫の中から黒曜石の剥片が1片出土している。この砂礫床に使用されていた礫の総重量は5.26kgであった。

頭位は、北東側小口に比べ南西側小口が砂礫床の幅も広く、丁寧な造りであることから、南西側であったと考えられる。

主体部埋土第3層(橙褐色土)から黒曜石の剥片が1片出土している。

第2主体部 (第15図) 2段掘りの墓壇である。規模は長辺2.97m、短辺1.15m、検出面からの深さは0.48mを測る。主軸方位はE-23°-Nである。2段目の墓壇の規模は長辺2.0m、短辺0.6m、深さ0.15mである。土層断面から棺の痕跡が確認され、棺の内法は長辺2.0m、短辺0.48mを測り、箱式木棺と考えられる。墓壇底の高さから、頭位は南西側であったと推測される。

第4層(灰橙色粘質土)から、土師器の細片が出土している。



第15図 4号墳第1・第2主体部実測図

5 号 墳 (第16～18図)

4号墳の南西にあり、墳頂標高は30.4mで本古墳群中最高所に位置する。中海から大根島、遠くは境水道まで見渡せる場所に立地している。墳丘の規模は現状で、南北19.8m、東西13.2mを測り、本古墳群のなかで最大の方墳である。5号墳は立地、規模から考えて、本古墳群の盟主墳と考えられる。

墳丘は土層断面から南西側は地山の削り出しの後、0.2m程度粘質土を盛土している。北側から南側にかけては、旧表土を残して成形し、そのうえに0.1～0.4m程度の盛土をして墳丘を築造している。4号墳との間は幅3.3m、5号墳平坦面からの深さ2.5mの溝で区画され、南西側緩斜面との間は、幅3.6m、墳丘平坦面からの深さ1.0mの溝によって区画されている。

墳頂平坦面から切り合う形で2基の主体部を検出した。2基の主体部は墳頂平坦面の南西側、緩斜面寄りから検出された。長軸を北東から南西にとる二段掘りの墓壇を第1主体部、北西から南東にとる素掘りの墓壇を第2主体部とした。土層断面から、第1主体部の一部を掘り込んで、第2主体部が造られたことが確認された。墳頂平坦面の4号墳側にもさらに別の主体部が存在することが考えられたが、サブトレンチの土層断面や、墳頂平坦面をさらに掘り下げて精査した結果から、この2基の主体部以外に遺構は検出されなかった。

第1主体部 (第17、18図) 二段掘りの墓壇で礫敷きの棺台を有する。墓壇の南西側は第2主体部によって切られている。墓壇は長辺4.3m、短辺2.7m、検出面からの深さ0.5mを測る。主軸方位はN-46°-Eである。土層断面や礫床の検出状況から、墓壇の北東側から南側にかけて後世の攪乱を受けていると考えられた。土層断面から棺の痕跡を検出し、刳抜き木棺(割竹型木棺)と考えられた。

土層観察から埋葬順序は、①二段掘りの墓壇を掘る。②棺身の底の形に合うように、二段目の掘り込みの内側に土を盛る。③土を盛ったところに礫を敷く。④棺身を据えて裏込めをする。と推察された。5cm大の礫が長辺2.5m、短辺0.65mの範囲で敷かれていた。土層断面第12層(明褐色土)は当初、刳抜き木棺の棺身の痕跡と考えられたが、棺身ではなく棺蓋の痕跡と考えられた。また、第18層(淡黄褐色土)、第19層(にぶい淡褐色土)は棺身の小口板がないために棺内に流れ込んだ土層と推察された^{註1)}。土層断面と礫床から棺の内法は長辺2.5m以上、短辺0.5mとなる。墓壇底の高さから、北東側が頭位と考えられる。

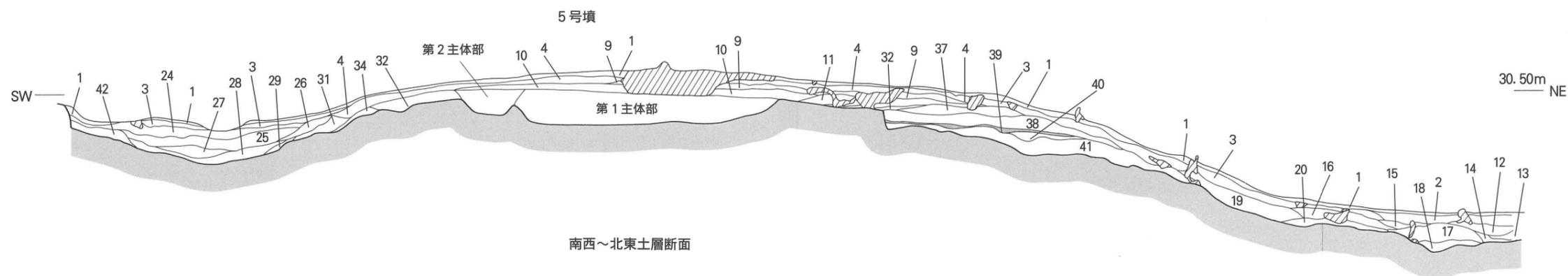
出土した礫の総重量は24.16kgであった。

出土遺物 (第19図) 墓壇底の北東側から刀子(5)が出土した。残存長6.5cm、最大幅1.4cmを測り、刃先を欠いている。茎は棟関がなく刀関だけで、木質が残っていた。

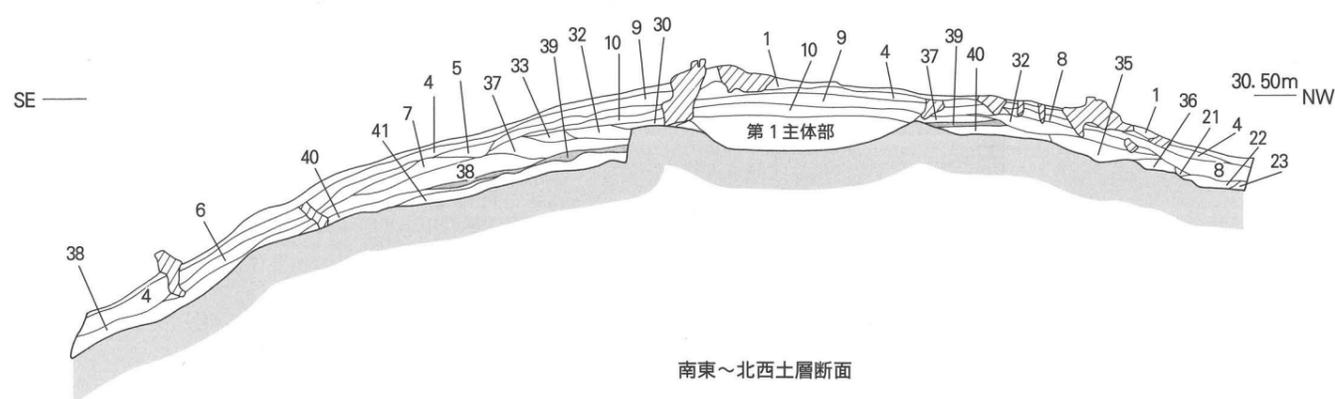
第2主体部 (第17図) 素掘りの墓壇で長辺2.97m、短辺1.15m、検出面からの深さ0.33mを測る。主軸はN-41°-Wである。墓壇の北東側壁面は第1主体部の埋土で軟弱であったためか、第6層(暗褐色粘質土)を貼り付けて、補強している。土層断面から棺の痕跡は確認できなかった。墓壇底の高さから、北西側が頭位であったと考えられる。

出土遺物 埋土中から黒曜石の剥片が2点出土している。

周辺出土遺物 (第20図) 第20図-6は東側溝埋土第19層(にぶい橙色土)から出土した土師器の甕の口縁である。7～10は南西側溝の第27層(淡灰黄褐色土)から出土した遺物である。7と8は土

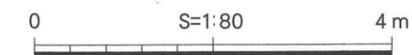


南西～北東土層断面

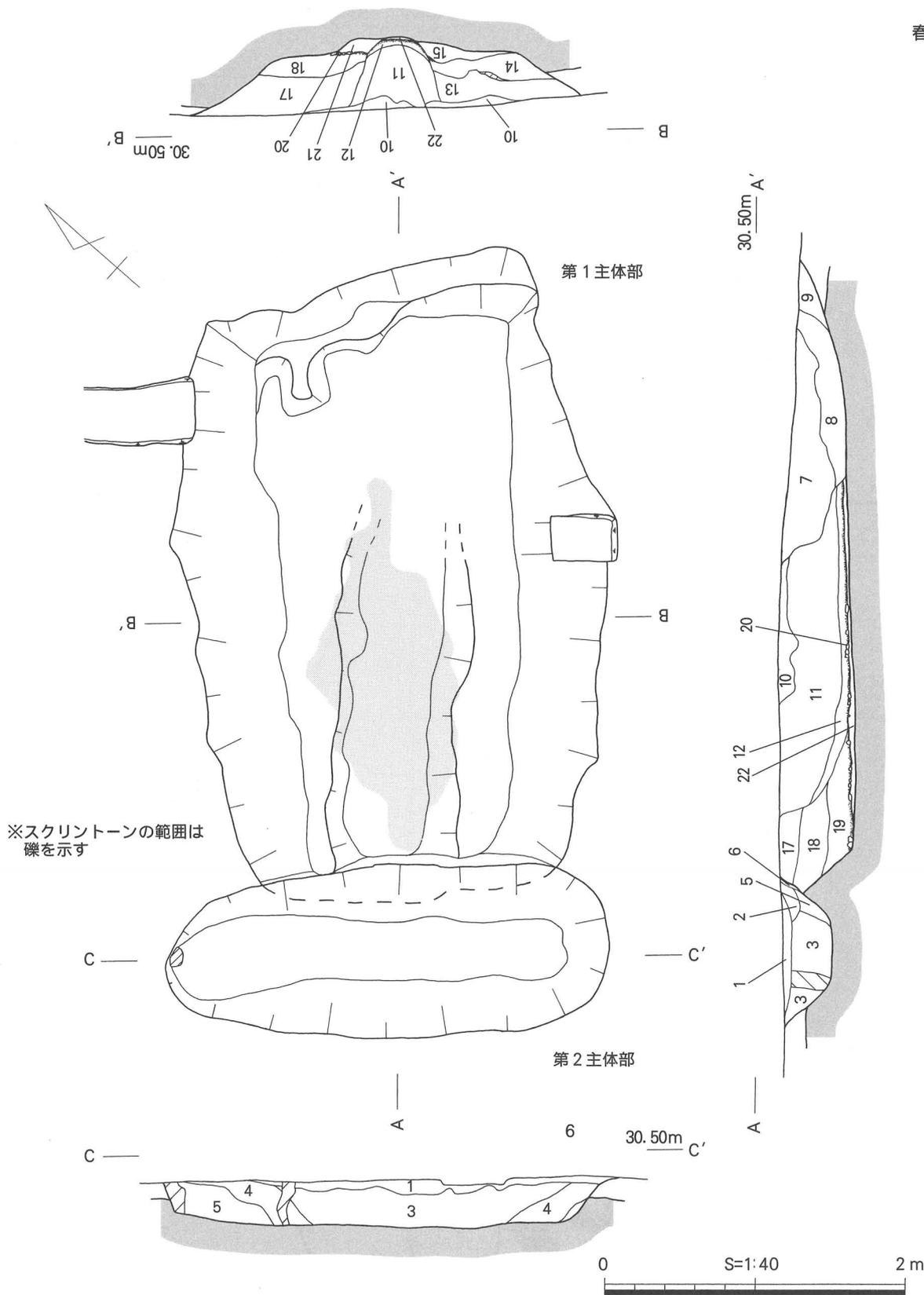


南東～北西土層断面

1. 表土
2. にぶい黄褐色土
3. 黄褐色土
4. 浅黄褐色土
5. 橙褐色粘質土
6. 暗褐色土 (炭をやや含む)
7. 黄褐色土 (軟化した黄色ブロックを含む)
8. 黄褐色粘質土
9. にぶい橙褐色土
10. にぶい橙褐色土 (第5層より褐色味が強い)
11. 橙褐色砂質土 (黄褐色ブロックを含む)
12. 淡灰黄褐色土 (炭をやや含む)
13. にぶい黄褐色土 (やや灰色味をおびる)
14. 黄褐色粘質土
15. 明黄褐色土 (炭をやや含む)
16. にぶい橙褐色粘質土
17. 明黄褐色土
18. 明黄褐色土 (桃色ブロックを含む)
19. にぶい橙褐色土
20. 明褐色土 (やや砂質)
21. 黄褐色土
22. 暗褐色土 (炭を多く含む)
23. 褐色土
24. 暗黄褐色土
25. 暗褐色粘質土 (炭を含む)
26. にぶい橙褐色土 (橙色味が強い)
27. 淡灰黄褐色土 (炭を多く含む)
28. にぶい黄褐色粘質土
29. 淡橙褐色粘質土
30. 明褐色土 (黄色ブロックを含む)
31. 淡褐色～黄褐色土 (黄桃色ブロックを少量含む)
32. 黄褐色粘質土 (黄褐色ブロックを含む)
33. 橙褐色粘質土 (軟化した黄色ブロックを含む)
34. 褐色～明褐色土
35. 黄褐色粘質土
36. 褐色粘質土
37. 橙褐色粘質土 (白色ブロックを少量含む)
38. 明黄褐色土と橙褐色土の混合土 (桃色ブロックを含む、盛土)
39. 淡灰黄色土 (旧表土)
40. 明黄褐色土 (炭を少量含む)
41. にぶい橙褐色粘質土
42. 明褐色土



第16図 5号墳土層断面図

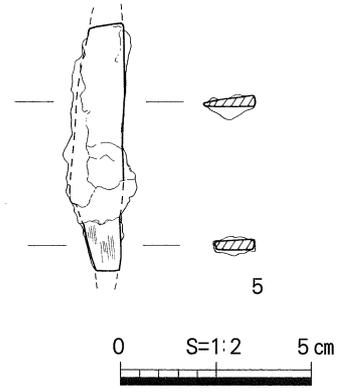


1. 褐色味の強い橙色土 (3 cm以下の黄・桃色ブロックを含む)
2. 黄橙色粘質土 (1 cm以下の軟化した黄・桃色ブロックをやや含む)
3. 黄橙褐色砂質土 (3 cm以下の黄・桃色ブロックを多く含む、明黄褐色土をやや含む)
4. 橙褐色砂質土 (やわらかく、サクサクしている。3 cm以下の黄・桃色ブロックを多く含む)
5. 明黄褐色砂粘土 (2 cm以下の黄・桃色ブロックをわずかに含む)
6. 暗褐色砂質土 (混ざりものなし)
7. 黄橙色粘砂土 (部分的に橙色粘質土を含み汚い。1 cm以下の淡黄色ブロックをやや含む)
8. 明黄褐色粘砂土 (粘質土だが砂質的な所もあり、炭が混じる)
9. 明黄褐色土 (褐色味が強く、3 cm以下の淡黄色ブロックをやや含む)
10. にぶい赤褐色粘質土 (2 cm以下の淡黄色ブロックを含む)
11. 明赤褐色土 (ボソボソ、しまりが無い。4 cm以下の淡黄色ブロックを多く含む)
12. 明褐色土 (フカフカしてやわらかい)
13. にぶい褐色粘砂土 (2 cm以下の淡黄色ブロックをやや含む。わずかに炭が混じる)
14. 明黄色土 (3 cm以下の淡黄色ブロックを含む)
15. 淡褐色粘質土
16. 明黄褐色土 (褐色味が強く、3 cm以下の淡黄色ブロックをやや含む)
17. 第3層より深い明赤褐色土 (しまった土。4 cm以下の大小様々な淡黄色ブロックを多く含む)
18. 淡黄褐色土 (4 cm程の淡黄色ブロックを多く含む、ややしまった土)
19. にぶい淡褐色土 (4 cm程の淡黄色ブロックを多く含む、やわらかい土)
20. 砂礫層 (5 cm大の礫を多く含む)
21. 褐色土 (硬く、しまった土。黄色ブロックを含む)
22. にぶい褐色土

第17図 5号墳第1・第2主体部実測図

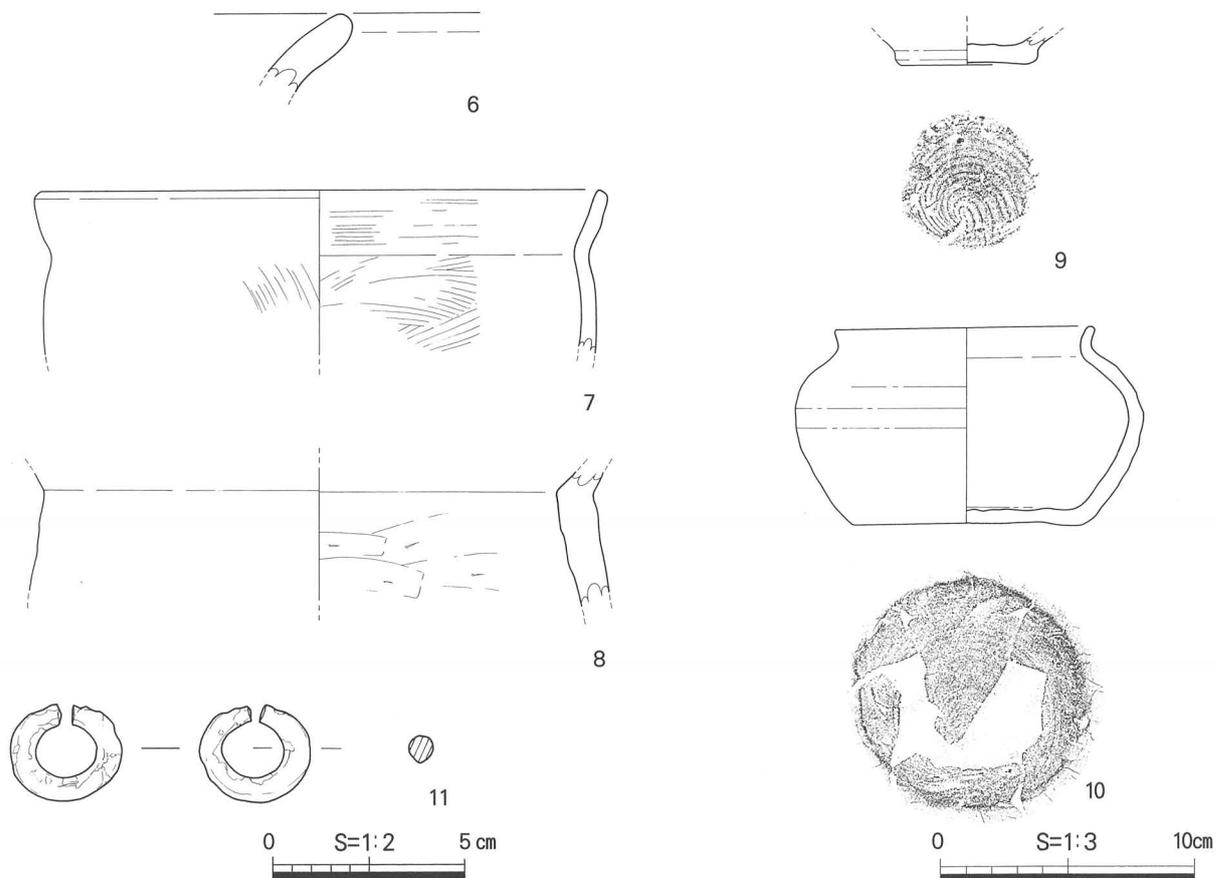


第18图 5号墳第1主体部実測図



第19图 5号墳第1主体部
出土遺物実測図

師器の甕、9は土師器の坏の底部で、回転糸切り痕がみられる。10は須恵器の短頸壺で、底部は回転糸切りである。11は耳環、北西側斜面の第8層（黄橙色粘質土）から出土した。5号墳は墓墳の大きさや埋葬施設から古墳時代前期と考えられる。これらの出土遺物は古墳時代後期から奈良、平安時代のものと考えられ、5号墳に伴うものとは考えにくい。



第20図 5号墳周辺出土遺物実測図

5号墳第1主体部および周辺出土遺物

挿図 番号	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態・文様	備考
			口径	底径・頸部径	器高 (残高)	内面	外面	内面	外面		
5	鉄製品	刀子	最大幅1.2	最大厚0.3	残存長6.5		茶色				茎部に木質が残る
6	土師器	口縁	—	—	3.0	橙褐色	赤褐色	ナデ	ナデ		
7	土師器	甕	21.9	21.1(頸部径)	6.5	茶褐色	褐色	ハケメ ヘラケズリ	ハケメ		
8	土師器	甕	—	21.5(頸部径)	5.3	茶褐色	茶褐色	ヘラケズリ	ナデ		
9	土師器	底部	5.2	—	1.1	茶褐色	茶褐色	回転ナデ	ナデ	回転糸切り痕	回転糸切り痕
10	須恵器	短頸壺	10.3	9.0(底径)	7.9	黒灰色	黒灰色	回転ナデ	回転ナデ	底部・回転糸切り痕	底部・回転糸切り痕
11		耳環	内径1.7	外径2.9	厚さ0.7						緑錆附着、鍍金が僅かに残る

6 号 墳 (第21図)

5号墳の南側墳裾で検出した古墳である。残存する周溝が直線的であることから、方墳であろう。5号墳南側の墳丘や溝を掘削して造られ、5号墳より後に築造されたと考えられる。墳丘の周囲には幅0.5~0.6mの周溝がわずかに確認できた。溝の底と墳丘は高さ0.05m程しか変わらず、おそらく斜面であったため、墳丘は流失したと推測される。現状で墳丘標高は約28.0mを測る。墳丘の規模は現状で南北8.6m、東西2.3m、主軸方位はN-33°-Eである。

主体部は長辺側だけを2段掘りにした墓壇である。現状で長辺2.76m、短辺1.05m、検出面からの深さ0.5mを測る。土層断面から棺の痕跡を確認し、刳抜き木棺(割竹型木棺)が据えられていたと考えられる。2段目の掘り込みは長辺2.45m、短辺0.45mで、この大きさと同じぐらいの木棺であったと推測される。頭位は墓壇底の高さや2段目の掘り込みの幅が広いことから、北東側であると推定される。主体部及び周辺から遺物は出土していない。

7 号 墳 (第22図)

1号墳の南西側に位置し、1号墳南西側周溝を掘削して造られた古墳である。墳丘の規模は現状で南北4.0m、東西7.3m、墳頂標高24.6mを測る。墳丘の周囲には幅0.3~0.5mの溝が掘られていた。周溝は弧を描いており、この古墳群中唯一の円墳と考えられる。墳丘と溝との高低差は0.2m程で、斜面であったために墳丘が流失した可能性も考えられる。

主体部は素掘りの墓壇で、長辺1.73m、短辺0.7m、検出面からの深さ0.38mを測り、主軸方位はE-15°-Sである。土層断面から棺の痕跡は確認できなかった。遺物は出土していない。

SX01 (第23、24図)

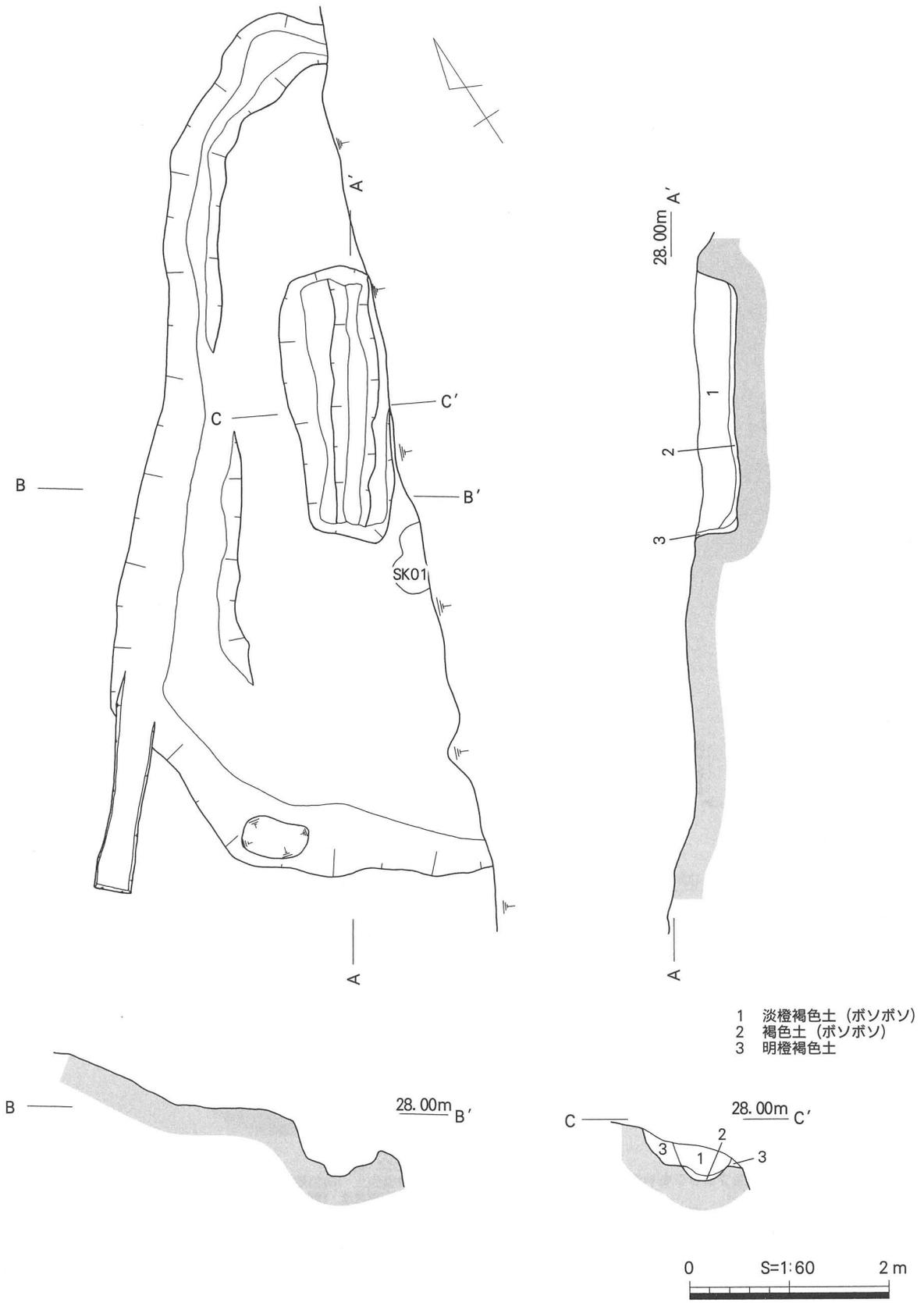
7号墳南西側周溝に掘られた深さ0.2mの土壇墓である。現状で南北0.56m、東西0.72m、検出面標高24.45mを測る。墓壇内からは刀子、須恵器の坏蓋3個、土師器の長頸壺が出土した。坏蓋や長頸壺は墓壇の北端から出土し、3個の坏蓋は斜めに傾いた状態であった。坏蓋の出土状況から、墓壇内に置かれた枕の可能性も考えられた。刀子は検出面直上から出土している。他に土師器と思われる土器が出土したが、細片で風化が著しく、復元はできなかった。

第24図の12~14は口径11.8~12.4cm、器高4.3~4.7cmを測る蓋坏である。口縁端部付近に沈線を入れて、段状にし、天井部に丁寧なへら削りを施している。轆轤の回転方向は左である。15は土師器の長頸壺で、口縁端部をわずかに欠いている。口径8.2cm、器高17.1cmを測る。外面は風化していて調整は不明だが、内面には指で押さえた痕がみられる。16は刀子である。全長8.6cm、刀身長4.2cm、茎長4.4cmを測る。刃関と棟関が付いている。

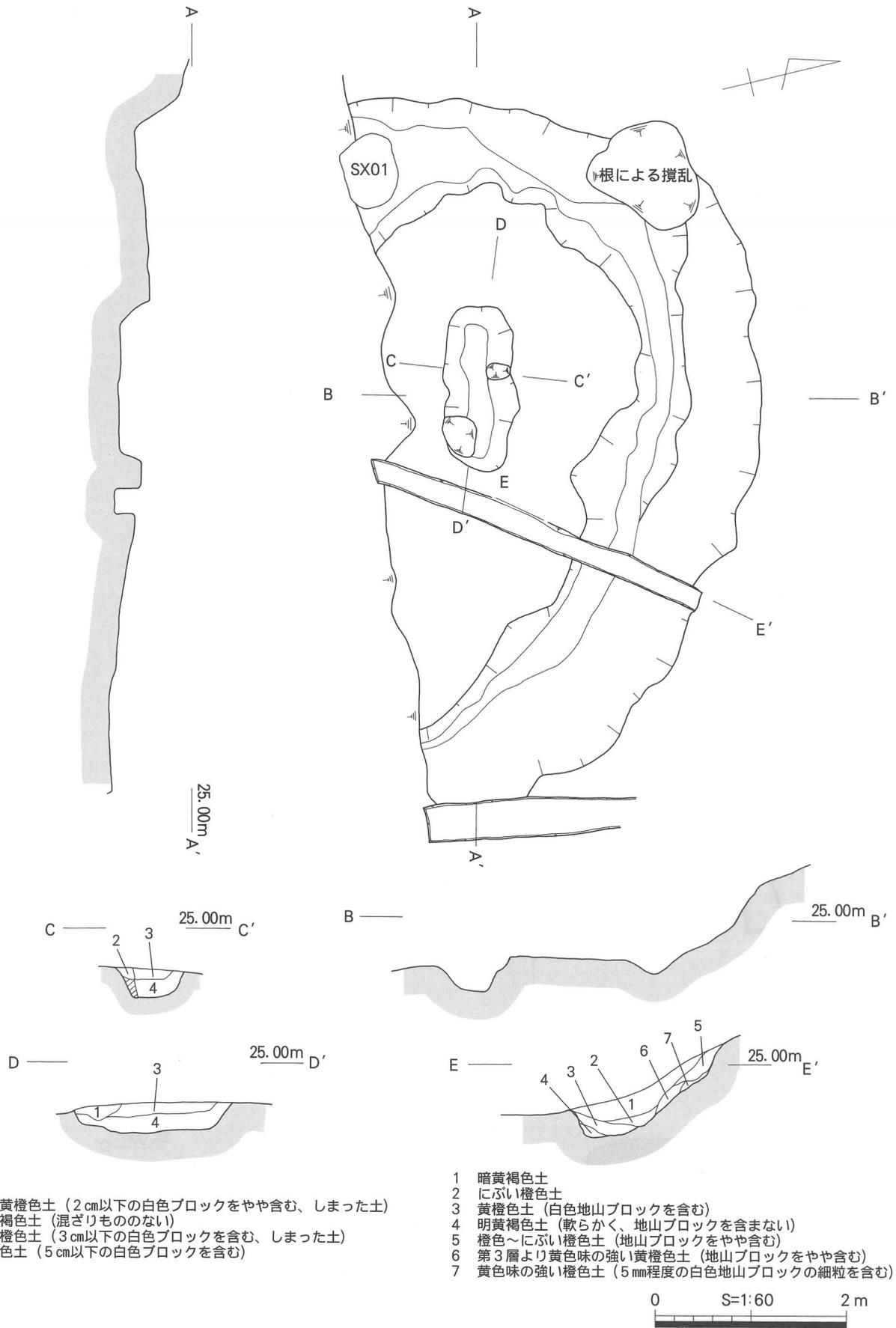
SX01は出土遺物や出土状況から古墳時代中期(5世紀中頃)の土壇墓と類推される。ただ、7号墳から遺物が出土していないため明確なことは言えないが、7号墳に伴う埋納土坑の可能性も窺われる。

SK01 (第25、26図)

6号墳の南西側で検出した土坑である。土坑の南東側はパイロット道路によって削平されている。現状で南北0.73m、東西0.27m、検出面からの深さ0.14mを測る。検出面標高は27.65mである。土坑内から土師器片が出土した。第26図の17は甕か壺の胴部と思われ、接合できなかった破片の一部



第21図 6号墳実測図

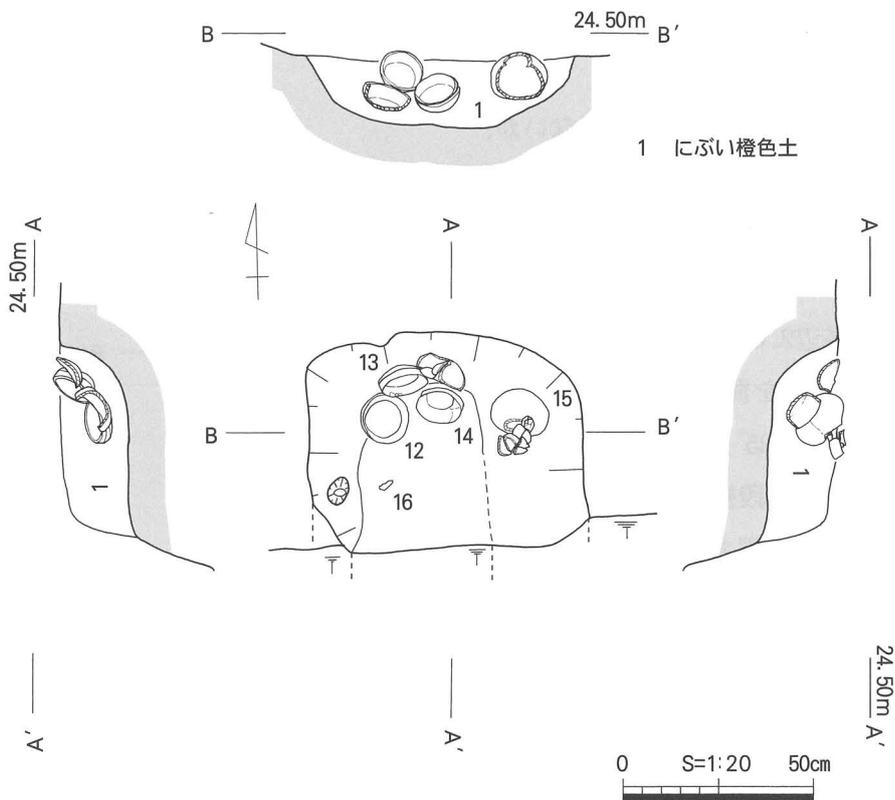


- 1 淡黄褐色土 (2 cm以下の白色ブロックをやや含む、しまった土)
- 2 明褐色土 (混ざりものない)
- 3 淡橙色土 (3 cm以下の白色ブロックを含む、しまった土)
- 4 橙色土 (5 cm以下の白色ブロックを含む)

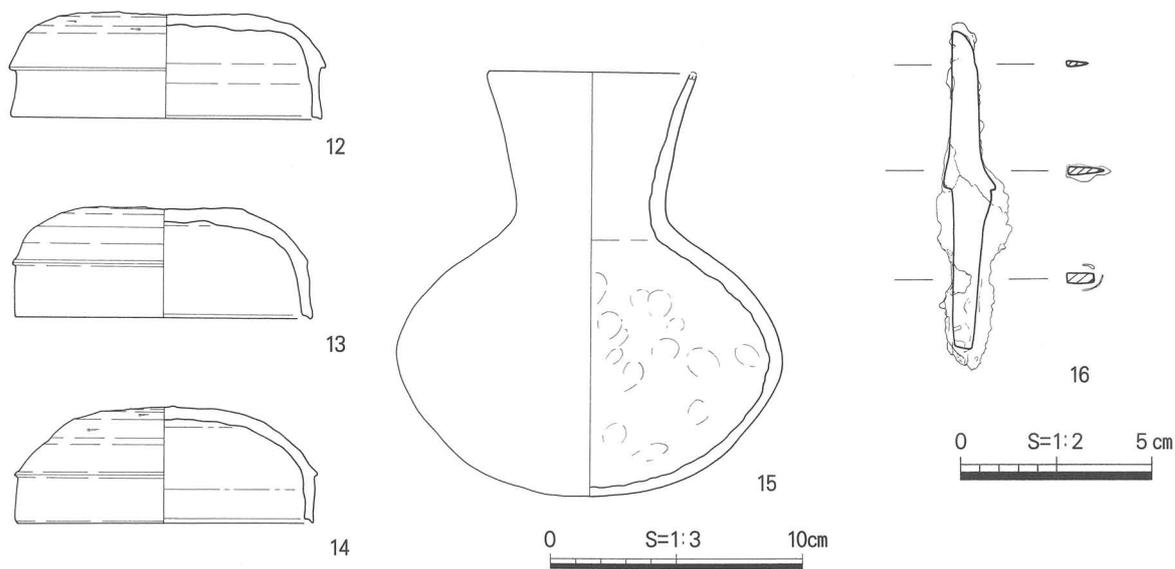
- 1 暗黄褐色土
- 2 にぶい橙色土
- 3 黄橙色土 (白色地山ブロックを含む)
- 4 明黄褐色土 (軟らかく、地山ブロックを含まない)
- 5 橙色~にぶい橙色土 (地山ブロックをやや含む)
- 6 第3層より黄色味の強い黄橙色土 (地山ブロックをやや含む)
- 7 黄色味の強い橙色土 (5 mm程度の白色地山ブロックの細粒を含む)

0 S=1:60 2 m

第22図 7号墳実測図



第23図 SX01実測図



第24図 SX01出土遺物実測図

SX01出土遺物

挿図 番号	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態・文様	備考	
			口径	頸部径	器高 (残高)	内面	外面	内面	外面			
12	須恵器	坏蓋	12.4	—	4.3	暗灰色	暗青灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	肩部に突帯 口縁端部段状	轆轤回転方向 左	
13	須恵器	坏蓋	11.9	—	4.4	黄灰色	黄灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	肩部に突帯 口縁端部段状	轆轤回転方向 左	
14	須恵器	坏蓋	11.8	—	4.7	暗青灰色	暗灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	肩部に突帯 口縁端部段状	轆轤回転方向 左	
15	土師器	長頸壺	8.2	6.0	17.1	茶褐色	茶褐色	ナデ	口縁、ナデ 胴部、指頭圧痕			
16	鉄製品	刀子	全長8.6 茎長4.4 刀身長4.2 元幅1.3				黄褐色					両関

に羽状文がみられた。明確なことはいえないが、出土遺物から古墳時代前期の土坑と考えられる。

SX02 (土 壙 墓) (第27図)

5号墳の南西側緩斜面の南側で検出した土壙墓である。規模は長辺2.65m、短辺1.05m、検出面からの深さ0.86mを測る。検出面標高は28.7m、主軸方位はN-25°-Wである。墓壙の長辺側と南東側小口は2段掘りで、南東側小口に幅0.2m、長さ0.5m、深さ0.08mの溝が掘られていた。2段目の掘り込みは長辺2.35m、短辺0.67m、深さ0.2mを測る。土層断面から棺の痕跡は確認できなかったが、箱式木棺が据えられていたと推測される。墓壙底の高さから、北西側が頭位と考えられる。遺物は出土していない。

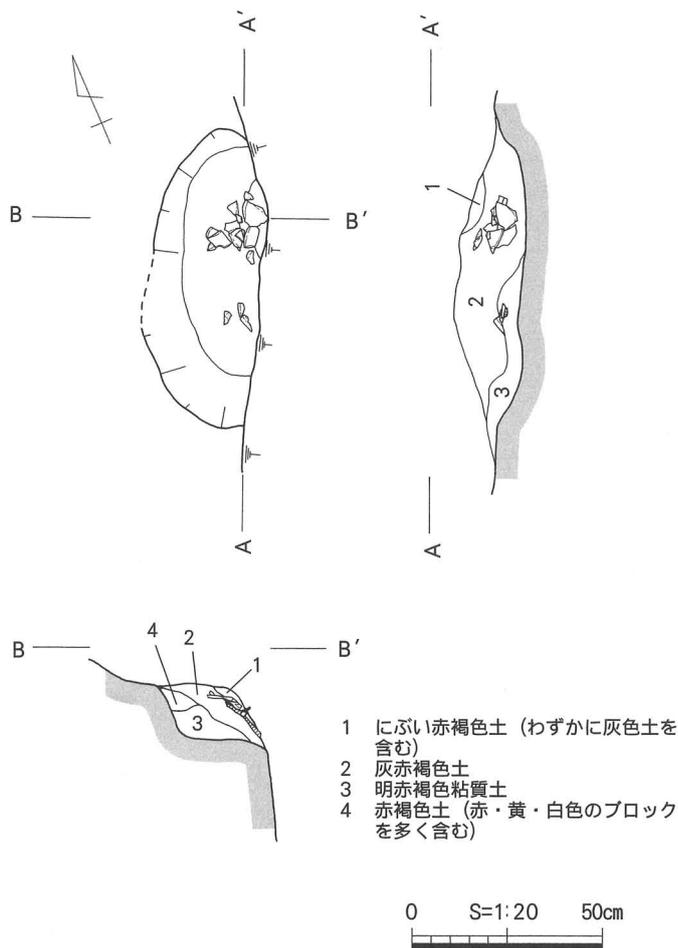
SK02 (第28図)

SX02の東側で検出した焼土坑である。検出面標高28.65m、規模は南北0.53m、東西0.26~0.36m、検出面からの深さ0.08mを測る。底面は根による攪乱をうけており、凸凹していた。

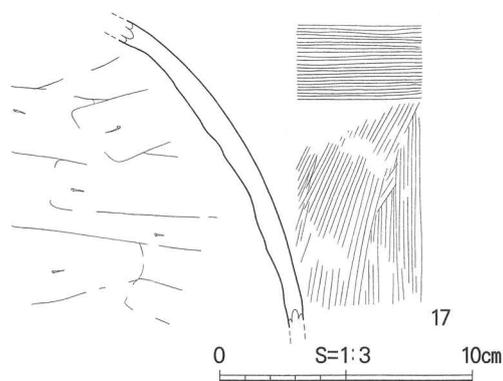
黒く焼けて硬くなった部分はあまりなく、赤く焼けた部分のほうが多くみられ、短期間の使用であったと推測される。遺物は出土していない。

SK03 (第29図)

緩斜面から南西側に下った斜面で検出した焼土坑である。土坑は地山面に掘られていた。検出面標高26.3m、規模は南北1.0m、東西0.8m、検出面からの深さ0.2mを測る。赤く焼け、硬く焼きしまった面が2面あり、土層断面から土坑を掘って一度使用し、そのうえに小礫を多く含



第25図 SK01実測図



第26図 SK01出土遺物実測図

SK01出土遺物

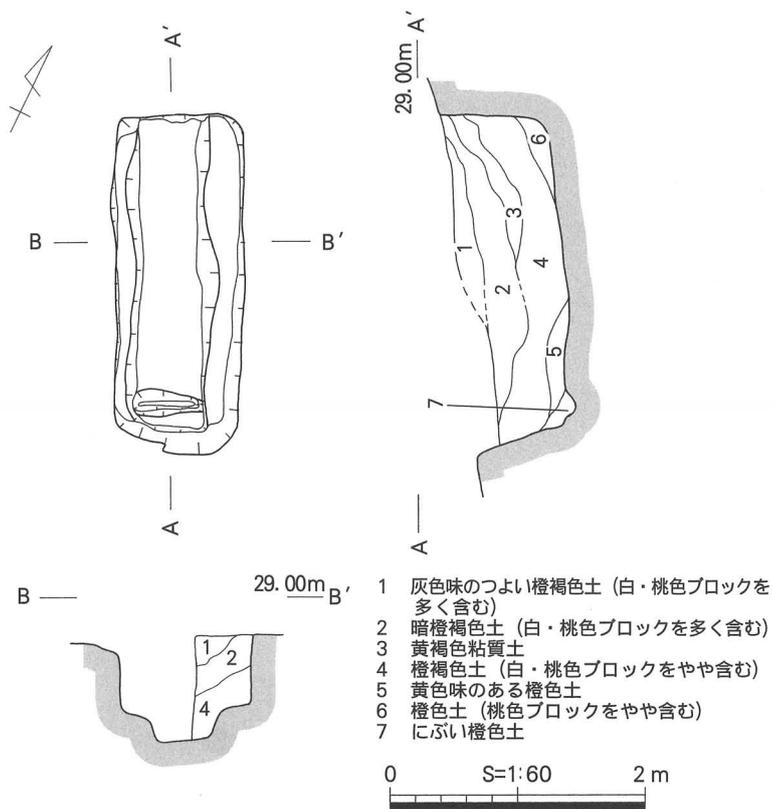
挿図 番号	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態・文様	備考
			口径	底径・頸部径	器高 (残高)	内面	外面	内面	外面		
17	土師器	胴部片	—	—	12.0	明黄褐色	明黄褐色	ヘラケズリ	ハケメ		

む黄褐色土を入れて、再度使用したと思われる。

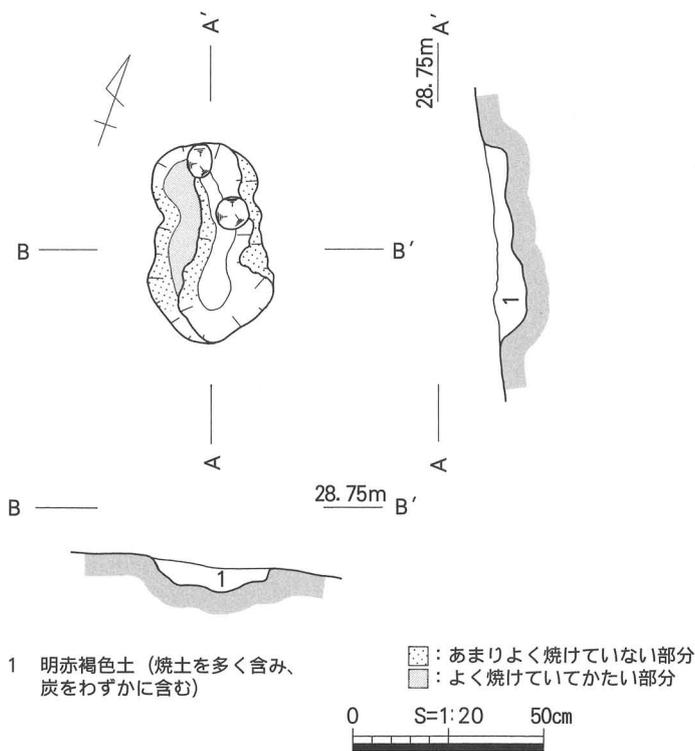
遺物は出土していない。

SK04 (第30図)

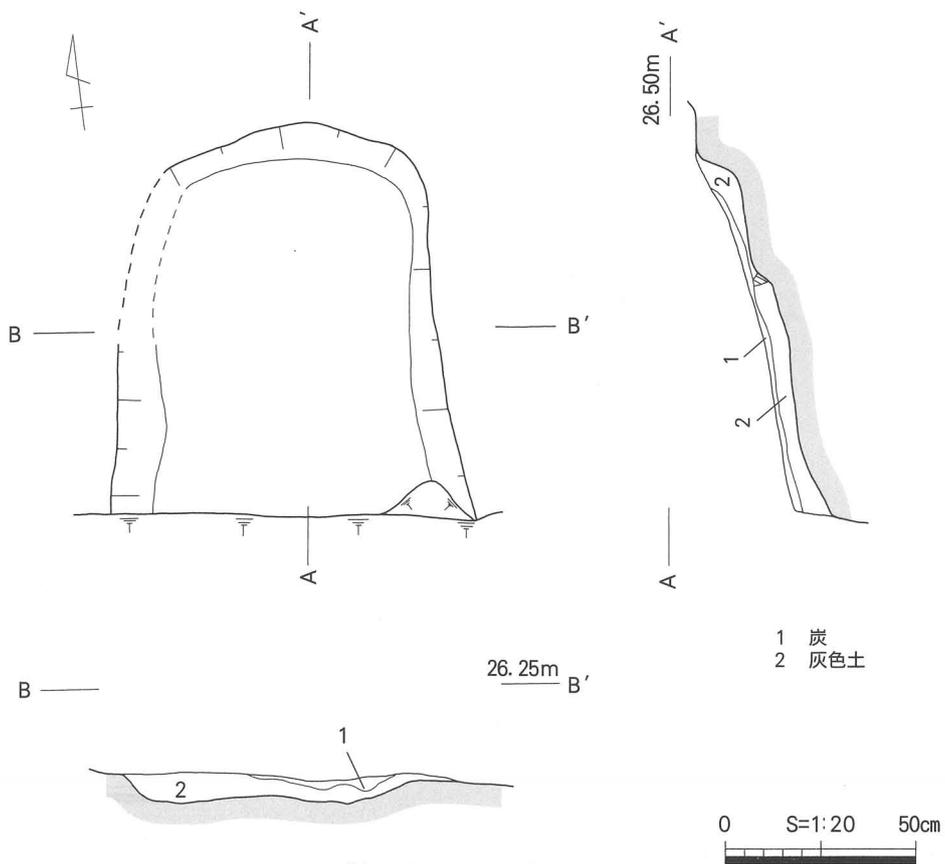
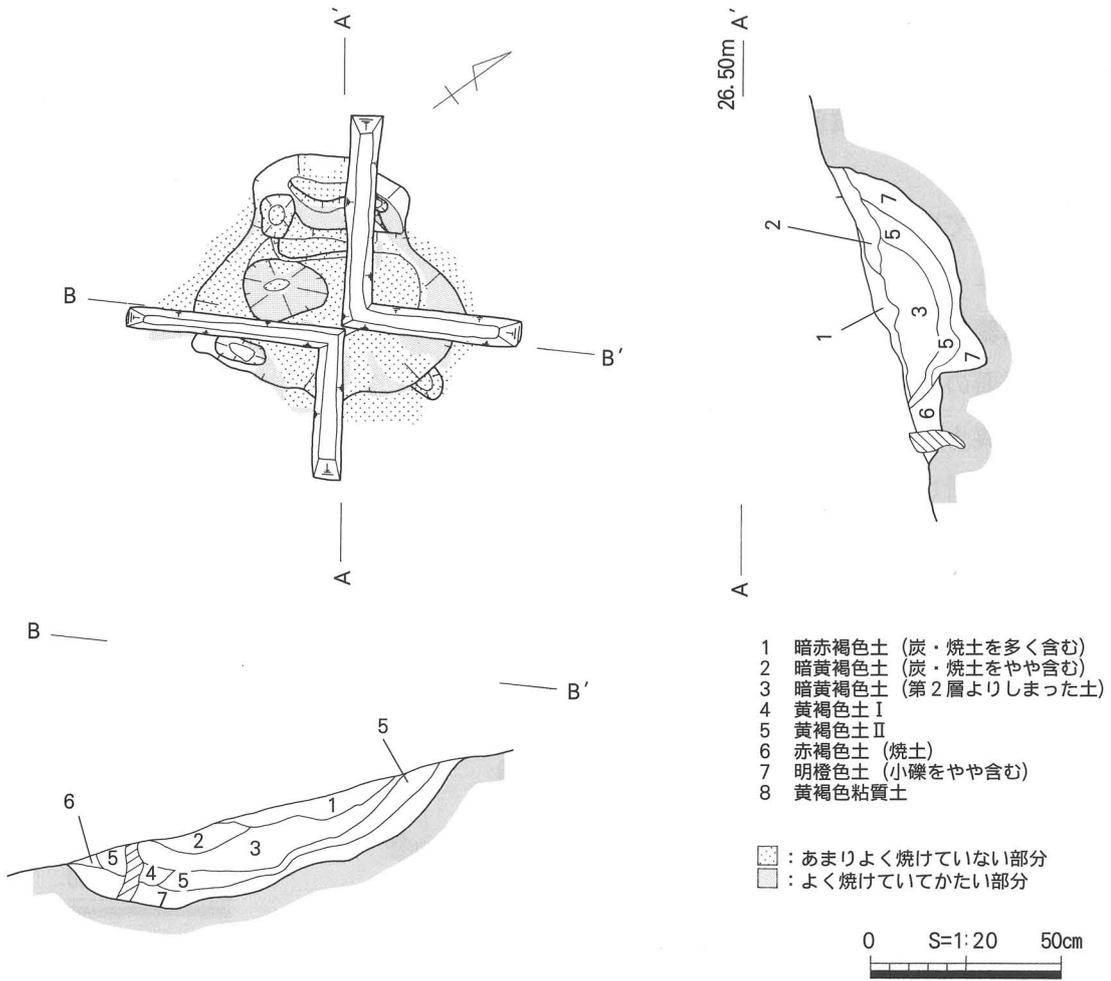
2号墳の南側斜面で検出した炭溜りである。南側斜面の旧表土下の堆積土(第40層・橙色粘質土)上面で検出した遺構で、2号墳より新しいと考えられる。現状で南北1.05m、東西0.84m、深さ0.1mを測る浅い土坑である。検出面には炭が多くみられたが、土坑内は焼けておらず、炭だけを廃棄した土坑と考えられる。周辺から火を焚いたような跡は発見されなかった。遺物は出土していない。



第27図 SX02実測図



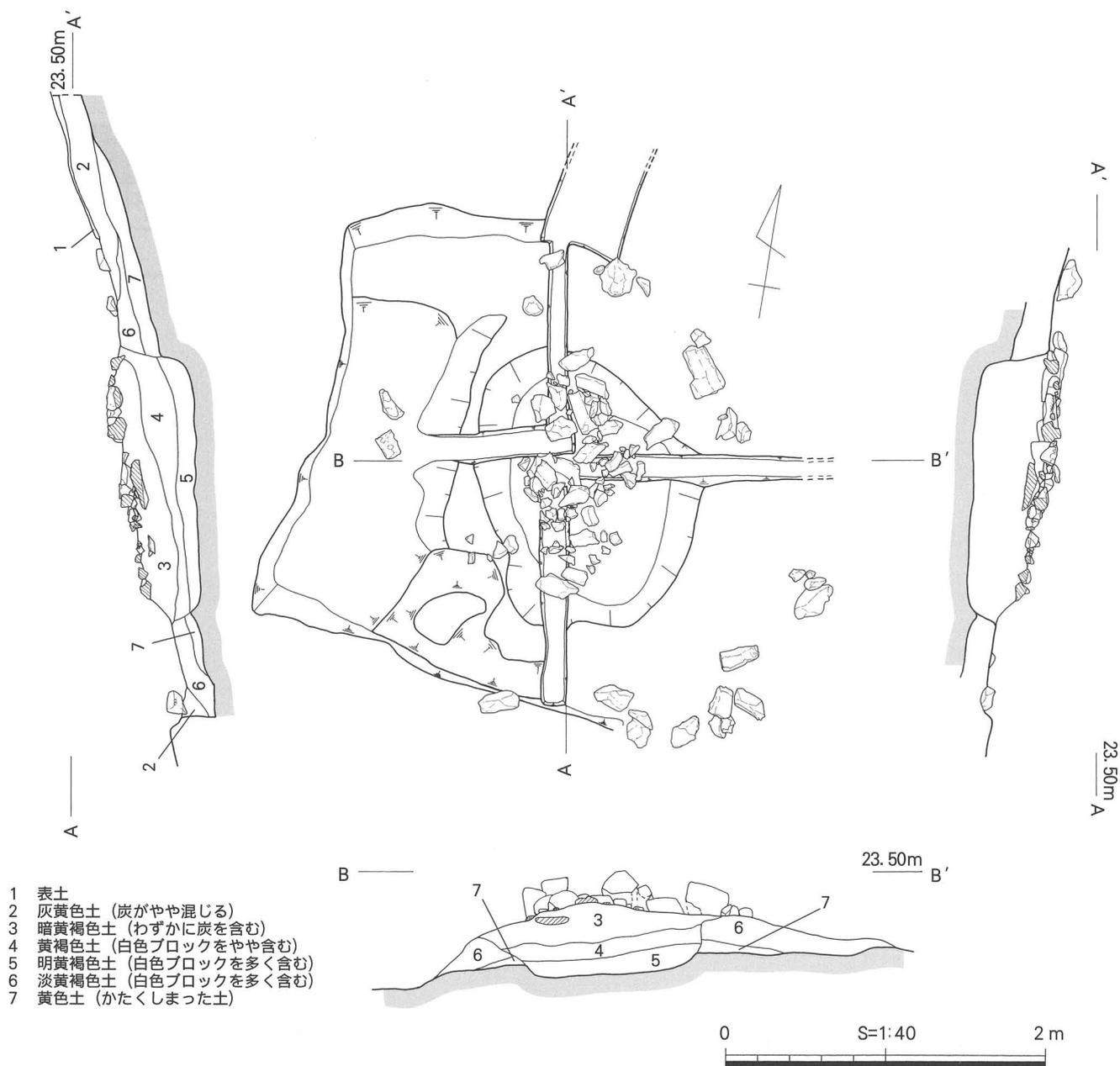
第28図 SK02実測図



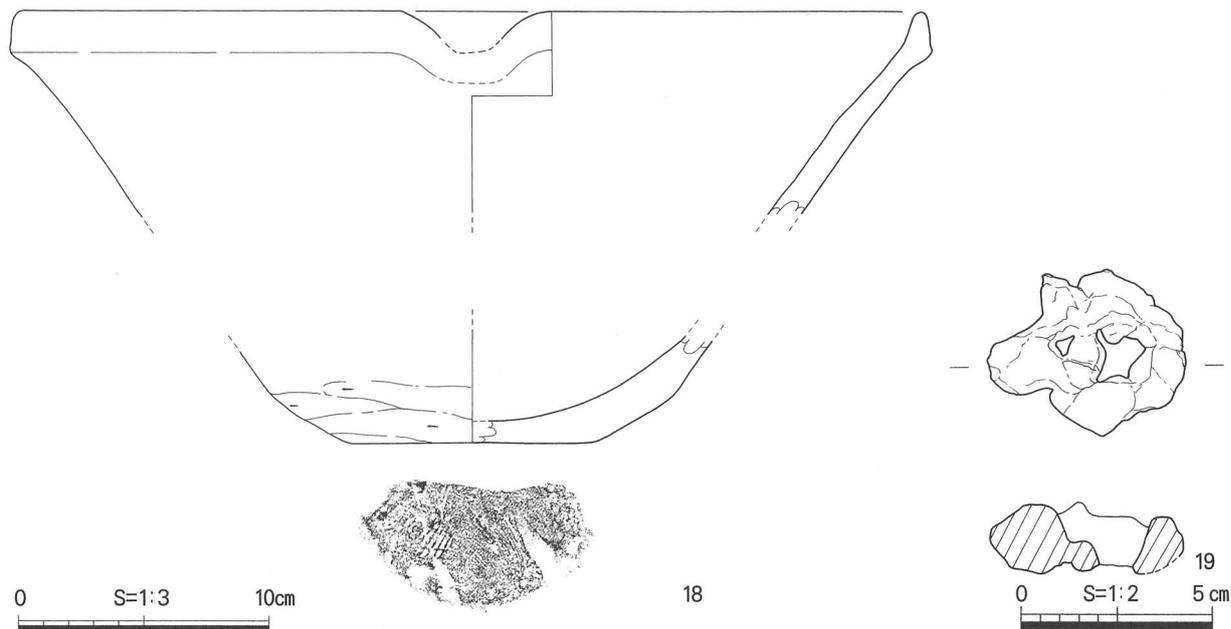
SK05 (第31、32図)

丘陵の南側斜面でトレンチ掘削をした際に検出した集石遺構である。表土を取り除くとすぐに石が出土した。斜面のやや小高くなっているところに石が置かれ、その周辺にも石が散乱しているような状況であった。石は4cm~38cmと大小様々な淡灰色の角礫で、全部で108個を数える。土層観察から、斜面を地山面まで掘削し、そこに第6層(淡黄褐色土)や第7層(黄色土)を盛土して坑を掘っている。そして、何かを埋め、その上に石を置いたと推測される。坑の規模は南北1.75m、東西1.4m、深さ0.35mを測る。

石と石の間から、中世の土師質土器の鉢と鉄製品が出土した。第32図の18は口径35.4cm、底径9.6cm、推定器高17.4cmを測る。内外面共ナデ、底部に近い外面にはヘラケズリを施している。底部に回転糸切り痕がみられる。19の鉄製品は中に穴が開いたものであるが、器種は不明である。出土遺物から中世以降の遺構と推定される。



第31図 SK05実測図



第32図 SK05出土遺物実測図

SK05出土遺物

挿図 番号	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態・文様	備考
			口径	底径	器高 (残高)	内面	外面	内面	外面		
18	土師質土器	鉢	35.4	9.6	17.4 (推定)	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	底部、回転 糸切り痕	
19	鉄製品	不明	全長、4.5×5.3・最大厚、1.7				黄橙色				

2. B 区 (第33～37図)

B区は尾根の南西側斜面に位置し、斜面に向かって2段の段状を呈する。遺構の有無を確認するため、トレンチ調査をおこなった結果、谷側の加工段からピットや溝を検出し、本調査をおこなうこととなった。

調査の結果、谷側の加工段から2棟の掘立柱建物跡を検出した。加工段中央の南西側で検出した掘立柱建物跡をSB01、SB01の北東側の掘立柱建物跡をSB02として調査をおこなった。

調査区は、表土から地山面まで0.3m程である。調査区全面にみられる第2層（明橙褐色土）は、地山ブロックを多く含む、混ざりもののない土層で、地すべりの際の崩落土と思われる。第3層（暗橙色粘質土）は炭をやや含む土層でSB02の堆積土である。第6層（明褐色土）はSB01の溝の堆積土で、この溝は第7層（赤褐色粘質土）上面から掘りこまれ、第7層はSB01の基盤土層と考えられる。

山側の加工段は、南北3.0m、東西11.0m、標高19.3mを測る。この加工段から遺構は検出されなかった。東側の地山面よりやや浮いたところから黒曜石の剥片と土師質土器（第37図-25）の皿が出土している。この土師質土器（25）は口径11.0cm、器高1.8cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部付近で外反し口唇部に至っている。外面に稜をもち、底部内面に指頭圧痕がみられる。近世のものと考えられる。

この2棟の掘立柱建物跡は当初、9本の総柱建物跡と思われた。しかし、ピット内の埋土の違いやSB01のピット底面のレベルが17.35m前後であるのに対して、SB02のピット底面レベルは17.6m前後と0.25mの差がみられたことなどから考えて、2棟の建物跡とした。

SB01（掘立柱建物跡）（第35、37図）

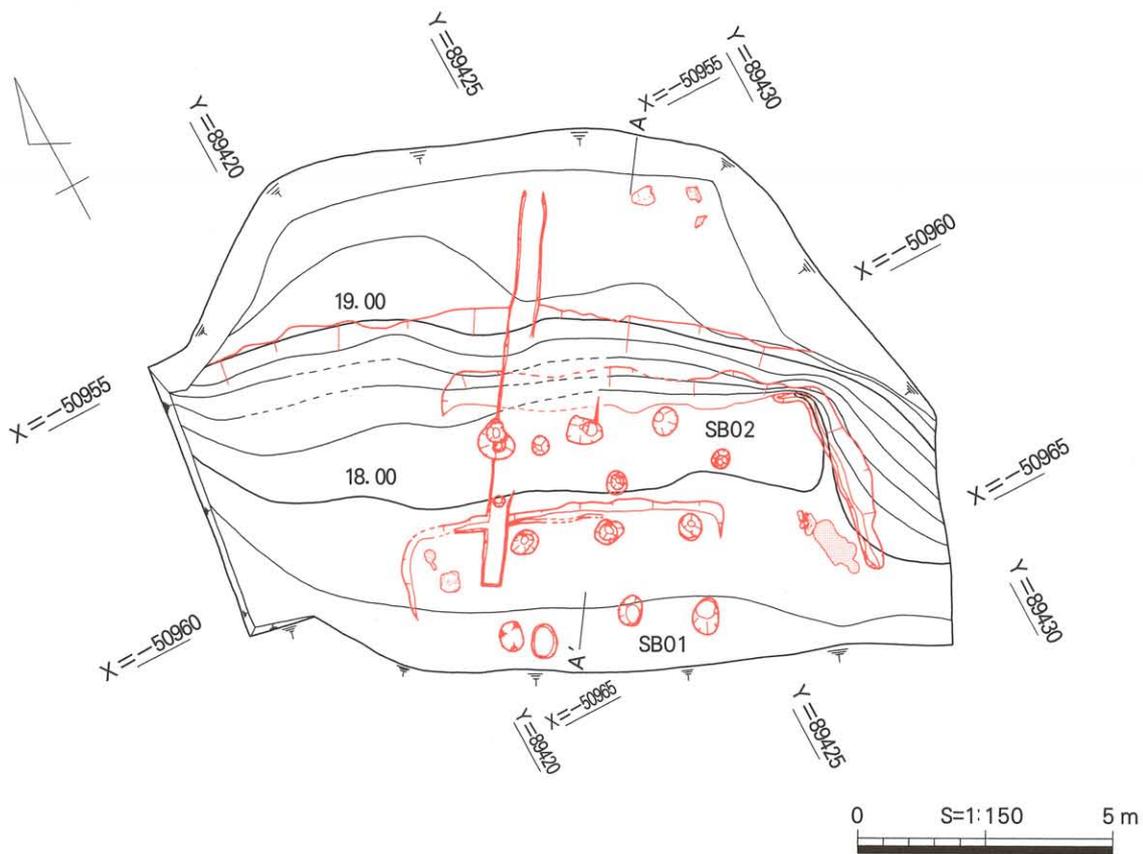
現状で桁行2間（3.3m）、梁行1間（1.65m）の建物跡である。建物のまわりには高さ5cmの「コ」の字状の段がわずかにみられた。その内側に深さ5cm程の溝が一部確認された。床面標高は17.9mを測り、南西側にやや傾斜している。建物跡の南西側は斜面で、床面が流失した可能性も考えられ、現状以上の建物跡であったとも推察される。柱穴の規模は上端径0.5～0.65m、深さはP1だけが0.2mと浅く、他は0.5～0.6mを測る。床面の西隅から炭が出土したが、周辺から焼けたような所はみられなかった。

第37図の20は、P2、P3間の床面から出土した鉄製品である。器種は不明である。

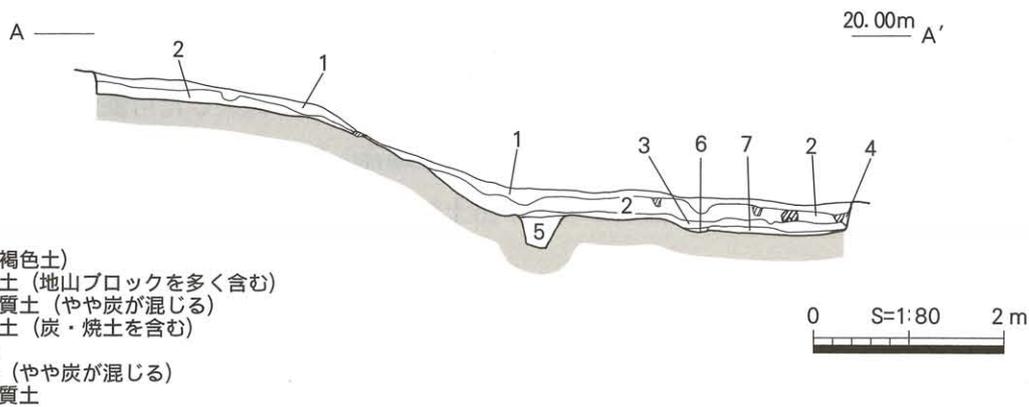
SB02（掘立柱建物跡）（第36、37図）

SB01の北東側に隣接する。山側の平坦面から谷側の平坦面に下る斜面を加工して壁を造っている。この壁体は東側では明瞭に確認されるが、西側ではわからなくなり、後世の土砂の流失により消滅した可能性も考えられる。東側から北側の壁際で幅15cm、深さ5cmの雨落ち溝を検出した。柱穴は7穴確認したが、北側3穴（P10～12）と南側3穴（P7～9）では大きさも柱穴間も違い、どのような建物が建っていたか想定できない。北側3穴は上端径0.5～0.75m、深さ0.4～0.5m、柱穴間1.5～1.7m、南側3穴は上端径0.25～0.35m、深さ0.4m、柱穴間2.15～2.35mを測る。北東側床面から焼土と炭、石が出土した。石には火をうけたところがみられた。

北壁側の床面から土師質土器の皿（第37図21～23）が、P11から鉄製品（24）が出土した。21、22

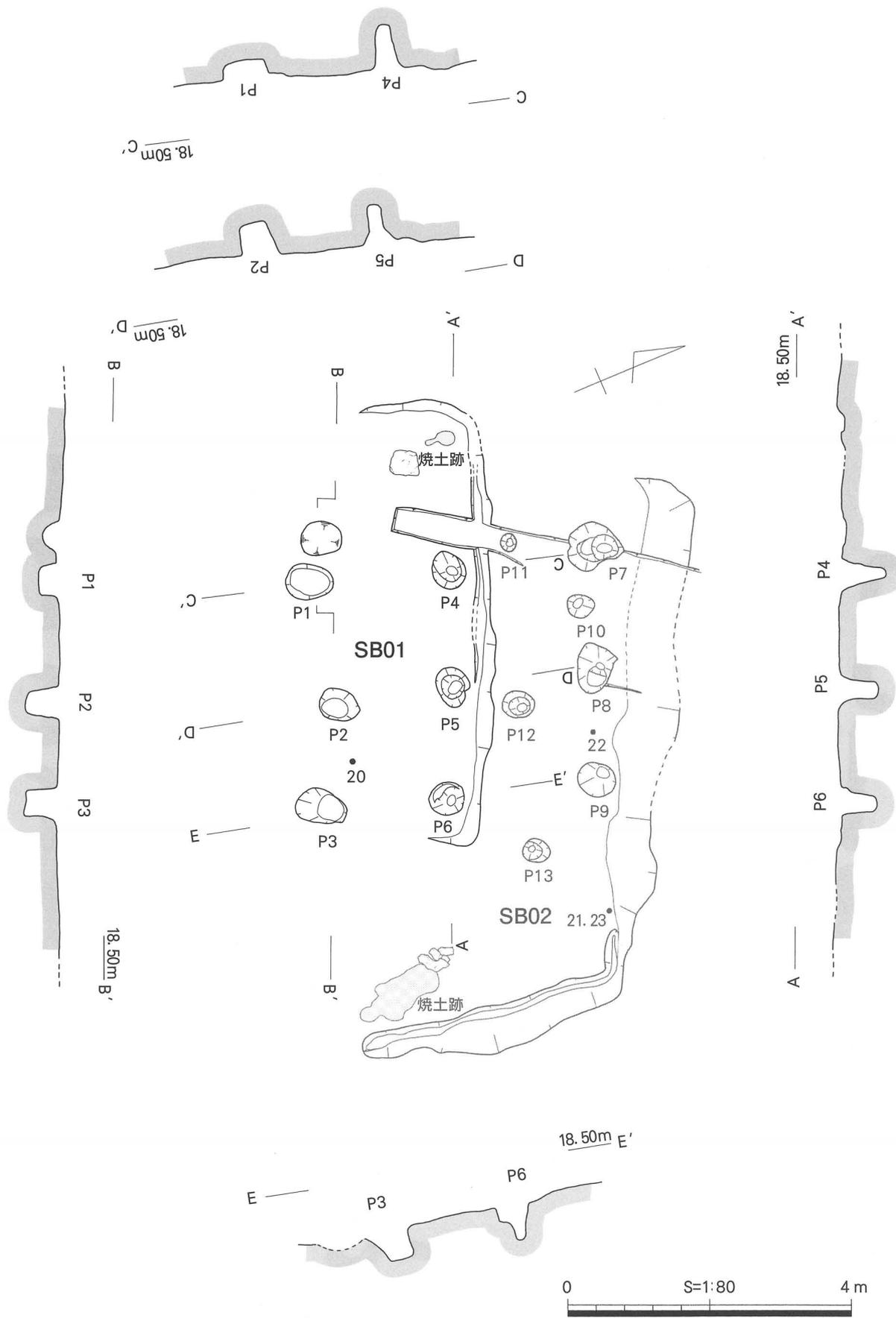


第33図 B区調査成果図

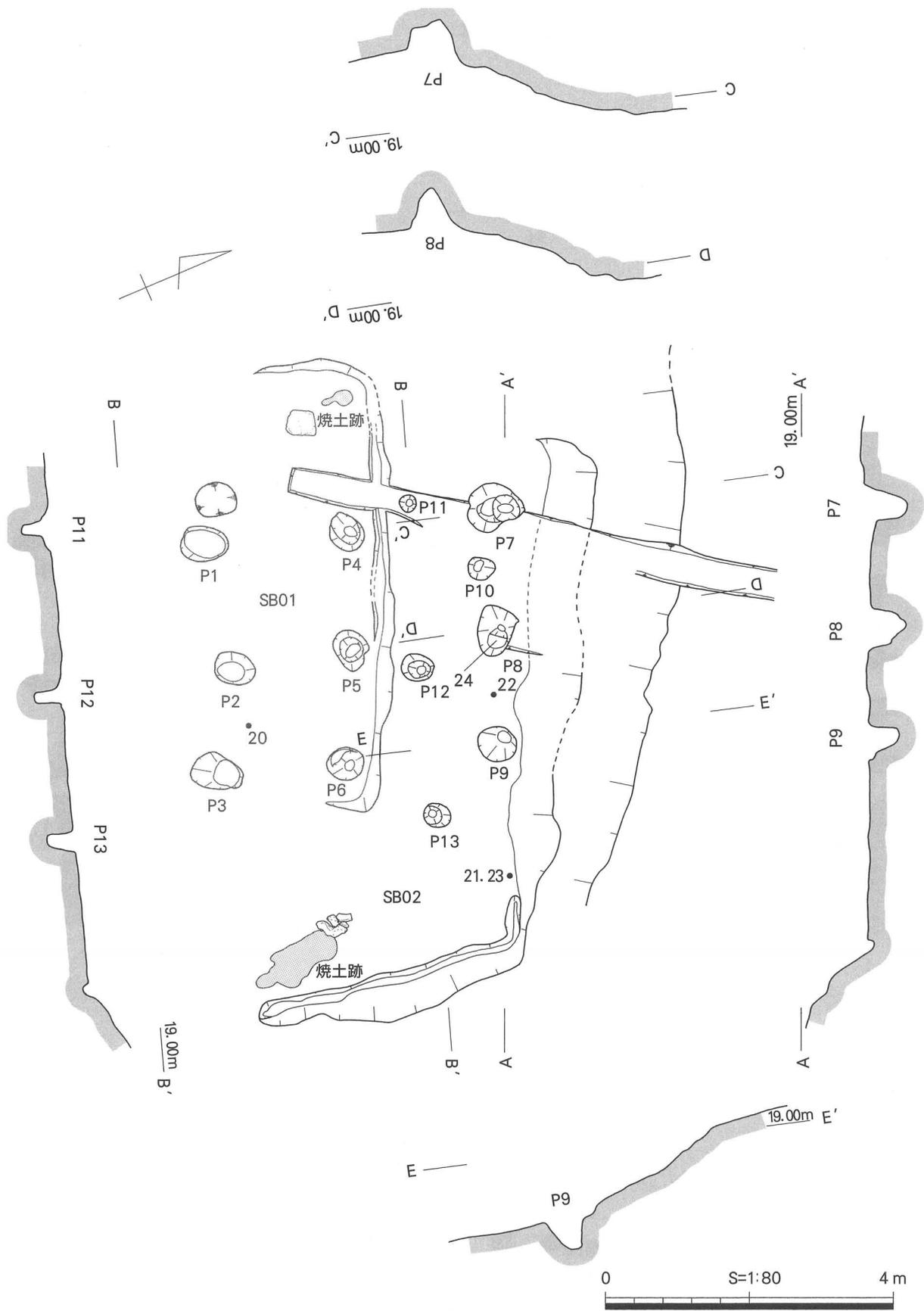


- 1 表土 (黒褐色土)
- 2 明橙褐色土 (地山ブロックを多く含む)
- 3 暗橙色粘質土 (やや炭が混じる)
- 4 淡赤褐色土 (炭・焼土を含む)
- 5 黄褐色土
- 6 明褐色土 (やや炭が混じる)
- 7 赤褐色粘質土

第34図 B区土層断面図



第35図 SB01 (掘立柱建物跡) 実測図

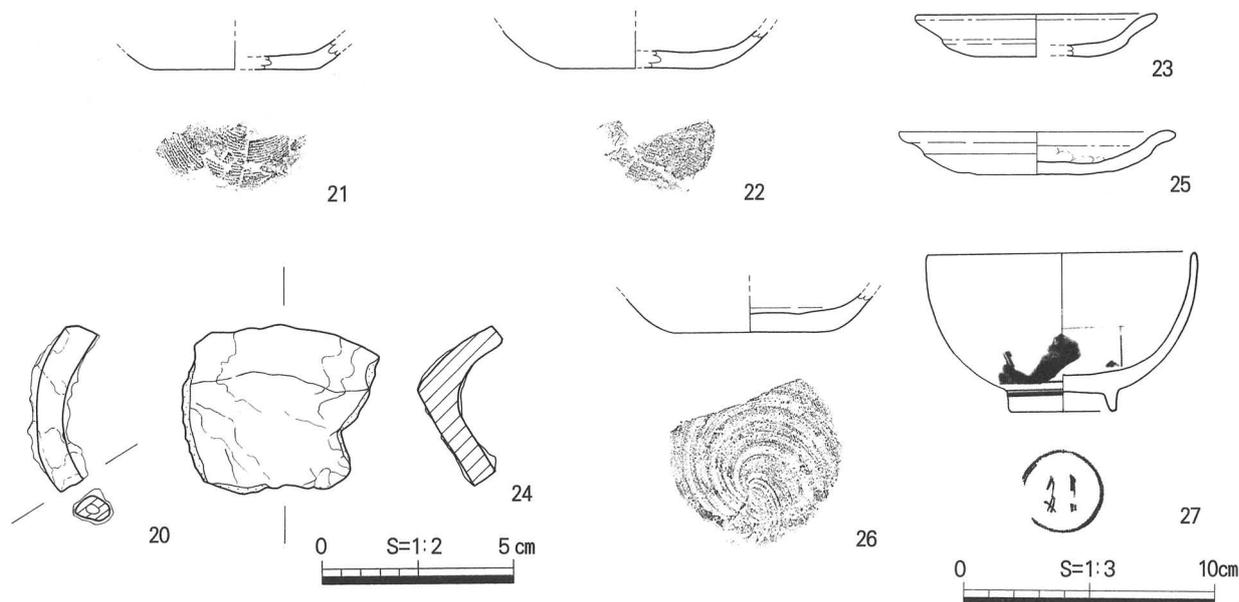


第36図 SB02 (掘立柱建物跡) 実測図

は回転系切りの底部、23は口径9.4cm、器高1.7cm、を測る。底部から口縁にかけて緩やかに外反して立ち上がり、外面に稜をもつものである。24は「く」字状に屈曲した鉄製品であるが、器種は不明である。出土した土師質土器の皿から近世の建物跡と推測される。

SB01、02の出土遺物は鉄製品以外土師質土器だけで生活道具はなく、生活のにおいのしない建物跡であり、祭祀的な建物であった可能性も窺われる。

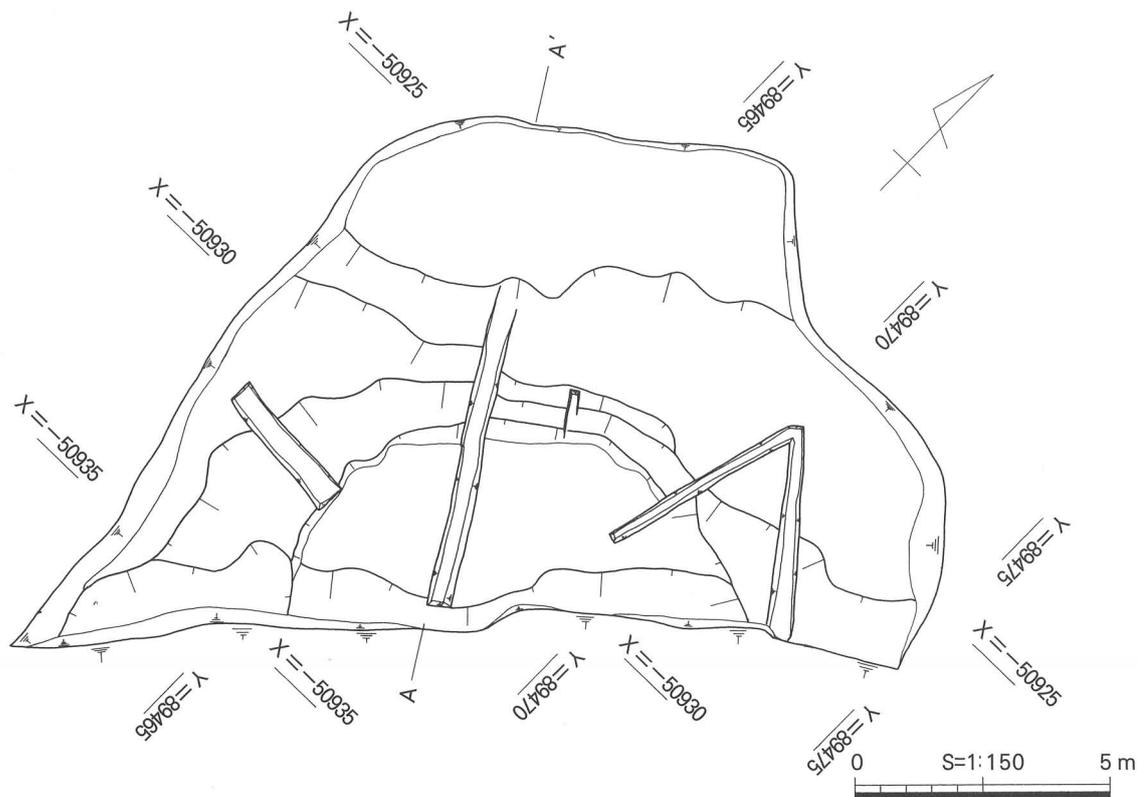
調査区周辺から、底部回転系切りの須恵器（26）と肥前系磁器の碗（27）が出土した。



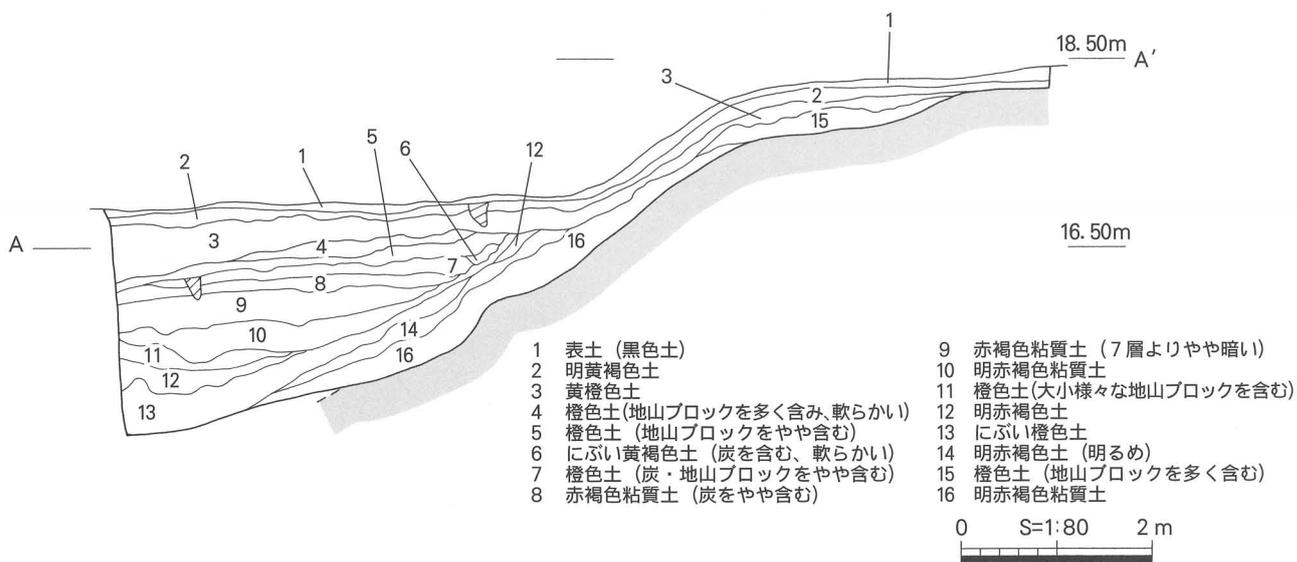
第37図 B区出土遺物実測図

B区出土遺物

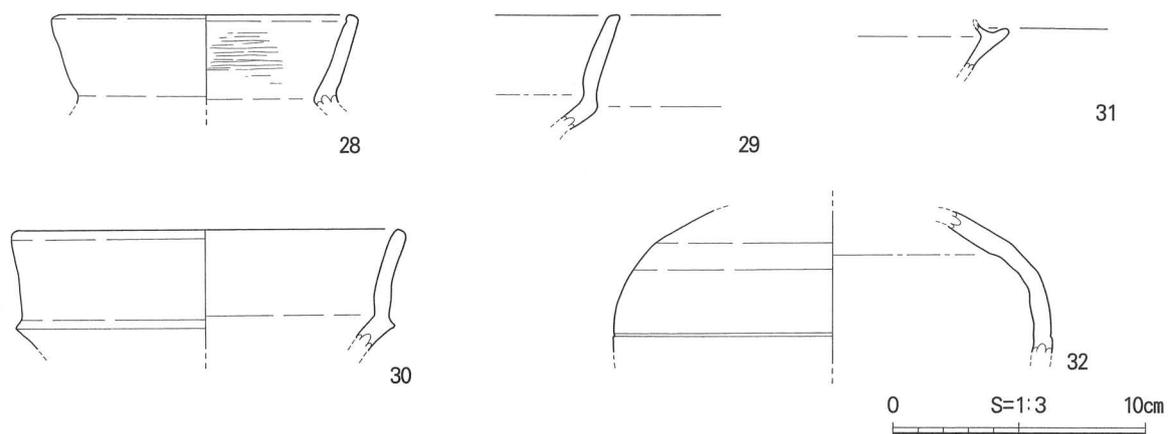
挿図 番号	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態・文様	備考
			口径	底径	器高 (残高)	内面	外面	内面	外面		
20	鉄製品	不明	残存長、4.4・最大幅、0.8・最大厚0.9				茶色				
21	土師質土器	皿	—	6.6	1.2	橙褐色	灰橙色	ナデ	ナデ		底部、回転系切り痕
22	土師質土器	皿	—	6.0	1.5	橙色	淡橙色	ナデ	ナデ		底部、回転系切り痕
23	土師質土器	皿	9.4	4.8	1.7	淡橙色	橙褐色	ナデ	ナデ		
24	鉄製品	不明	全長5.2×4.4 最大厚、1.1				茶色				
25	土師質土器	皿	11.0	4.7	1.8	明橙色	明橙色	指おさえ・ナデ	ナデ		
26	須恵器	坏・底部	—	6.2	1.5	灰茶色	黒灰色	静止ナデ 回転ナデ	回転ナデ		回転系切り痕
27	磁器	碗	10.8	3.9	6.3	白色			染付け		肥前系磁器



第39図 C区調査後地形測量図



第40図 C区土層断面図



第41図 C区出土遺物実測図

C区出土遺物

挿図 番号	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態・文様	備考
			口径	底径・頸部径	器高 (残高)	内面	外面	内面	外面		
28	土師器	甕	11.4	—	3.7	黄褐色 暗灰色	黄褐色	ナデ・ハケ メ	ナデ		布留系
29	土師器	甕	—	—	4.6	橙褐色	淡橙色	ナデ	ナデ		
30	土師器	甕	14.8	—	5.0	黄褐色 淡黒色	淡橙色	ナデ	ナデ		
31	須恵器	坏身	—	—	1.9	灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ		
32	須恵器	壺・胴部	—	—	5.8	灰色	黒灰色	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	1条の沈線	

4. まとめ

今回の調査では7基の古墳と土器棺墓、土坑5個、土壙墓2基、掘立柱建物跡などを検出した。

<墳丘について>

7基の古墳は、中海を眼下に大根島から境水道まで見渡せる標高26～30.4mの丘陵に造られた古墳で、方形墳を主体とする。例外として7号墳は円墳の可能性がある。尾根上から長径12～20mの方墳を5基、1号墳と5号墳の墳裾から10m以下の古墳を2基検出した。尾根と尾根の間に溝を掘って区画し、高さの足りないところには盛土をして墳丘を築造していた。2、5号墳の土層断面には旧表土がみられ、その上に盛土をして墳丘を築造したことが確認された。尾根上の2、3、4号墳墳丘平坦面の標高差はあまりないのだが、1と2号墳、4と5号墳の標高差は2m弱あり、意図的に高低差をつけ、階層差を誇示した可能性も考えられる。

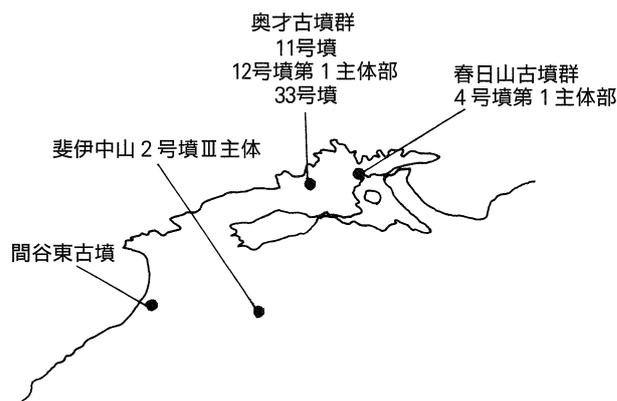
<新旧関係>

区画溝の切り合いや遺構の検出状況から、5号墳が最初に築造され、その後、4号墳、3号墳と尾根の北東側（尾根の低い方）に造られていったと考えられる。5号墳は本古墳群の中で最高所にあり、墳丘も一番大きく盟主墳であったと考えられる。6号墳は5号墳の後に築造されたと考えられるが、1～4号墳との新旧関係は不明である。7号墳は1号墳の後に造られ、SX01は出土遺物から古墳群周辺の遺構の中で一番新しいと考えられる。

<主体部>

春日山古墳群の主体部は刳抜き木棺、箱式木棺、礫床を伴う箱式木棺と、古墳の数が少ない割にはバラエティーに富んでいる。5号墳の第2主体部と7号墳以外は二段掘りの墓壙である。1号墳は東西10m、南北7mの墳丘平坦面に、3基の主体部の長軸を南北にとり造られていた。これらは4mないし、それ以上の長大な二段掘りの主体部であった。このようにひとつの平坦面に3基以上の主体部をもつものは、奥才古墳群の61号墳や社日1号墳他にも見られるが、長大な主体部が3基切りあった状態で並んでいるものは、あまり類例がないように思われる。また、1号墳第1主体部のように、棺台の周囲に長楕円形状の溝を掘り、刳抜き木棺を据えたものもみられた。

4号墳の第1主体部は小口板3枚と側板2枚で主室と2つの副室を造り、主室に砂礫を敷いていた。棺内法は長辺側で3mになる。このように主室と副室をもち、棺内長が3mを超え、礫床を伴うものはいわゆる「奥才型」と呼ばれる主体部である。奥才古墳群においては、3基の主体部で検出されているが、本古墳群では、1基のみである。埋葬方法のひとつであるが、本古墳群においては1基のみで、被葬者の階層差を意識して意図的に造られた可能性もあるのではなかろうか。「奥才型木棺」が中海北岸で確認され



第42図 奥才型木棺の分布

たのは初めてである。「奥才型木棺」は古墳時代前期から中期にかけて、島根半島、九州北部、丹後、但馬と日本海沿岸の限られた場所にしか造られていない。2006年に行われた島根県出雲市の間谷東古墳の調査では、この「奥才型木棺」が検出され、出雲平野西部においても同様の埋葬方法が行われていたことが確認され、島根半島にのみ分布する訳ではないことが明らかになった。

5号墳は、礫敷きの刳抜き木棺である。本古墳群の中では主体部の造りも丁寧で、後世の攪乱を受けていなければ、立派な主体部であったと思われる。

6号墳は墳裾に造られた古墳である。1～4号墳と同様に盟主墳の従属墳と考えられるが、墳裾に造られており、同じ従属墳の中にも格差があったことが窺われる。

<土器棺墓>

3号墳墳丘の東側斜面から、土器棺墓が検出された。この土器棺は小児（嬰兒）を埋葬したものと推測される。このような古墳に埋葬された子供は、特別な子供、地位のある子供であったと思われる。出土した甕は近畿系譜の土器で、こうした土器で小児埋葬がおこなわれる例がしばしばあり、注目される。

<出土遺物>

本古墳群から出土した土器は少ない。特に主体部から出土した土器は少ない上に細片で実測できなかった。5号墳から出土した刀子は刃関をもつもので、古墳時代前半期のものと思われる。SX01から出土した土器は坏蓋3個と長頸壺で、古墳時代中期（5世紀中頃）のものと思われる。

主体部以外からは土師器の甕や底部回転糸切り痕の短頸壺、耳環など奈良、平安時代までの遺物が出土している。

春日山古墳群の時期は主体部の状況や出土遺物、また奥才古墳群の主体部の変遷と照らし合わせてみると、古墳時代前期後葉から中期と考えられる。

「奥才型木棺」は当時の海上交通に沿って存在すると指摘されている。したがって、4号墳第1主体部に埋葬された被葬者も、日本海から地中海の海上交通の一端を担っていた者の可能性も考えられる。また、5号墳の被葬者も同様に、海上交通を担う有力者であったと推測される。

春日山古墳群から直線距離にして4.6kmの中海沿岸には、三角縁神獣鏡が出土した八日山1号墳がある。被葬者は何らかの形で畿内の政権と関わりをもっていたと考えられ、日本海から地中海の海上交通を掌握していたと推測される。本古墳群の盟主墳の被葬者も、八日山1号墳の被葬者に準ずる有力な階層なのかもしれない。

今回の調査においては中世や近世の遺構もみつまっている。近世の掘立柱建物跡からは壺や甕などの生活道具はみつかっておらず、土師質土器や鉄製品のみであることから、祭祀的な建物跡の可能性も考えられる。

また、出土遺物をみても古墳時代前期から後期、そして近世まで数は少ないが様々な時期の遺物が出土している。この丘陵は時代が変わっても、何らかのかたちで人々が携わっていたところなのかもしれない。そして、その人たちは同時期の遺物が出土している夫手遺跡や寺ノ脇遺跡周辺に生活していた可能性も考えられる。

中海北岸には多くの古墳が存在している。今回の調査で、そのなかのひとつの古墳群について、主体部の状況や時期を明確にすることが出来たことは、ひとつの成果である。

註

1) 島根大学教授 渡辺貞幸氏の御教示による

参考文献

島根県鹿島町教育委員会『奥才古墳群』1985年

島根県鹿島町教育委員会『奥才古墳群第8支群』2002年

鹿島町立歴史民俗資料館『古墳出現』鹿島町立歴史民俗資料館2001年特別展図録 2001年

島根県教育委員会『玉泉寺裏遺跡 浜井場4号墳 間谷東古墳』2008年

島根県教育委員会『社日古墳』2000年

島根県教育委員会『出雲岡田山古墳』1987年

島根県美保関町「第1章 原始・古代の美保関『美保関町誌 上巻』美保関町誌編さん委員会1986年

春日山古墳群一覧表

名称	墳丘			埋葬施設						
	墳形	規模 (m)	墳頂標高		構造	主軸	規模 (m)	検出面からの 深さ (m)	出土遺物	備考
1号墳	方	15.3×13.9	25.9	第1主体部	刳抜き木棺	N-37°-E	4.1×1.6	0.8		
				第2主体部	刳抜き木棺	N-31°-E	3.95×2.5	1.15	土師器片	
				第3主体部	刳抜き木棺	N-23°-E	4.6×1.6	1.1		
2号墳	方	14.0×13.8	28.2		箱式木棺	N-8°-E	4.6×2.1	0.8		
3号墳		13.5×11.0	29.2		箱式木棺	N-1°-W	3.55×2.55	0.7		
4号墳	方	11.8×9.6	28.8	第1主体部	箱式木棺 (礫床)	E-42°-N	4.25×1.85	0.55	黒曜石	礫床部分 1.8×0.47
				第2主体部	箱式木棺	E-23°-N	3.5×1.55	0.48	土師器片	
5号墳	方	19.8×13.2	30.4	第1主体部	刳抜き木棺 (礫床)	N-46°-E	4.3×2.7	0.5	刀子	礫床部分 2.1×0.65
				第2主体部	墓壇	N-41°-W	2.97×1.15	0.33	黒曜石	
6号墳		4.0×7.3	24.6		墓壇	E-15°-S	1.73×0.7	0.38		
7号墳		8.6×4.0	27.9		刳抜き木棺	N-33°-E	2.7×1.0	0.52		
SX01					不明		0.56×0.72(残)	0.2	坏蓋・長頸壺・ 刀子	
SX02					箱式木棺	N-25°-W	2.65×1.05	0.86		

第2節 寺ノ脇遺跡

1. 調査の概要

寺ノ脇遺跡Ⅰ区は87㎡、Ⅱ区78㎡の調査をおこなった。

寺ノ脇Ⅰ区の調査は、最初に埋め戻されていた試掘トレンチを再掘削し、土層、遺構面の確認をおこなった。その後、サブトレンチを掘り、土層を確認しながら、全体を掘り下げていった。その結果、遺構面2面を確認し、縄文から現代の遺物が多く出土した。試掘トレンチの結果もふまえて、表土から0.4m掘り下げた面（第7層 暗茶褐色砂質土上面）を第1遺構面、また、その面から0.1～0.2m掘り下げた面を第2遺構面（第11層 暗褐色砂質土上面）として調査をおこなった。

第1遺構面から、ピットや土坑を検出したが、覆土から、土師器や須恵器に混じって、陶磁器や瓦、飲料水のビンが出土した。また、基盤層（第7層）からも近・現代の遺物が出土した。第2遺構面からもピットや土坑を検出し、ピット内や覆土から、縄文土器や弥生土器、土師器や須恵器の他に土師質土器や陶磁器が出土したため、近世以降の遺構であると考えられた。

Ⅱ区はⅠ区の調査結果から、表土から0.4mは重機で掘削し、その後、土層確認の為のサブトレンチを掘り、全体を掘り下げていった。Ⅱ区において、Ⅰ区の第1遺構面と同じ面からコンクリートの溜め枘が検出され、付近の人の話によると、明治から昭和30年代頃までは家や牛小屋などが建っていたらしい。遺構内にある溜め枘は、第1遺構面と同じ面であるため、第1遺構面も近世以降の面と考えられた。そのため第1遺構面については遺物の取り上げだけを行い、掘り下げていくことにした。第1遺構面の下には第2遺構面、第3遺構面（第21層 黄灰色砂礫層、第22層 淡黄褐色砂質土上面）があり、第3遺構面はⅡ区のみで確認した。

第1遺構面は近代から現代の遺構と考えられた為、第2遺構面と第3遺構面について記述する。

2. 土層堆積状況・遺物出土状況（第44図）

表土から0.4～0.5mは耕作土や盛土（造成土）で、近代から現代の遺物を含んでいた。表土面は、標高2.9mを測る。表土から1.7～1.8m下（標高1.0～1.2m）には頁岩の岩盤があり、北から南（中海側）に向かって緩やかに傾斜していた。これは浸食された中海の湖岸と考えられ、第21～24層は汀線が下がったことによって堆積した海浜礫と考えられた^{註1)}。主な堆積土層と出土遺物について記述する。

・第1～6層（表土～暗褐色土）

表土から0.5～0.6mの耕作土を含む土層である。弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、ガラス、ビンが出土した。

・第7層（暗茶褐色砂質土）

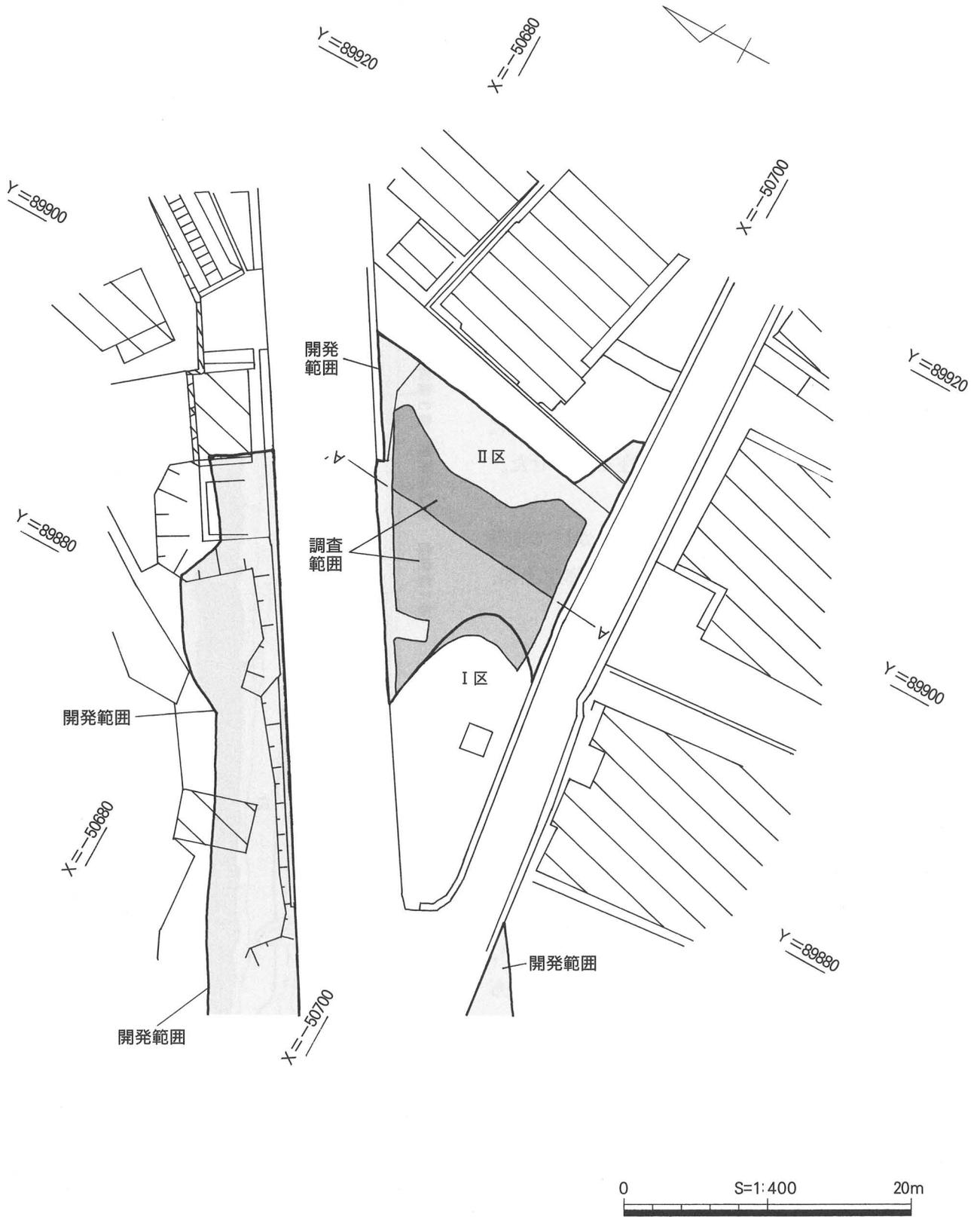
第1遺構面の基盤層である。

近くの山の土（明黄色土）と褐色土が混ざり合った土層である。山を削った際に盛られた造成土と思われる^{註1)}。弥生土器、須恵器、土師器、タイルが出土している。

・第11層（暗褐色砂質土）

第2遺構面基盤層である。

暗褐色の硬くしまった土層で、砂を含んでいる。縄文土器から陶磁器まで幅広い時期の土器が出土した。土器は二重口縁の壺、甕など古墳時代前期の土師器が多くみられるが、近世の



第43図 寺ノ脇遺跡開発範囲・調査範囲図

陶磁器も出土していることから、近世以降の土層と考えられる。黒曜石は全土層から多く出土しているが、製品はこの土層のみで確認された。

・第15層 (暗褐色砂層)

厚さ0.1~0.2mの砂層であるが、出土遺物の量は本調査区の中なかで一番多い。縄文土器から近世まで幅広い時期の遺物が出土し、第11層と同様に古墳時代前期の土師器が多く出土した。これらの遺物は破片が多く、風化が著しいものもあったが、一個体になるものもあり、周辺に古墳時代前期の遺構の存在を窺わせた。

・第18層 (オリーブ色砂層)

I・II区間畦付近からI区にかけて堆積した土層である。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

・第19層 (黄褐色砂礫層)

調査区北側の堆積土層で、5cm大の扁平な礫を多く含んでいた。土師器、須恵器が出土している。

・第21層 (黄灰色砂礫層)

第3遺構面基盤層

5cm以下の扁平な礫を多く含む土層で、第3遺構面の基盤層である。土師器、弥生土器は少なく、縄文土器の方が多い。出土した縄文土器は後期から晩期のものと考えられる。

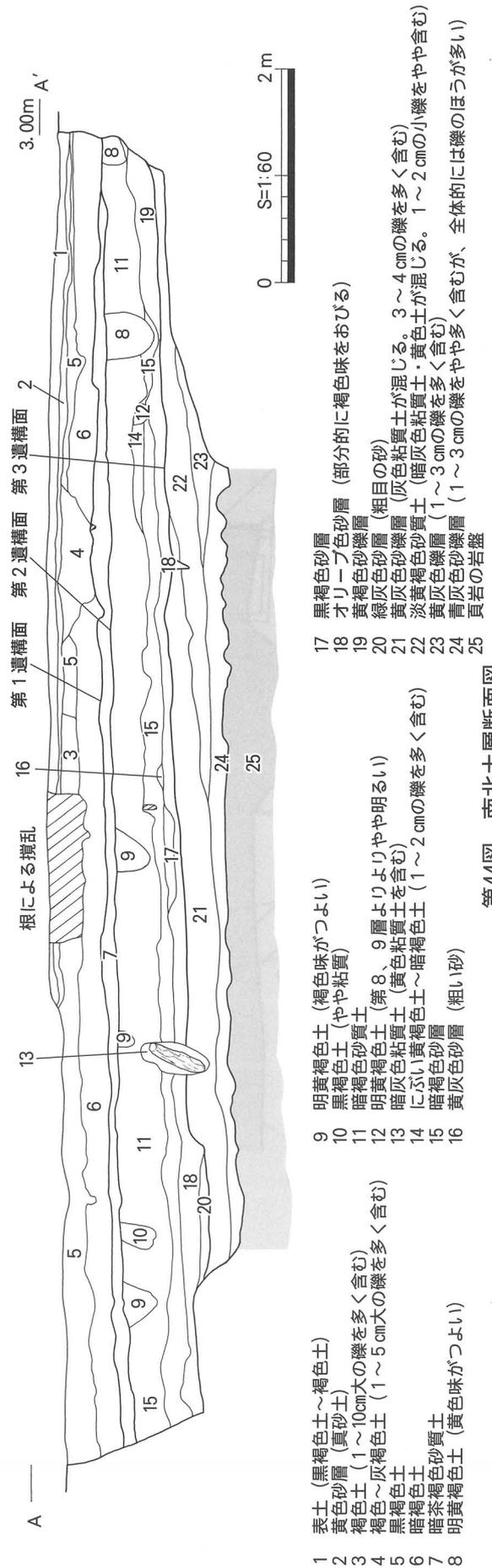
・第22層 (淡黄褐色砂質土)

第3遺構面の基盤層

第21層より小さめの礫を含む砂質土である。土師器、須恵器、縄文土器の細片が出土した。

・第24層 (青灰色砂礫層)

岩盤直上の1~3cm大の礫を多く含む土層である。縄文時代後期から晩期の土器が出土している。



3. 第2遺構面 (第45図)

第11層(暗褐色砂質土)上面で検出した遺構である。表土から0.5m下、検出面標高2.0~2.4mを測り、北から南に向かって緩やかに傾斜している。多数のピットと土坑4基、杭を11本検出した。ピットの上端径は0.2~0.7m、深さ0.1~0.6mと大きさも深さも様々であった。ピット内からは縄文から近世までの遺物が幅広く出土し、また、I区の西側のピットからは近世の瓦が多く出土した。埋土や出土遺物、柱穴間などから建物跡を想定してみたが難しく、柱列をA-A'で確認するのみであった。この柱列の柱穴は上端径0.24~0.44m、深さ0.16~0.37m、柱穴間は1.3mを測る。ピット内からは弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土した。

SK01は長径0.78m、深さ0.44mを測る円形の土坑で、志野焼や肥前系陶器(第46図-22)が出土した。SK02は長径1.0m、深さ0.37mの長円形の土坑、SK03は長径0.73m、深さ0.45mを測る円形の土坑である。この2個の土坑からは土師器や須恵器が出土している。SK04は長径1.2m、深さ0.3mを測る隅丸方形の土坑で、陶器(第46図-23)が出土した。

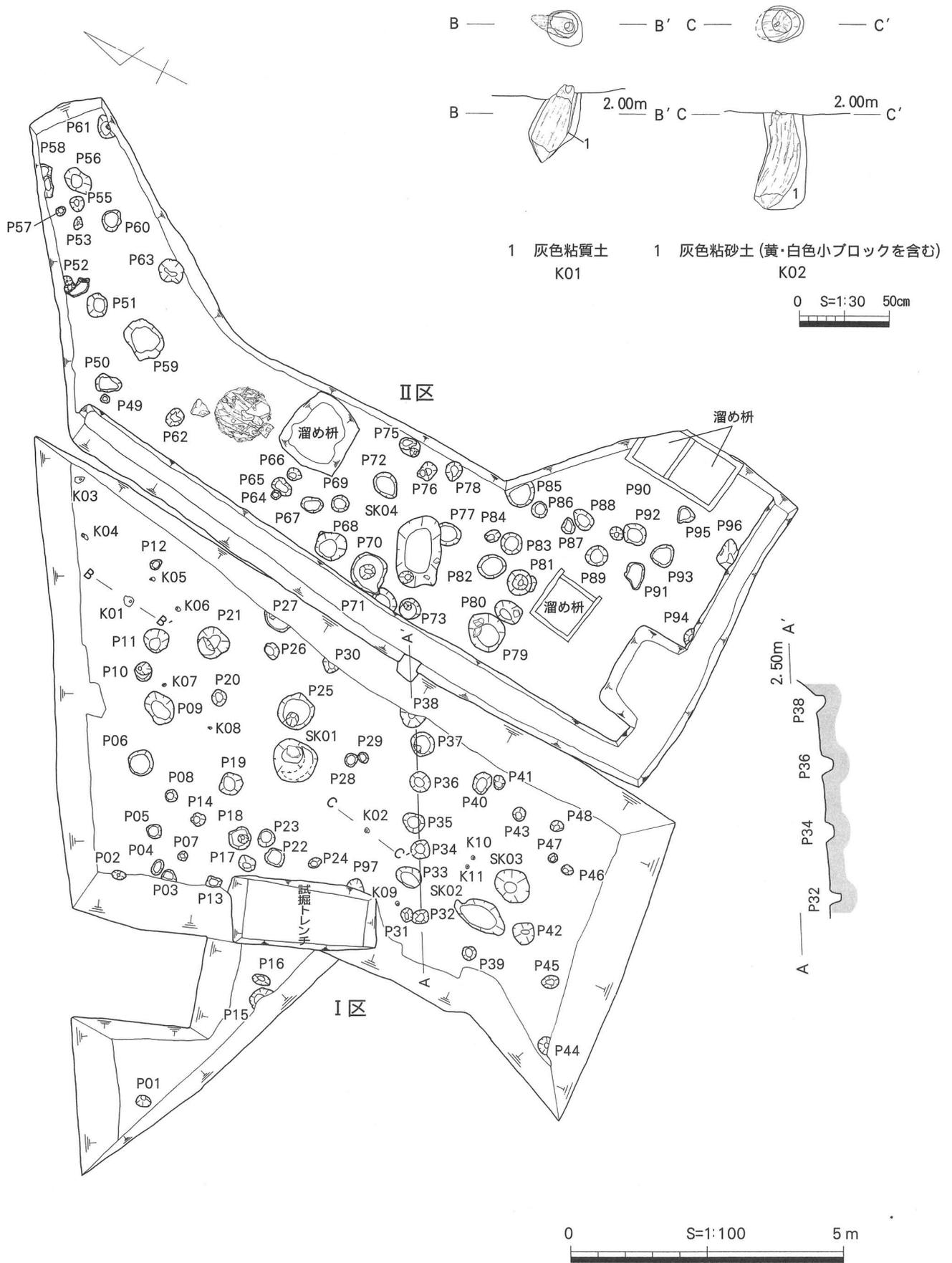
検出した杭の直径は13~22cm、長さ0.2~0.58mを測り、松やクヌギのなど樹皮がついたもの(K02)が多かった。また杭はないのだが、検出した円形状のプランを掘ると、穴の縁辺に樹皮だけが残っていたものもあり、杭が抜き取られた痕跡と思われた。これらの杭は加工も雑で、樹皮がついていることから、簡易的な用途で使用されていたと推測される。

出土遺物(第46~47図・図版29,30上) 第46図はピットや土坑内から出土した土器である。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、杭などが出土した。第46図の1、2は縄文土器で、2は口縁端部に刻目突帯がめぐる。3は松本編年V-2様式に相当する甕で、口縁端部を上には拡張し、風化が著しいが外面に凹線を施している。4は小形器台の坏部で、体部と口縁部の境は稜をなし口縁部は外反してのびるもので、弥生時代終末頃のものと思われる。5・6は弥生土器の底部で、6は底部に直径2cmの穴が穿たれている。7~9は鼓形器台、10~12は古墳時代前期から中期の甕、13は高坏の坏部である。15~20は須恵器である。16・17は口縁の内側にかえりをもつ蓋で大谷編年出雲6期に相当すると考えられる。18~20は底部回転系切り痕の坏で8世紀中頃以降のものである。21は底部にかすかに回転系切り痕がみられる。22・23は陶器で、22は肥前系の皿である。第47図の24・25は遺構内から出土した杭で、先端は鈍角に加工され、25(K02)は松の樹皮が残っている。

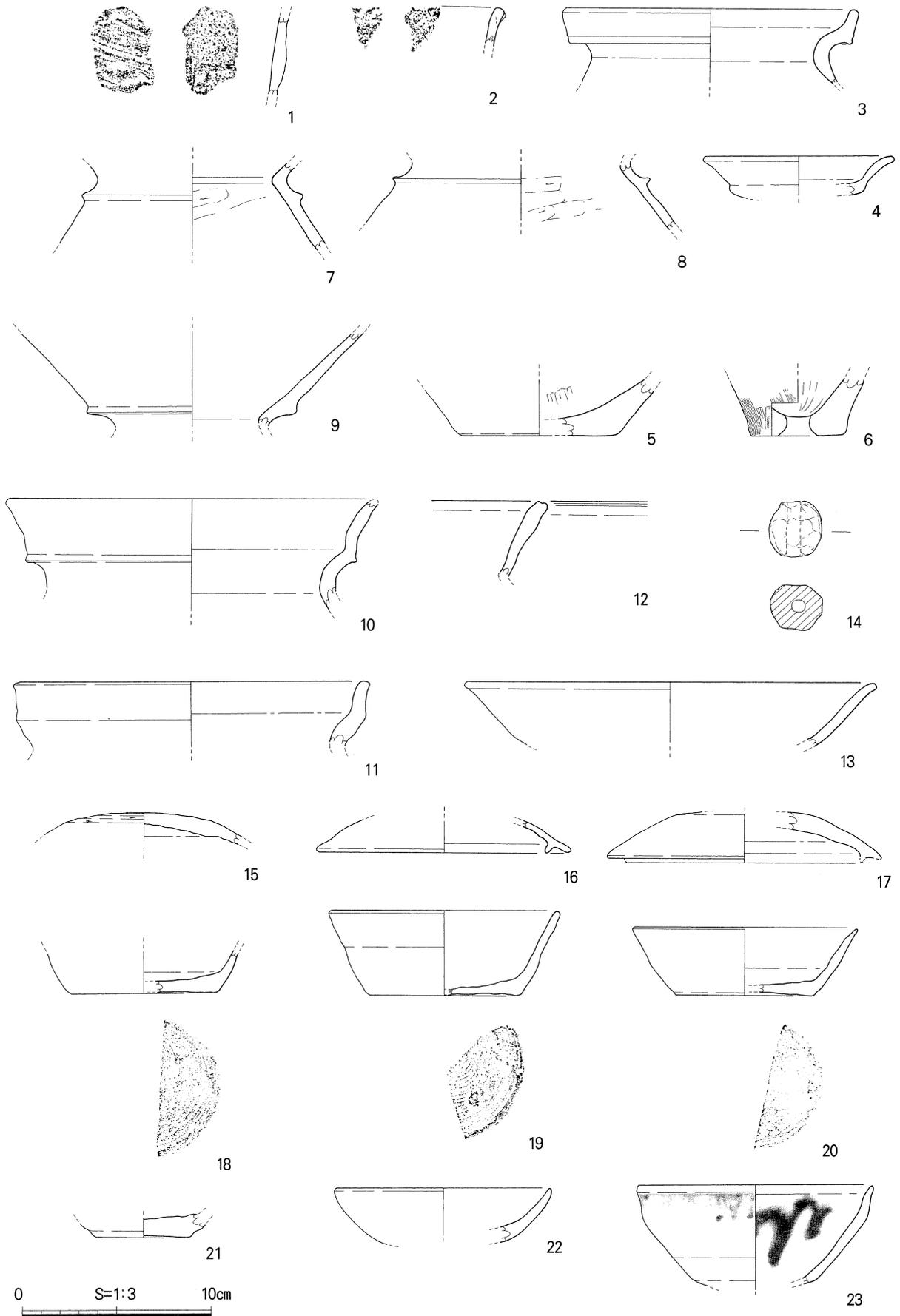
第2遺構面の基盤層(暗褐色砂質土)からは近世から近代の陶器が出土し、第2遺構面はその時期より新しいと考えられる。第2遺構面の覆土(第7層 暗茶褐色砂質土)からはタイルなどの現代のものが出土していることから、第2遺構面は近世以降の遺構面で、第7層を造成する際に削平されたと推測される。

4. 第3遺構面 (第48図)

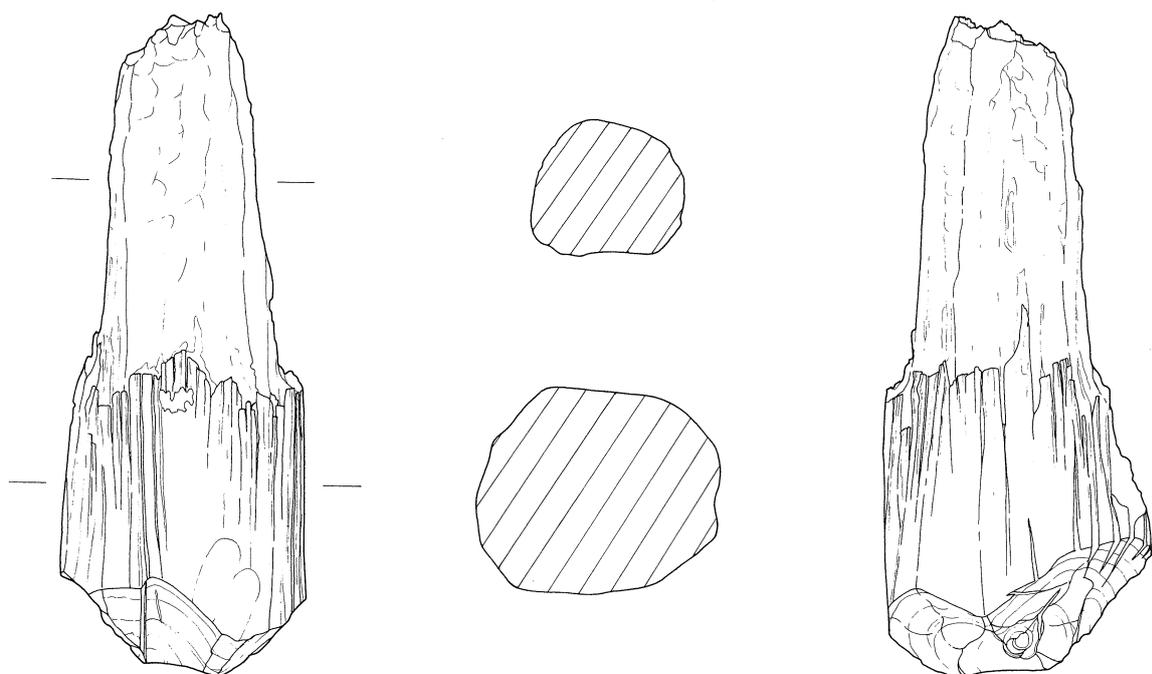
第21層(黄灰色砂礫層)、第22層(淡黄褐色砂質土)上面で検出した遺構である。I区では確認できなかったため、II区のみ遺構面である。検出面標高は1.4~1.8mを測り、第1遺構面と同様、北から南に向かって緩やかに傾斜している。ピットやSD01(溝状遺構)を検出した。ピットは上端径0.4~0.9m、深さ0.1~0.3mと浅いものであった。



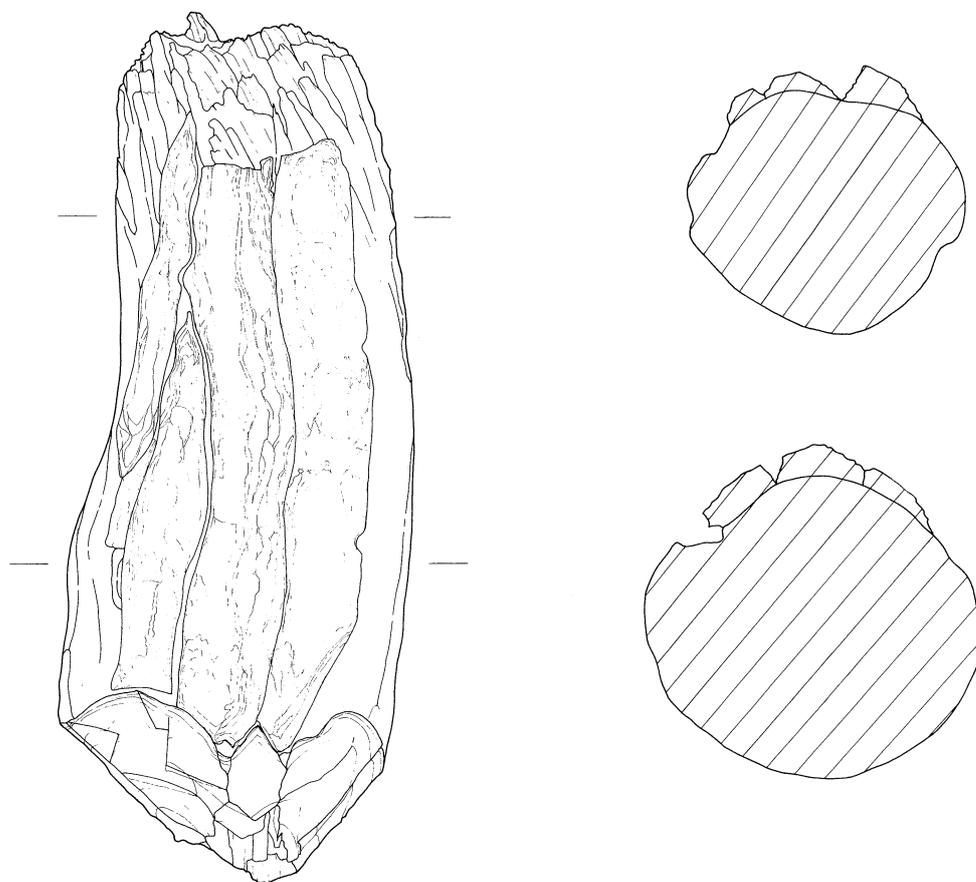
第45図 第2遺構面実測図



第46図 第2遺構面・遺構内出土遺物実測図(1)



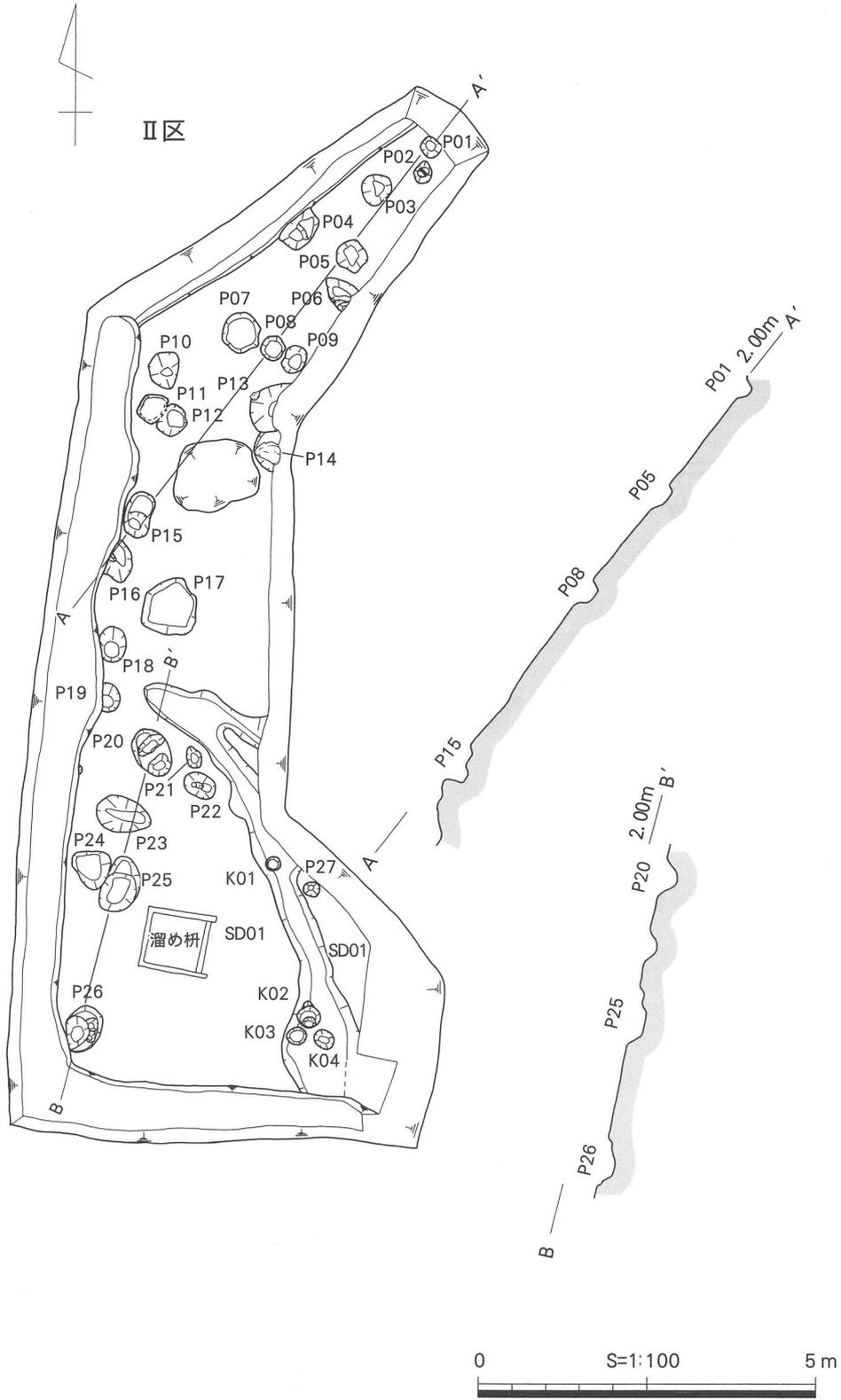
24



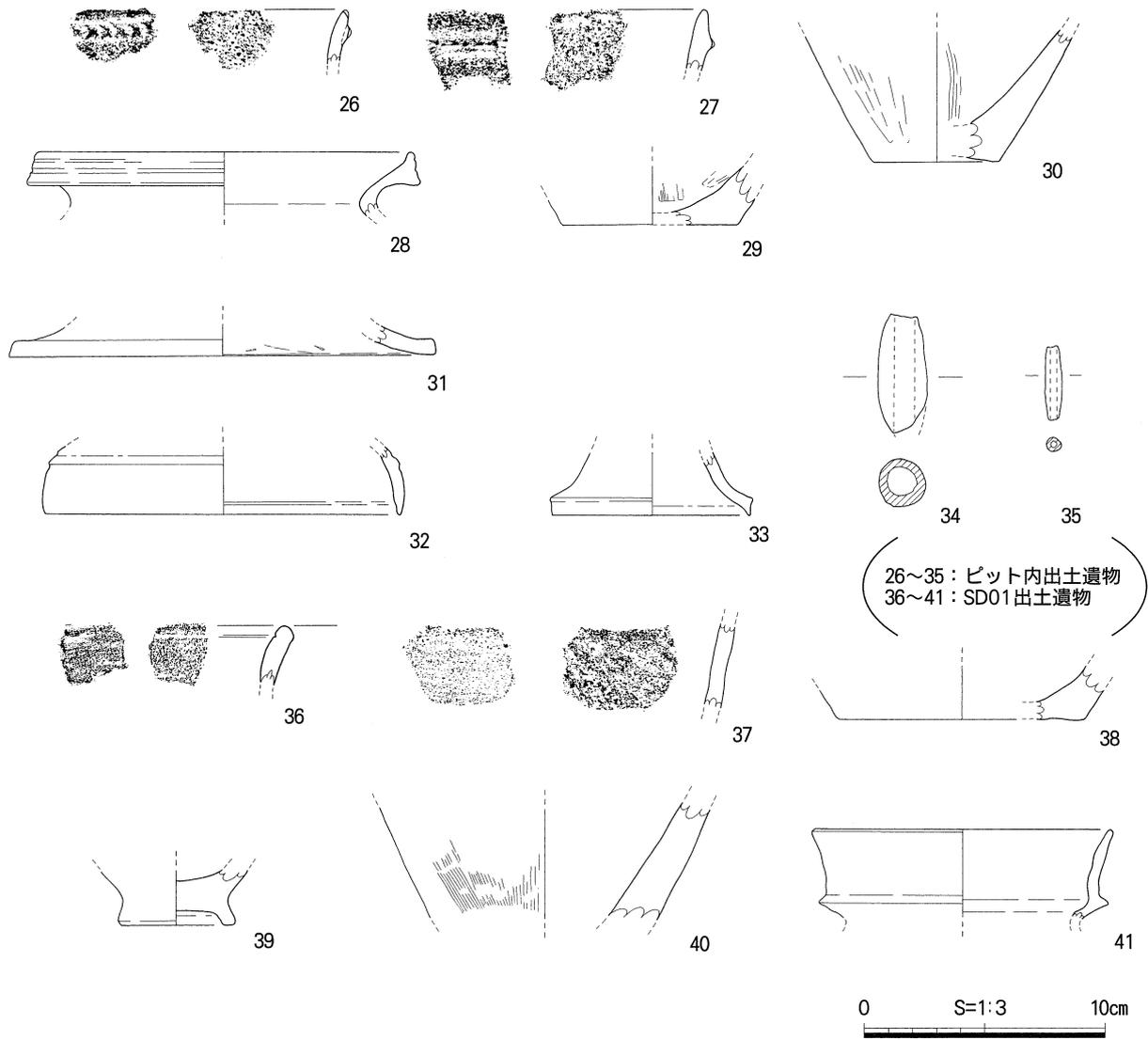
25

0 S=1:5 8 cm

第47図 第2遺構内出土遺物実測図(2)



第48図 II区第3遺構面実測図



第49図 II区第3遺構面・遺構内出土遺物実測図

建物跡は想定できなかったが、柱列を確認した。A-A'は柱穴4個(P1、5、8、15)の柱列である。P01～P05、P05～P08の柱穴間は1.8mを測る。P8とP15間は3.0mあり、あいだにもう1個柱穴があった可能性も考えられる。柱穴は直径0.2～0.4m、深さは0.15m未満である。ピット内から土師器の高坏の脚部が出土しているが、時期は不明である。

B-B'は3個の柱列(P21、25、26)である。P20、P25、P26の柱穴間は2.20mを測り、深さは0.2m未満と浅い。ピット内からは土師器や弥生土器の細片が出土した。

P18、P19、P24は縁辺に樹皮(松皮)が残っており、第2遺構面と同様に松杭が抜き取られた痕と思われる。ピット内からは縄文土器、土師器、須恵器、土錘が出土している。

SD01は、調査区の東側から南側に流れる溝状遺構で、自然流路と考えられる。長さ7m、幅1.0m、深さ0.1mの浅い溝で埋土は暗褐色砂層である。溝内からは縄文土器、弥生土器、土師器が出土した。K01～K04は長さ10cm程度の杭が残る穴である。杭は摩滅していて加工痕ははっきりしない。SD01の埋土から掘り込まれており、第3遺構面より新しいと考えられる。

出土遺物(第49図・図版30下) 第49図の26～35はピット内から出土した遺物である。26・27は縄文土器である。26は口縁からやや下がった位置に刻目突帯がめぐり、27は刻目がみられない。28・29・30は弥生土器で、28は口縁端部を上下にやや拡張し、平坦面に凹線を施した甕である。31は土師器、高坏の脚部である。32・33は須恵器である。32は口径14.8cmを測る蓋坏で、口縁端部を浅い段状にし、肩部に稜線を施している。33は古墳時代後期の高坏の脚部である。

36～41はSD01出土遺物である。36・37は縄文土器で、36は磨消縄文の深鉢と思われるが、小片で全体の形状がわかりにくい。縄文時代後期後葉から晩期前葉の土器である。38～40は弥生土器の底部、41は古墳時代前期の複合口縁の甕である。

第3遺構面の基盤層、第21層(黄灰色砂礫層)や第22層(淡黄褐色砂質土)から土師器片が出土し、ピット内や覆土、第18、19層(オリーブ色砂層や黄褐色砂礫層)からは古墳時代後期の須恵器片が出土していることから、第3遺構面の時期は古墳時代後期以降と考えられる。

5. 主な土層の出土遺物について

寺ノ脇遺跡は調査範囲が狭い割には多くの遺物が出土した。出土遺物の時期は縄文時代から現代までと幅広い。古墳時代前期の遺物が全体の7割を占めているが、他の時期の遺物もあり、主な土層の出土遺物を掲載し、概略を記述する。本来ならば第7層などは第2遺構面を覆う包含層として、第2遺構外出土遺物として取り扱うべきかもしれないが、第2遺構面の基盤層から出土した遺物と対比させるためここで取り扱うこととした。11～21層についても同様である。

(1) 第7層・暗茶褐色砂質土（第50～52図・図版31～33上）

第1遺構面の基盤層である。近代以降の遺物が出土しており、土層としては新しいとは思われるが、幅広い時期の遺物が出土しているため、記載することとした。

縄文土器（第50図42～46・図版31） 第50図の42は深鉢の口縁で器面調整は内外面共ナデである。43・44は突帯文土器で、43は突帯と口縁端部に刻目、44は突帯に刻目を施す。45・46は深鉢の破片で45は内面に、46は外面に条痕がみられる。

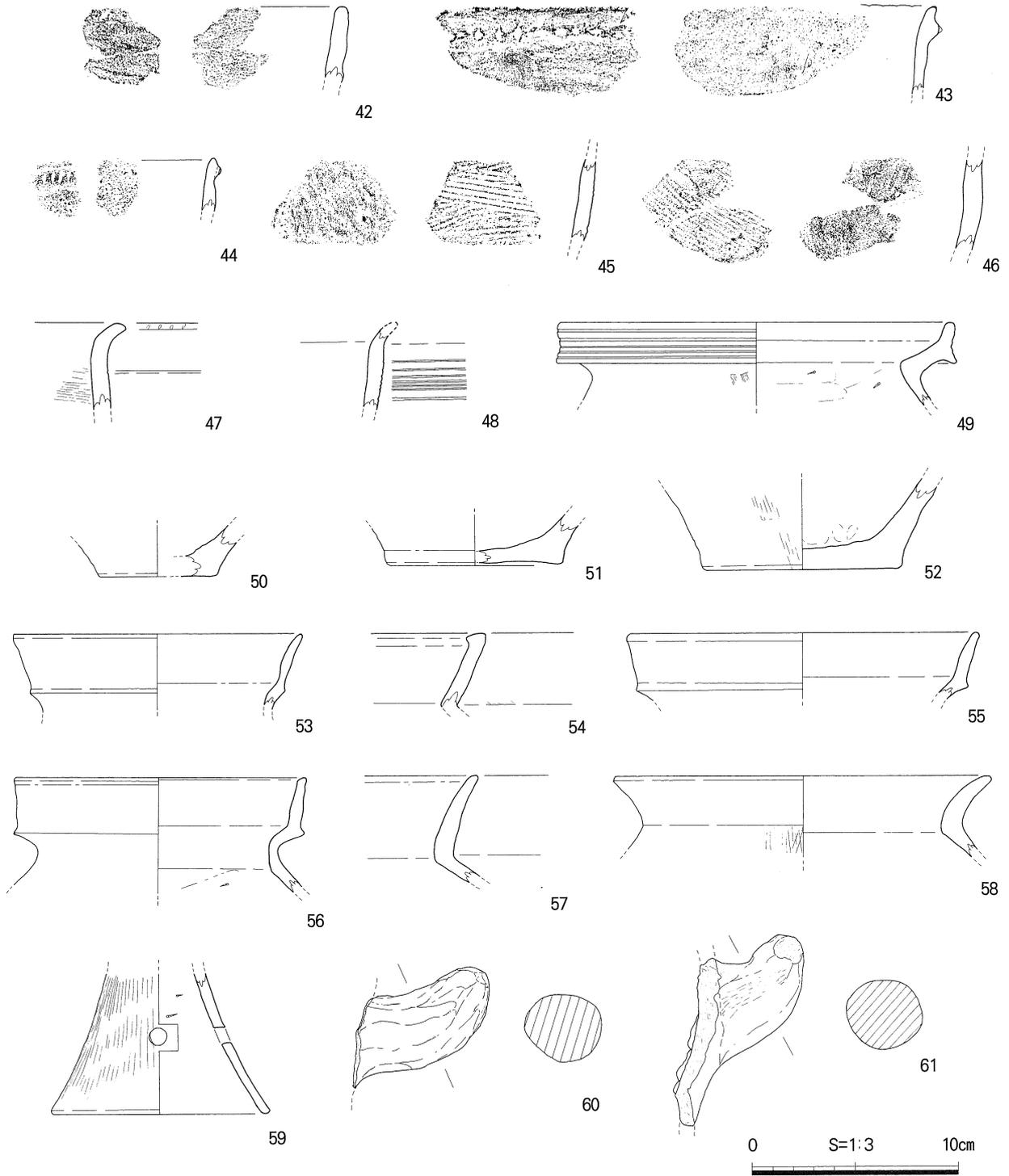
弥生土器（第50図47～53・図版31） 第50図の47は風化しているが、口唇部に刻目、頸部に1条のヘラ描直線文を施す甕で、松本編年Ⅰ—2様式に相当する。48は口縁端部を欠いているが、頸部に7条のヘラ描直線文を描く甕で、松本編年Ⅰ—4様式に相当する。49は口縁端部を上下に拡張し、外面に凹線文を施し、松本編年Ⅴ—1様式と思われる。調整は胴部外面ハケ後ナデ、内面ヘラ削りを施す。50～52は底部である。53は口径17.0cmを測る複合口縁の甕である。口縁部は丸くおさめられ、複合口縁の稜はさほど突出していない。弥生時代終末から古墳時代初頭のものと思われる。

土師器（第50図54～61・図版31） 第50図の54は単純口縁のいわゆる布留甕である。55・56は複合口縁の甕で、56は口縁がわずかに外反し、端部に平坦面がつくられている。57・58は単純口縁の甕である。54～58は古墳時代前期から中期のものと思われる。59は小形器台ないし小形高坏の脚部である。器面調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリとナデを施し、透かしをいれている。他地方からの搬入品と考えられる。60・61は把手である。

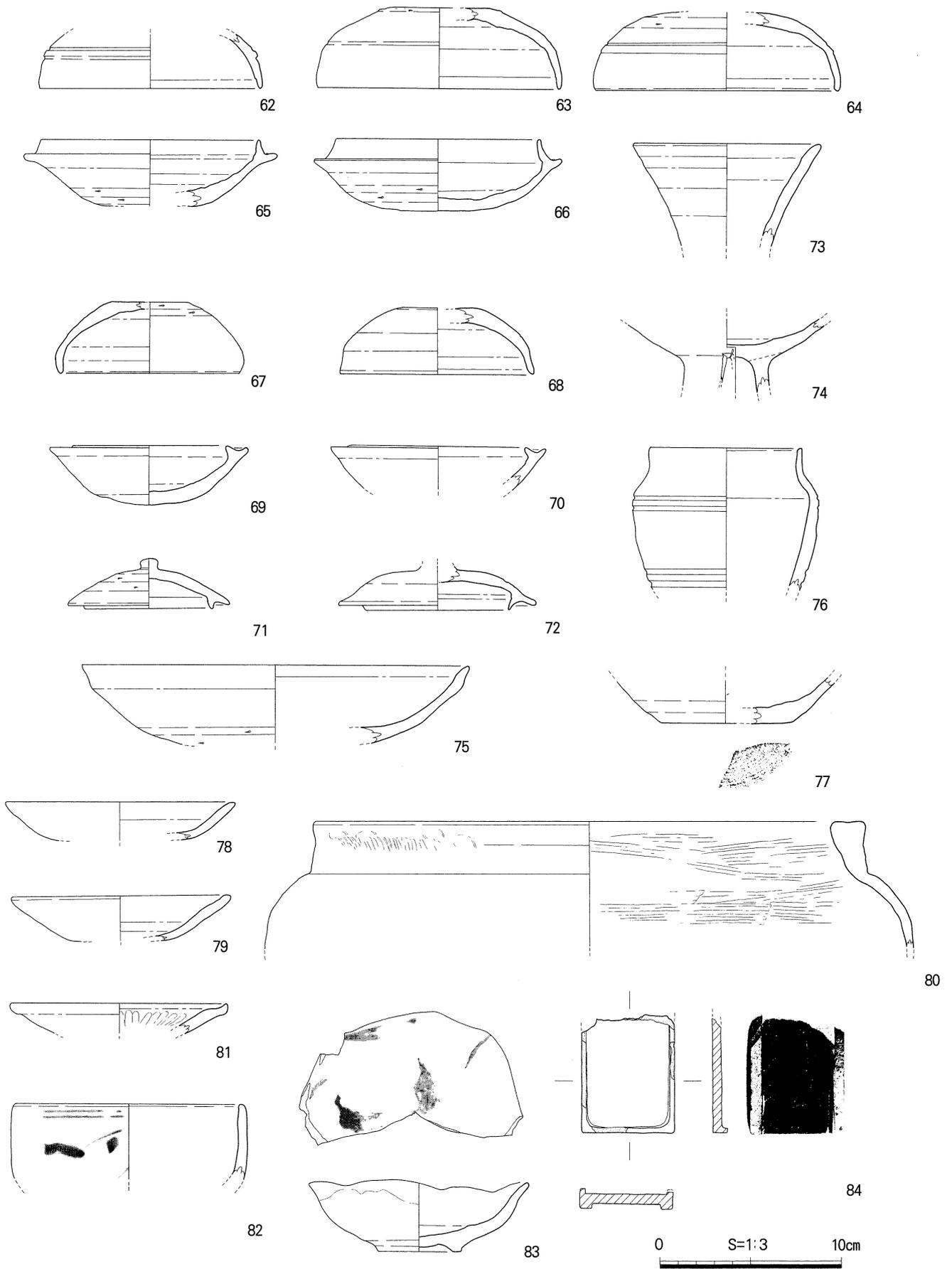
須恵器（第51図62～77・図版32） 第51図62～72は蓋坏である。62は口径12.2cmを測る。口縁端部内面を緩い段状にし、肩部には2条の沈線を入れ突帯をつくっている。63は口径13.4cmを測り、口縁端部内面と肩部に沈線をいれている。64は口径12.4cmを測る。肩部に2条の沈線を入れている。大谷編年出雲3～4期ものと思われる。67・69・70は口径10cm以下の蓋坏である。71・72は口縁の内側にかえりがつき、乳頭状のつまみが付くものである。73は長頸壺の口縁、74・75は高坏で、67～75は大谷編年出雲6期ものものと考えられる。76は口径8.3cm、残高8.0cmを測る短頸壺である。体部上半と下半にそれぞれ2条の沈線を廻らせている。77は坏の底部と思われる。回転糸切りで8世紀半ば以降のものである。

土師質土器・陶器・硯（第51図78～84・図版32、33上） 第51図78、79は土師質土器の皿である。口縁部の破片で明確な時期はわからないが、中世以降の所産と思われる。

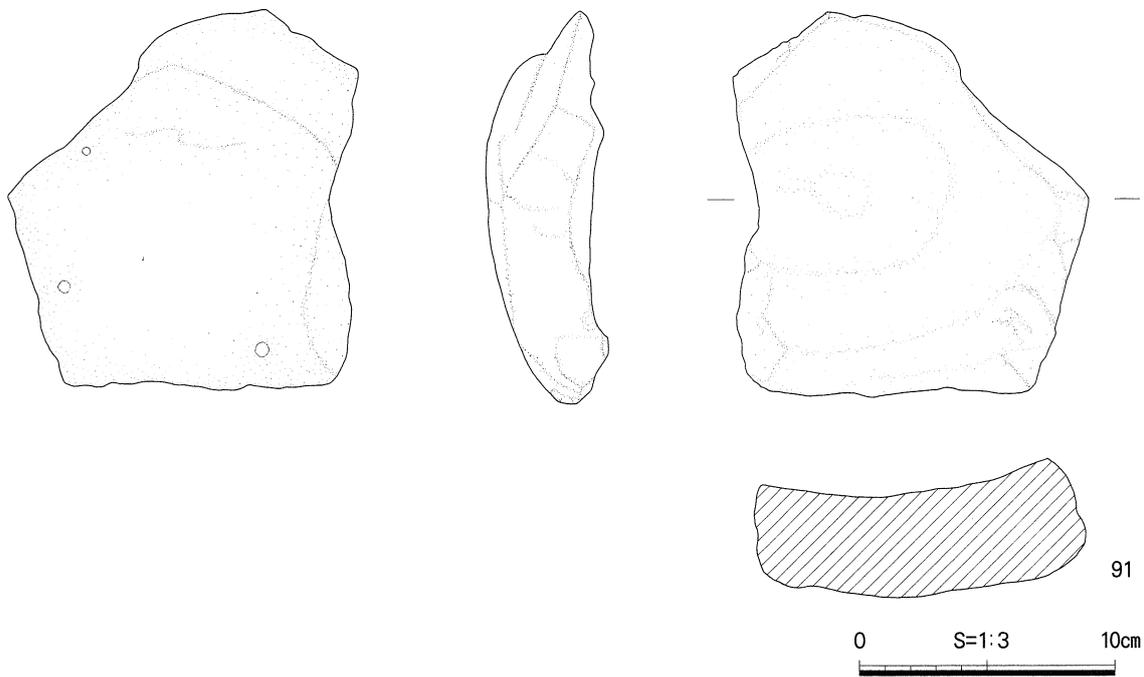
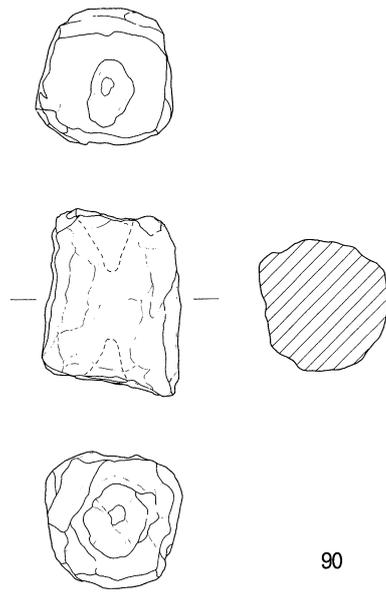
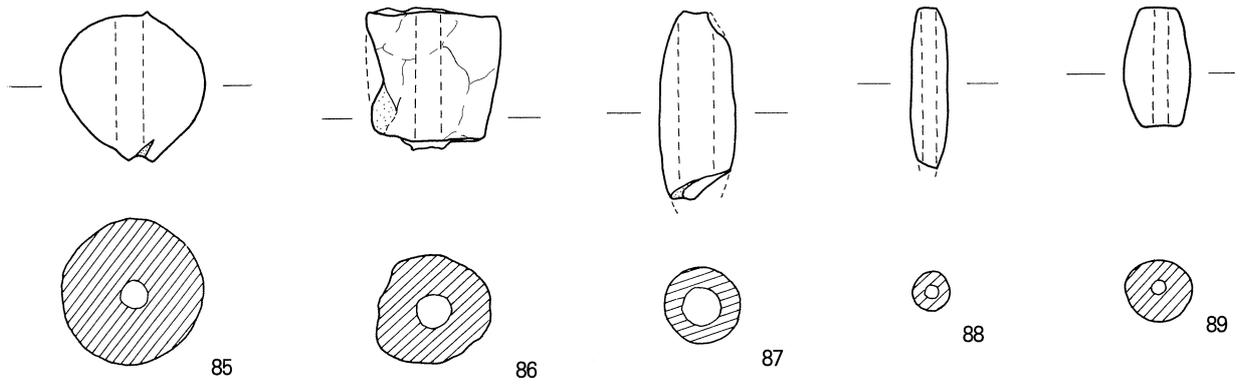
80は口径30.6cm、残高7.0cmを測る土師質土器の火入れ道具と思われる。口縁端部は肥厚し、平坦面をつくる。体部は頸部から大きく広がり、丸みをおびる。器面調整は口縁端部ナデ、内面粗いハケ



第50図 暗茶褐色砂質土出土遺物実測図(1)



第51図 暗茶褐色砂質土出土遺物実測図(2)



第52図 暗茶褐色砂質土出土遺物実測図(3)

メ、外面の頸部から口縁はハケ後ナデ、体部はナデと指押さえである。近世以降のものと思われる。

81～83は陶器である。81は瀬戸の菊皿、82は18世紀代の肥前系陶胎染付の碗、83は肥前系の皿で銅緑釉がかかる。84は残存長6.6cm、幅5.2cm、厚さ1.1cmの硯で裏に文字が彫られているが、判読できなかった。

土製品・石製品（第52図85～91・図版33上） 85は最大径3.8cm、孔径0.7cm、重さ46.71gを測る土玉である。86は最大長3.7cm、最大径3.5cm、孔径0.9cm、重さ47.64gを測る円柱状の土錘で、石と見間違うような硬い胎土である。87は残存長5.0cm、最大径2.1cm、孔径1.0cmの大型の土錘である。88は残存長4.2cm、最大径1.0cm、孔径0.3cm、89は最大長3.1cm、最大径1.7cm、孔径0.4cmを測る土錘である。90は最大長7.2cm、最大幅5.3cmを測る四角柱状の石である。両側に最大径2.6～3.0cm、深さ1.6～2.1cmの円錐状の穴が穿たれている。石錘の未製品であろうか。91は石皿の欠損品で、大海崎石を使用している。最大長15.3cm、厚さ4.1cmを測り、中央部にかけてくぼんでいる。

(2) 第11層・暗褐色砂質土（第53～59図・図版33下～38）

第2遺構面の基盤層である。

縄文土器（第53図92～105・図版33下） 第53図の92は浅鉢で口径20.2cm、残存高3.8cmを測る。内外面共口縁部はナデ、体部はミガキをおこない縄文時代晩期前半のものと思われる。93～105は晩期突帯文の深鉢である。突帯と口縁端部に刻目、94～102は風化してはつきりしないものもあるが、突帯に刻目をもつものである。103～105は突帯に刻目をもたないものである。

弥生土器（第53図106～123・図版34） 第11図の106～111は口縁部が「く」の字状にやや緩く外反する甕である。106は口唇部に刻目、口縁直下に1条のヘラ描き直線文を施している。調整は内外面ともハケ調整をおこなう。107～109は口唇部に刻目をもち、110・111は刻目をもたない。112は甕の胴部で、9条の櫛描直線文の下に三角形の刺突文を施している。106～113は弥生時代前期末から中期初頭のものである。114は胴部最大径8.7cm、残存高5.7cmを測り、内外面共指頭圧痕やナデが施されている。器種は不明である。

115は口縁部が大きく開き、拡張された端部外側に凹線文を施す広口の壺で、口径37.4cmを測る。116は甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は上下に拡張され凹線文が施されている。117～120は上下に拡張された口縁部外面に凹線文が施された甕である。121は複合口縁を有する甕で、口径28.0cmを測る。口縁部外面に凹線文を施し、胴部内面にヘラケズリ、外面にハケ調整をおこなっている。122は底部、123は小形器台の坏部である。115・116は松本編年Ⅳ－2様式、117～121はⅤ－1～2様式、123は弥生終末頃のものと思われる。

土師器（第54～56図－157・図版35～36） 第54図の124～137は壺、甕である。124は複合口縁の甕で口縁端部を丸くおさめ、草田6～7期のものと思われる。125は布留甕である。126は複合口縁の直口壺で、外面は風化しているが、内面には指頭圧痕と横方向のハケメがみられる。127～135は複合口縁の甕で口縁端部は平坦で、外側にやや肥厚させたものもある。調整は口縁部が内外面共ナデ、体部内面は横または右上がりのヘラケズリ、外面はハケメを施している。136の壺は、口縁部の立ち上がりが高く、厚くて短く、端部に平坦面が作られている。137は口縁が欠損しているが、複合口縁の甕である。底部は丸底で、底部中央には焼成後の穿孔がある。調整は胴部内面がヘラケズリ、底面が指先による

調整痕（圧延痕）、外面はハケやナデが施されている。126～135・137は草田6～7期に相当し、136も古墳時代前期のものと思われる。第55図、138・139は単純口縁の甕である。140は口径32.0cmを測り、大きな鉢のようなものではないかと思われる。

141～143は低脚坏である。142は口径20.5cm、器高6.1cmを測り、ゆるやかなカーブで立ち上がる坏部をもつ。

144～146は小形丸底壺である。144は比較的長い口縁部で、端部にかけて「ハ」の字状に開いている。145は偏球形の胴部を呈する。146の口縁部は短く開き、外面はやや丸くなっている。いずれも器面調整は外面ナデとハケメ、内面、なで口縁部ナデ、体部ヘラケズリを施している。

147～150は鼓形器台である。147・148は器受部、149・150は脚台部とともに端部にむかって大きく開いている。

第56図151～157は高坏である。151・153は口径24.0cm、29.2cmを測る大形の高坏で、緩やかなカーブを描いて立ち上がるやや深い坏部をもつ。151の内面は風化しており調整は不明であるが、坏部外面には細かなヘラミガキが施されている。153は坏部内面にヘラミガキ、外面にナデ後ヘラミガキをしている。152は坏部外面に段をもち、坏段部の径は18.0cmを測り、大形のものである。156は脚部で透かしがあり、内外面共縦、横方向に丁寧なヘラミガキが施されている。151～153の高坏は古墳時代前期に相当すると思われる。

須恵器（第56図158～166・図版37） 158は坏蓋で、口径12.2cmを測る。口縁端部内面をゆるい段状に仕上げ、肩部に沈線を入れている。大谷編年出雲3期と思われる。161は口径10.4cmの坏身である。163は臚で、肩部からやや下がったところに1条の沈線を廻らせる。調整は内面回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリ、上半回転ナデである。大谷編年出雲5期に相当する。164は輪状つまみの蓋、165は底部回転糸切りの皿と思われる。166は甕の胴部片で、当て具痕が格子目状で中世のものと思われる。

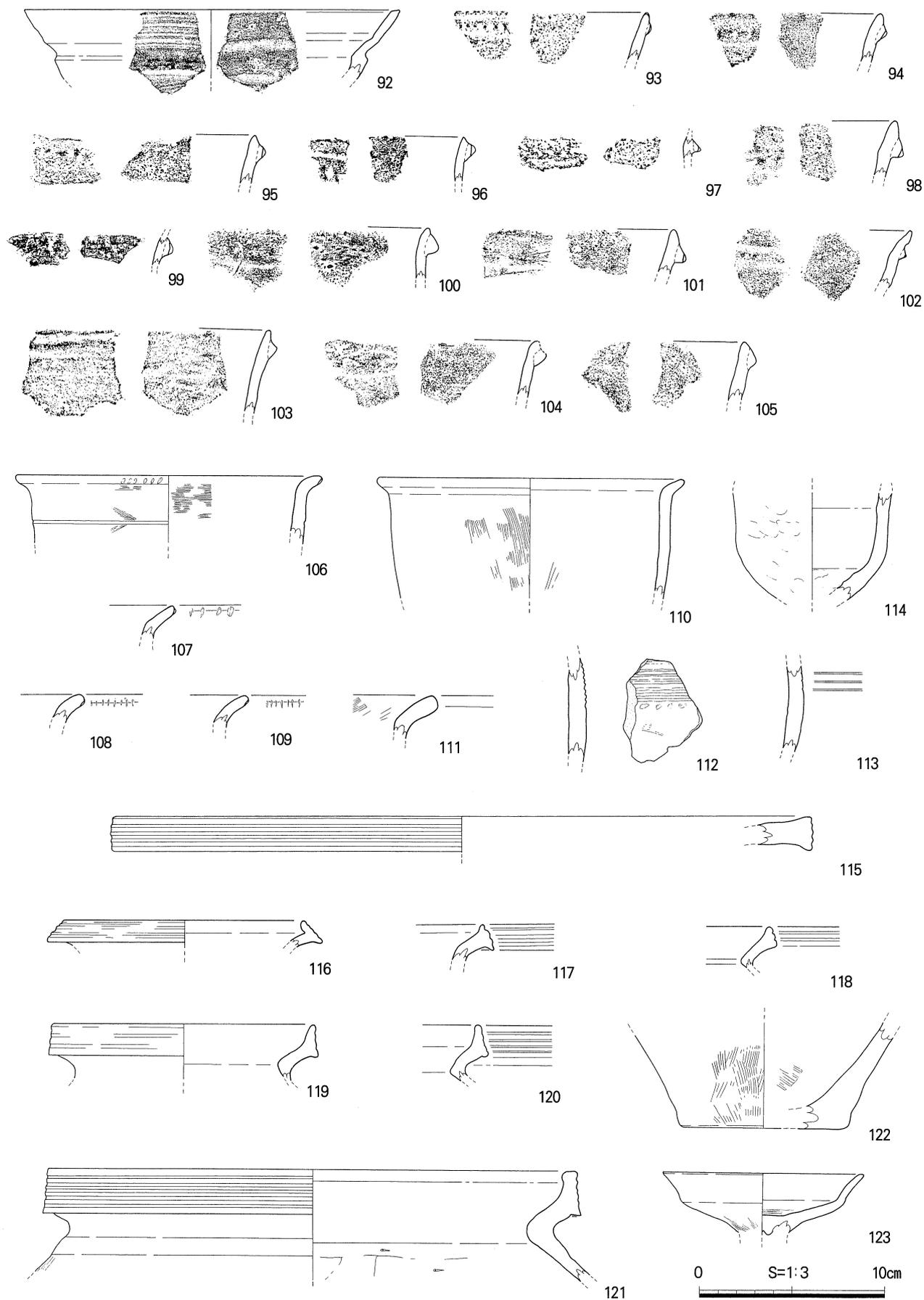
土師質土器・陶磁器（第56図・図版36、37） 第56図、167は土師質土器の皿で、風化が著しく調整は不明である。

168～173は陶磁器である。168は肥前系の青磁の碗である。169～171は17世紀代の肥前系陶器、172は備前焼播鉢である。173は幕末以降の布志名焼の鉢と思われる。

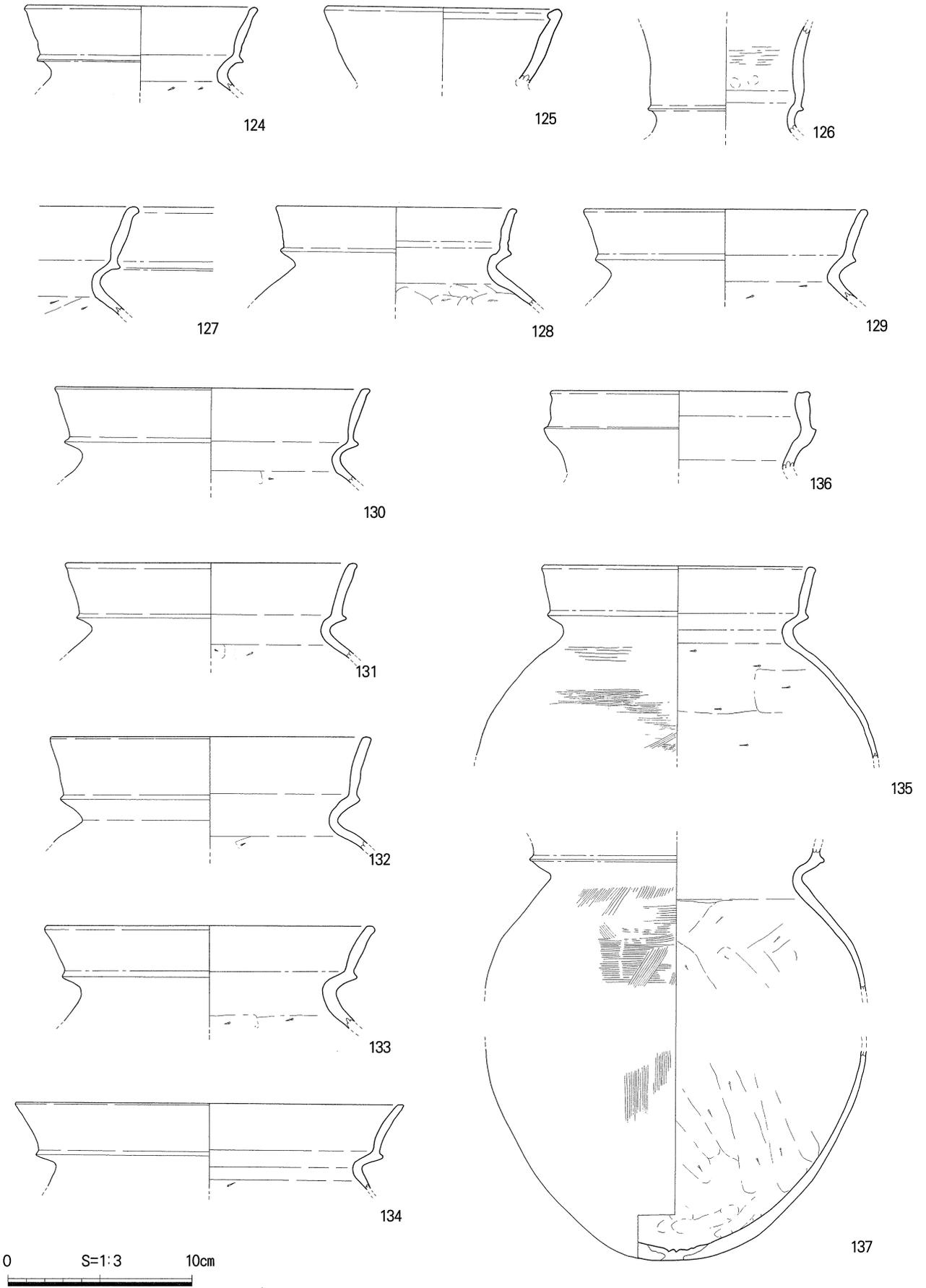
土製品・石製品（第57～59図・図版36、38） 第57図、174～177は土錘である。174は最大径2.5cm、重さ19.18g、175は最大径2.0cm、重さ14.39gを測る。

第58図、178～184は黒曜石製のものである。178・179は凹基式の石鏃で、178は残存長1.5cm、重さ0.31gと小さくて薄いものである。179は残存長2.5cm、厚さ0.8cmを測る。180・181は石錐で、180は先端を欠いている。182はスクレーパーで、残存長3.0cm、最大幅4.2cmを測る。辺縁の剥離痕の大きい方（右側）は刃部で、その反対側（左側）は微細剥離痕である。183は楔形石器で、全長2.7cm、最大幅2.4cmを測る。184は石核で重さは15.01gである。185の材質は不明だが、幅3.0cmのスクレーパーである。

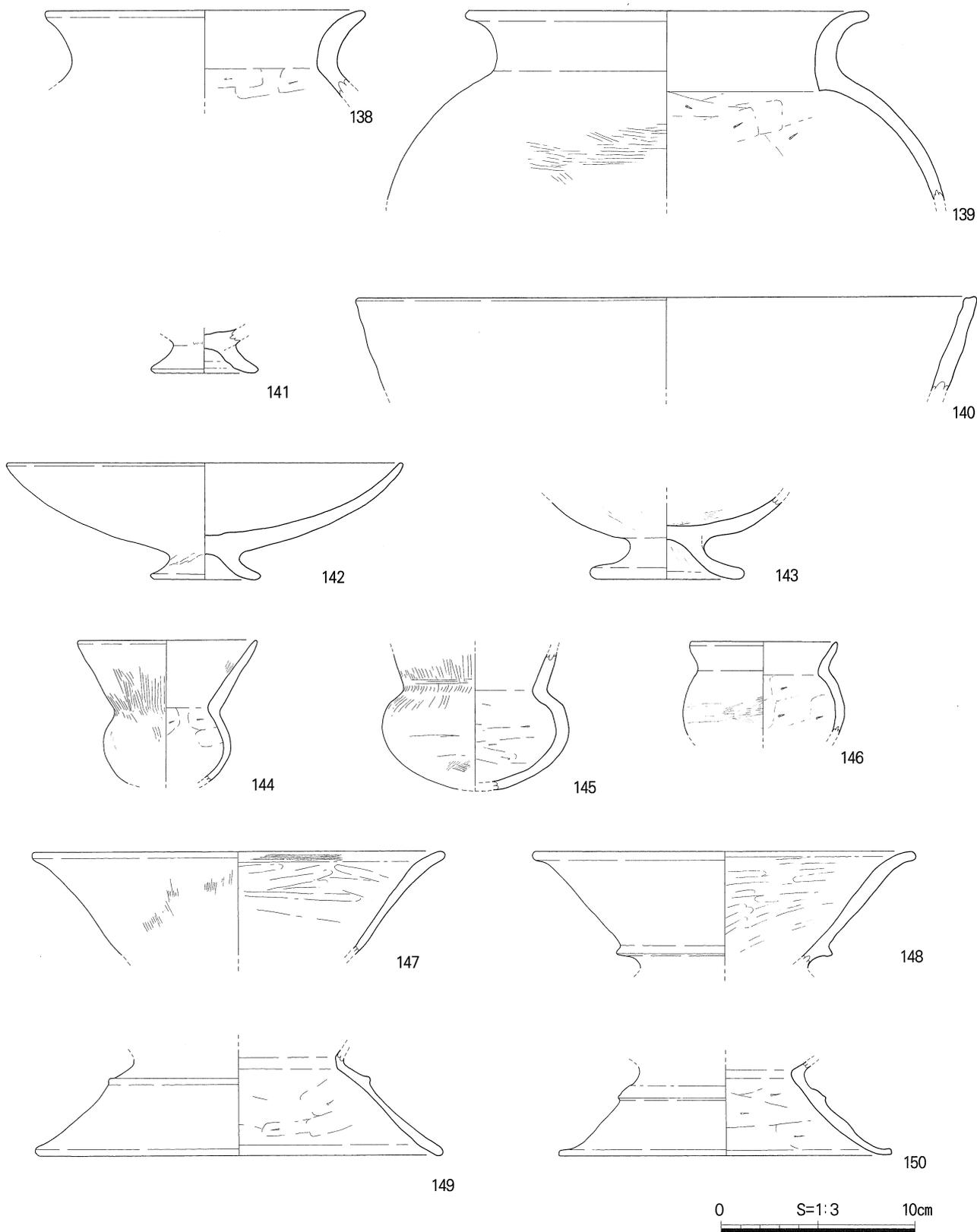
第59図186は刃部を一部欠損している磨製石斧である。187は磨石で、中央部はややくぼみ、下端部に使用痕がみられる。188は打製石斧の欠損品と思われる。189は全長27.5cm、幅9.4cm、厚さ6.4cmの砥石で、使用痕がわずかにみられる。



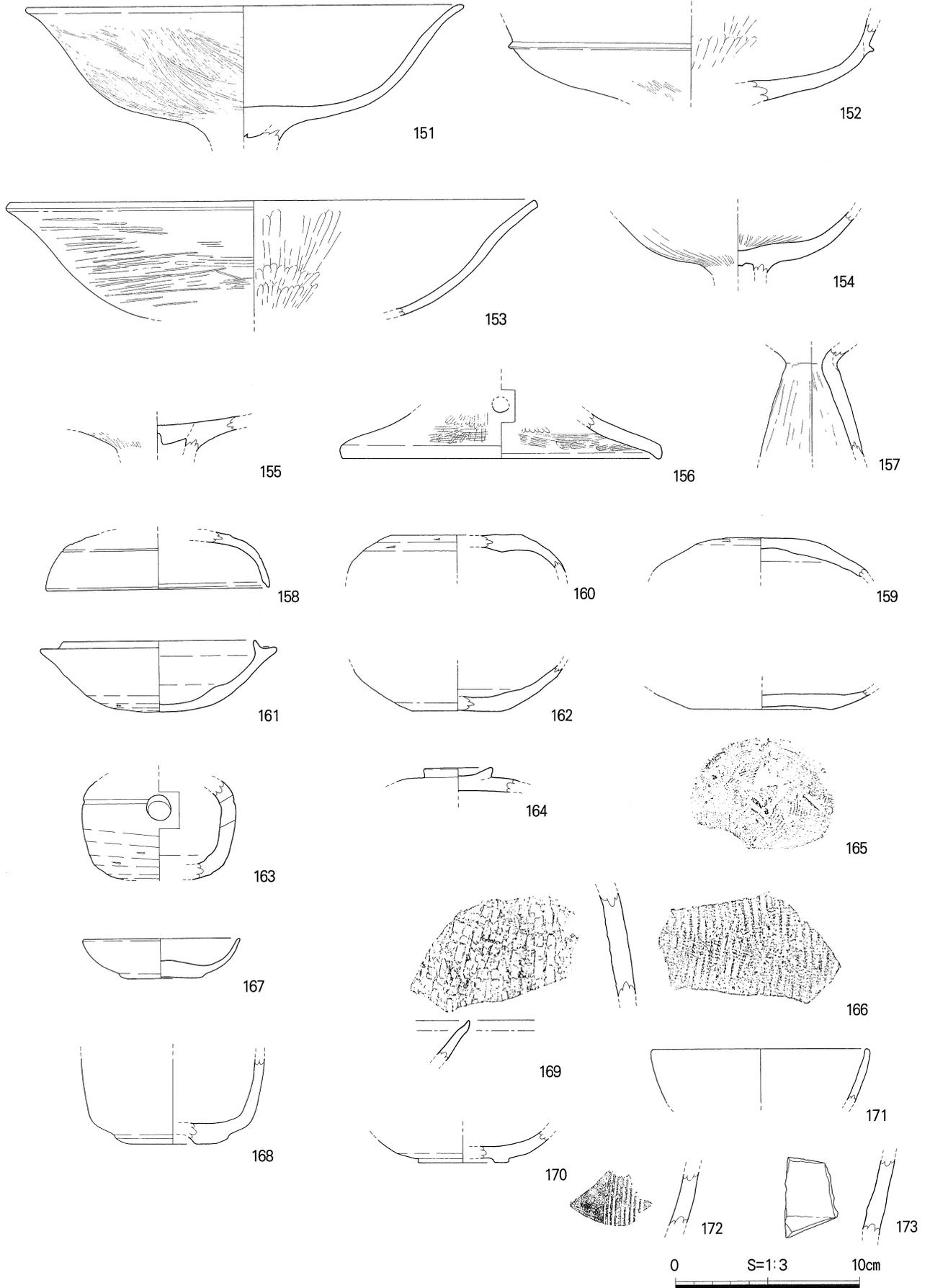
第53図 暗褐色砂質土出土遺物実測図(1)



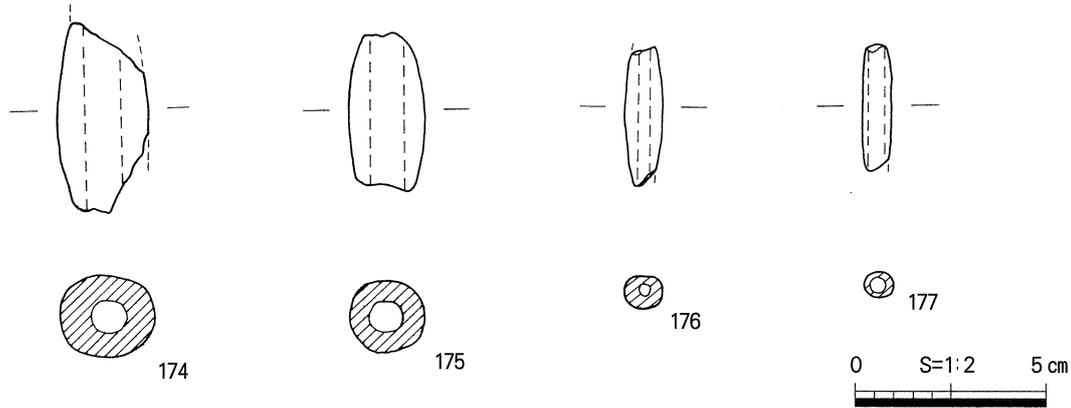
第54図 暗褐色砂質土出土遺物実測図(2)



第55図 暗褐色砂質土出土遺物実測図(3)



第56図 暗褐色砂質土出土遺物実測図(4)



第57図 暗褐色砂質土出土遺物実測図(5)

(3) 第15層・暗褐色砂層 (第60～68図・図版39～45)

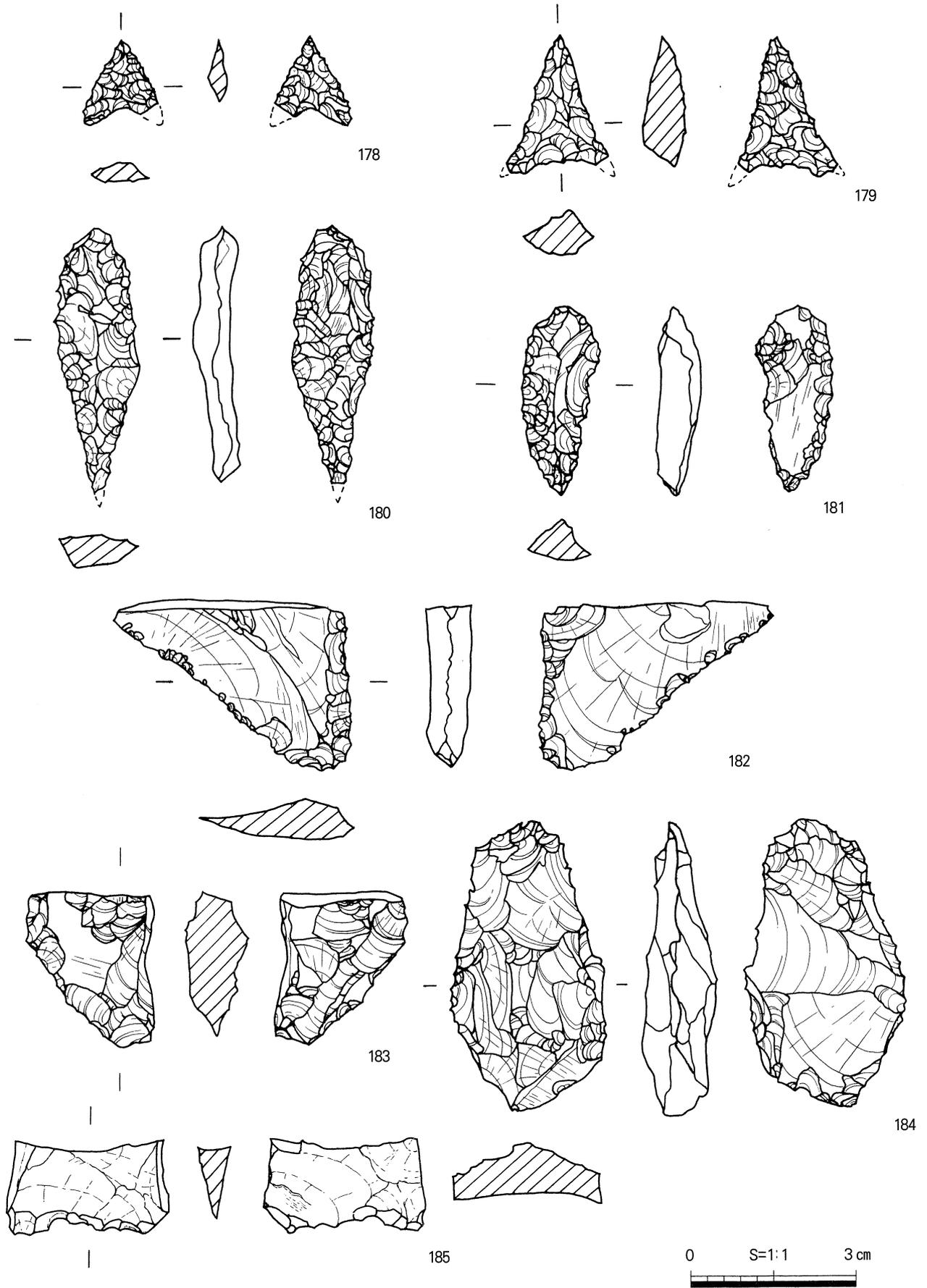
本調査区の中で一番多く遺物を含む土層で、第2遺構の基盤層よりひとつ下の土層である。

縄文土器 (第60図・図版39) 第60図190・191の土器の外には、風化してははっきりとはわからないが、一部に縄文がみられる。192は口縁端部に刻目を施した深鉢である。193～200は突帯文土器である。193～195は口縁端部から下がった位置に刻目突帯がめぐる。196は口縁端部に突帯がつき、刻目が施されている。197～200は突帯に刻目のないものである。調整は内外面ともナデである。201～204は底径5.0～8.8cmを測る底部である。

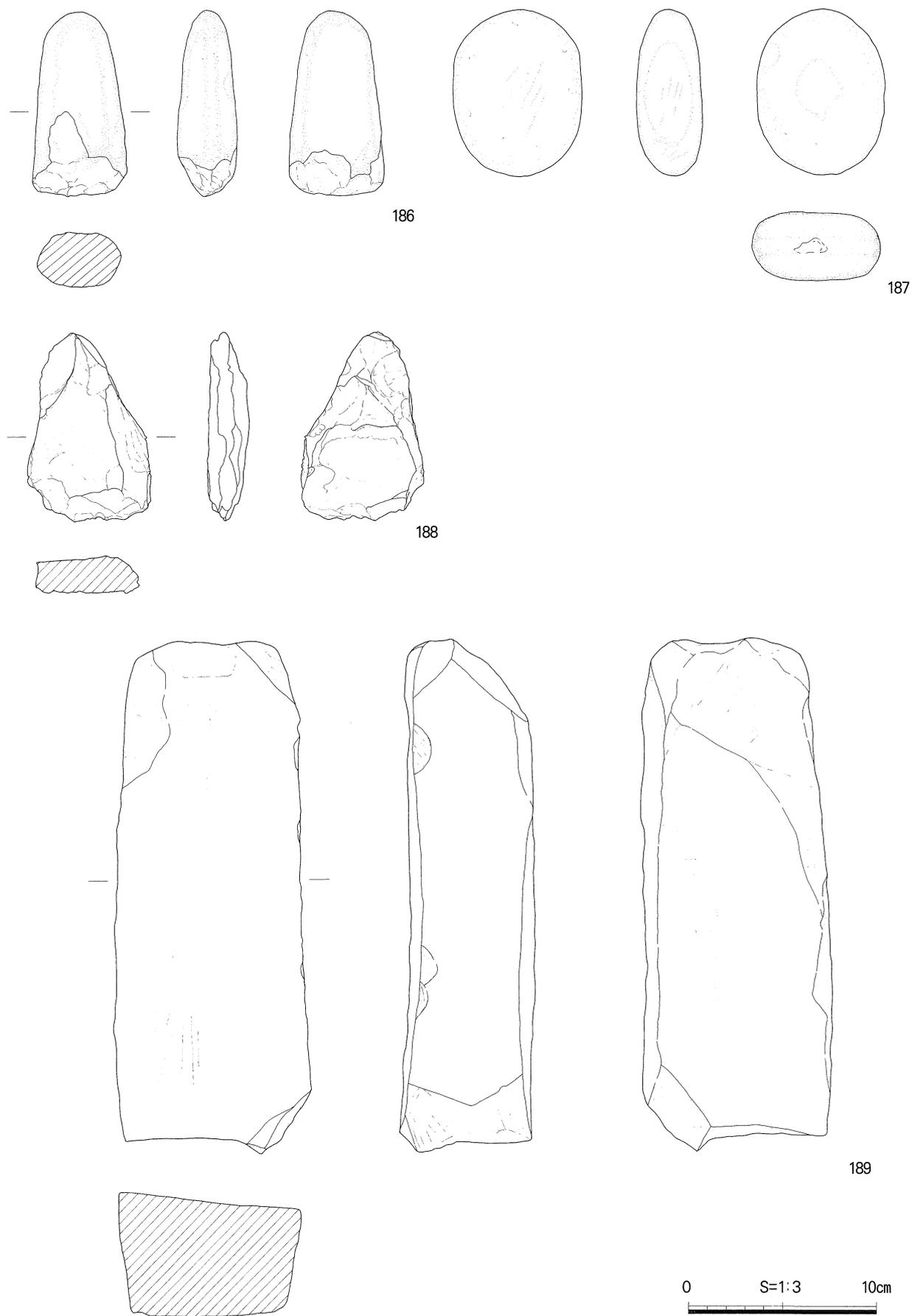
弥生土器 (第61、62図・図版39～41) 第61図205～212は前期の甕である。205～207は口縁部が「く」の字状を呈し、口唇部に刻目を施す。208・210は口縁直下に1条ないし2条の櫛描直線文、209は口縁直下にわずかな段が廻る。器面調整は内外面共口縁部ナデ、体部ハケメを施す。211は口径23.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、口縁直下にヘラ描直線文の痕跡がみられるが、風化してははっきりしない。胎土は0.2cm大の砂粒を多く含み、器面調整は内外面共粗いハケメである。212は口径27.0cmを測る。口縁は「く」の字状に外反し、口縁直下に穿孔している。また、口縁直下に1条の沈線、その下に三角形の刺突文を廻らしている。調整は外面ナデ、内面は口縁部ナデ、頸部は指で撫でたような痕がみられる。

第61図、213・214は口縁が大きく開く広口壺と思われる。口縁の拡張部に凹線が施され、中期ものである。215・217・218は口縁端部が上下に拡張したもの、216は上方のみに拡張した甕で、いずれも拡張部に凹線を施し、松本編年V-1様式に相当すると思われる。219は高坏の脚部で、脚端部は肥厚し、側面には凹線文が施される。松本編年IV-2様式と考えられる。220は口径7.0cm、器高4.5cm、底径3.6cmを測る小形の甕である。口縁は短く外反し、底部は平底である。調整は内外面共ナデで、一部黒変している。221は甕か壺の胴部片と思われる。外面に4条の凹線、その間に貝殻(サルボウ貝)による刺突文を施す。後期のものと思われる。

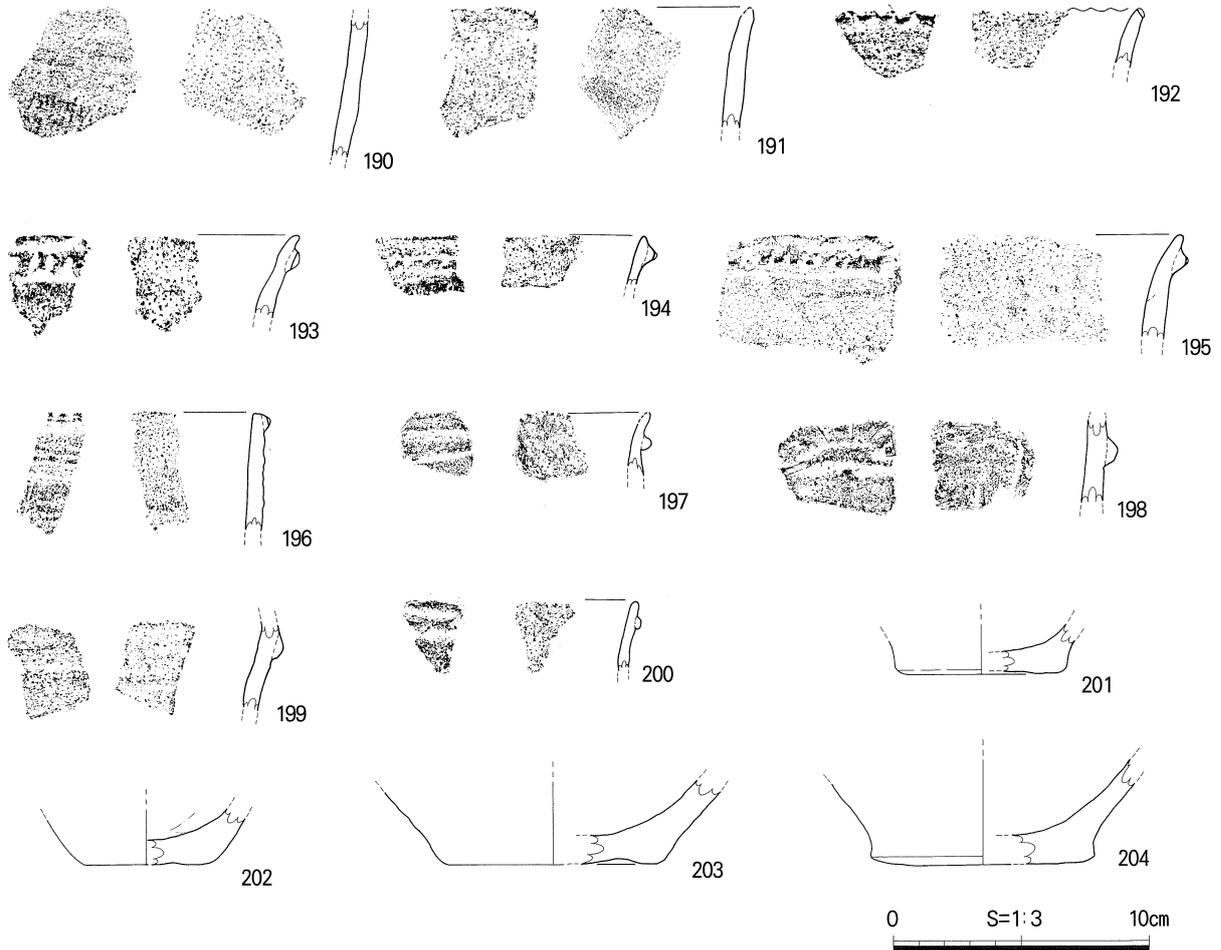
第62図、222～237は弥生土器の底部である。222～229は0.2cm大の砂粒を多く含むもの、230～237は0.1cmほどの砂粒を含むものである。胴部の器面調整は内外面ハケ、ヘラケズリ、ナデ、ヘラミガキを施す。



第58図 暗褐色砂質土出土遺物実測図(6)



第59図 暗褐色砂質土出土遺物実測図(7)



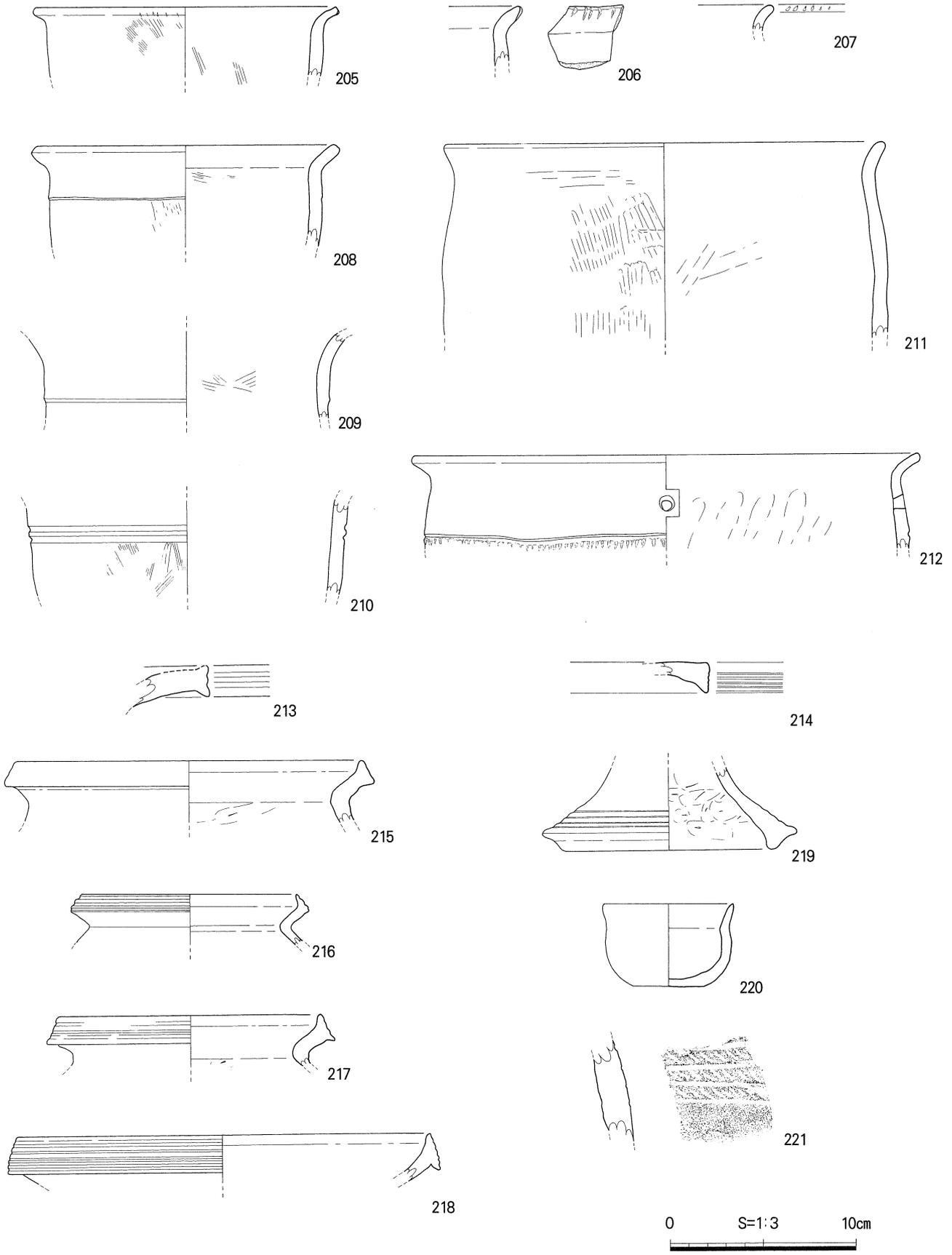
第60図 暗褐色砂層出土遺物実測図(1)

土師器（第63～67図-299・図版41～47） 第63～65図-267は、弥生時代終末期から古墳時代前期の壺、甕であるが、明確に区別することができないため、土師器として記載する。

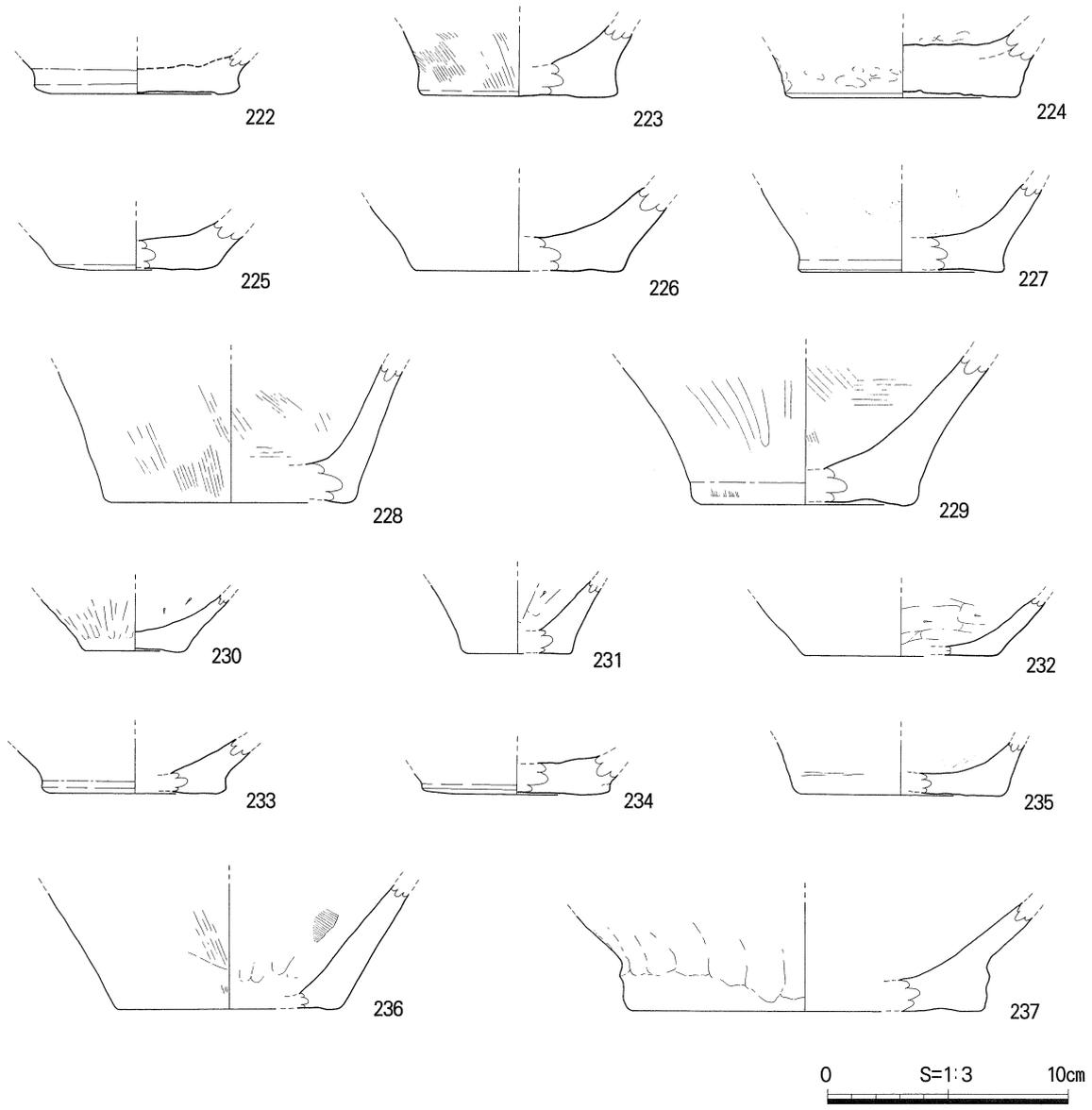
第63図は壺と甕の境界がわかりにくいものもあるが、複合口縁の壺である。238は複合口縁の立ち上がりが厚くて短く、直線的に立ち上がる。239～249の器壁は厚く、口縁部がやや開くもの、大き開くものがある。口縁端部は平坦面を持つものが多いが、端部をやや外方に折り曲げたものもみられる。口縁部の調整は内外面共ナデ、頸部内外面はハケ後ナデをおこなう。240の頸部には羽状文が施文されている。

第64、65図は甕で、250～266は複合口縁の甕である。255は口径13.8cm、頸部径11.6cmを測る。器壁は薄く、口縁端部をわずかに外側に折り曲げている。256は完形品で、口径15.8cm、頸部径11.9cm、器高24.0cmを測る。胴部の器壁は薄く、外形は卵倒形を呈し丸底である。257は口径25.0cm、頸部径21.7cmを測り、胴部は頸部から大きく張り出している。胴部内面はナデ、外面は横方向のハケメを施し、肩部に波状文を施す。258は、器壁はやや厚手であるが、口縁部を引き出し、端部を丸くおさめたもので、この中では古いタイプと思われる。265・266も胴部が大きく張り出す甕である。第65図、267は単純口縁の布留甕である。268・269は複合口縁の退化した甕、270は単純口縁の甕で古墳時代中期頃のものと思われる。

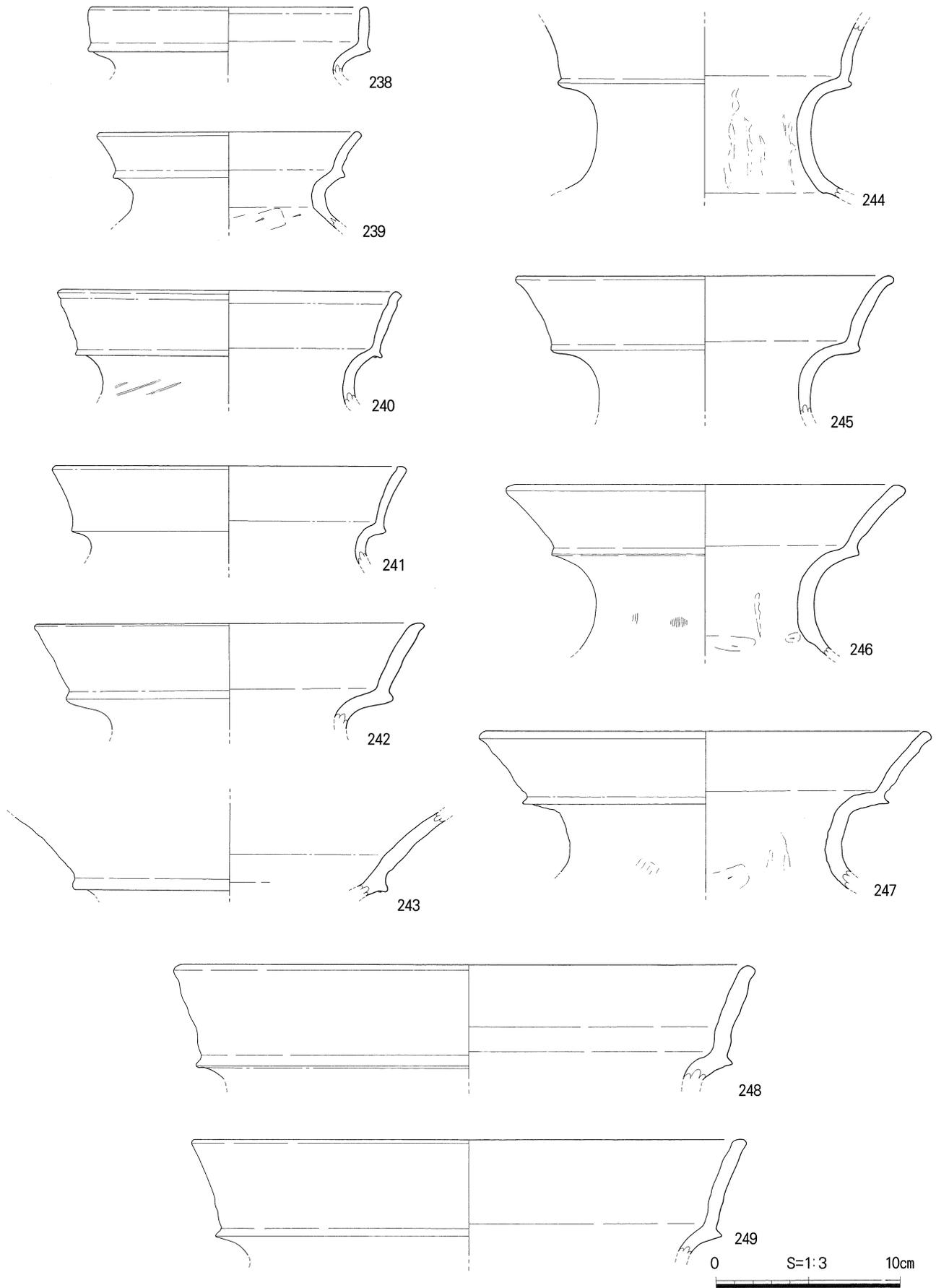
第66図の271は複合口縁の直口壺で、調整は口縁部内外面共ナデ、内面の頸部以下はヘラケズリで



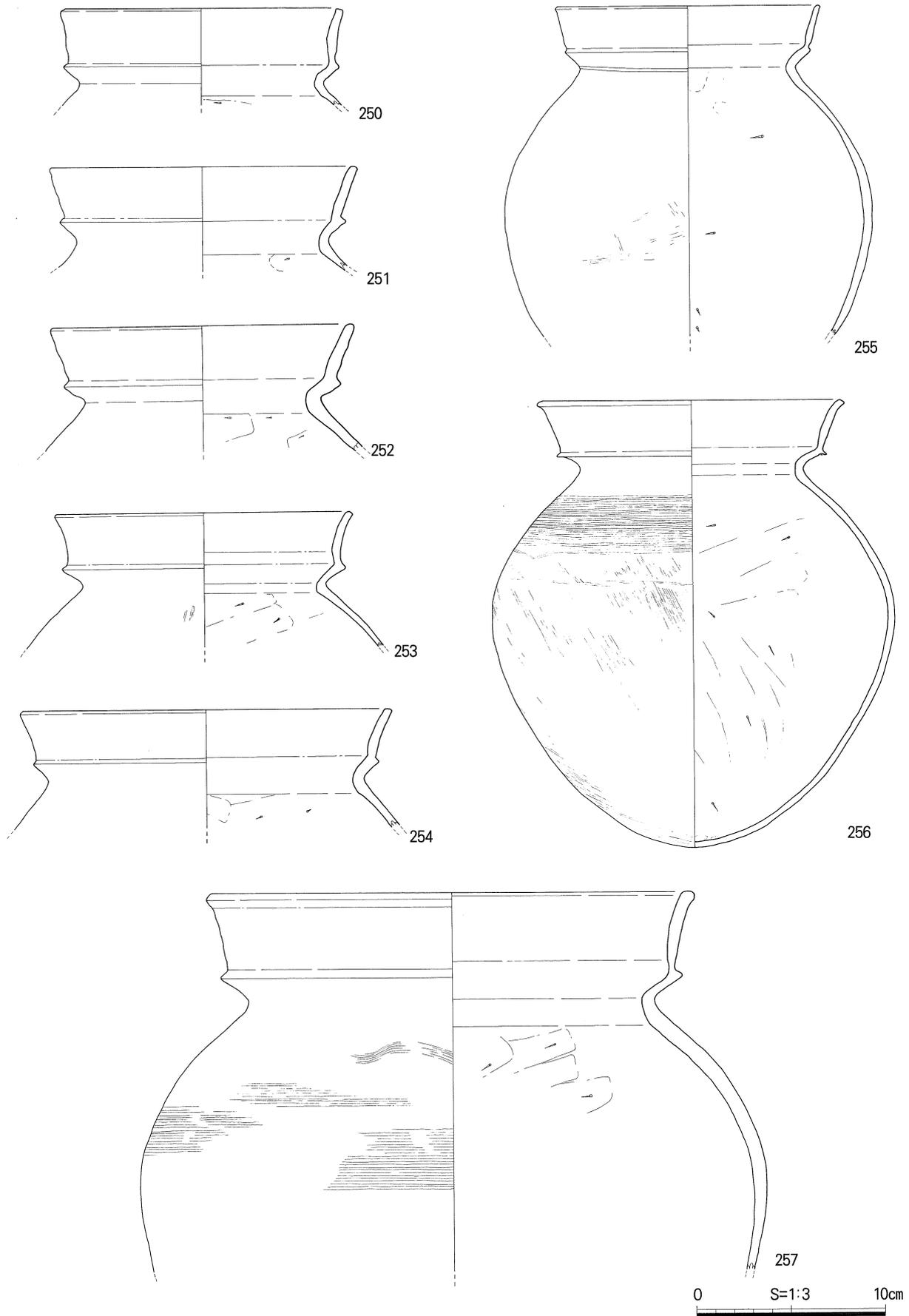
第61図 暗褐色砂層出土遺物実測図(2)



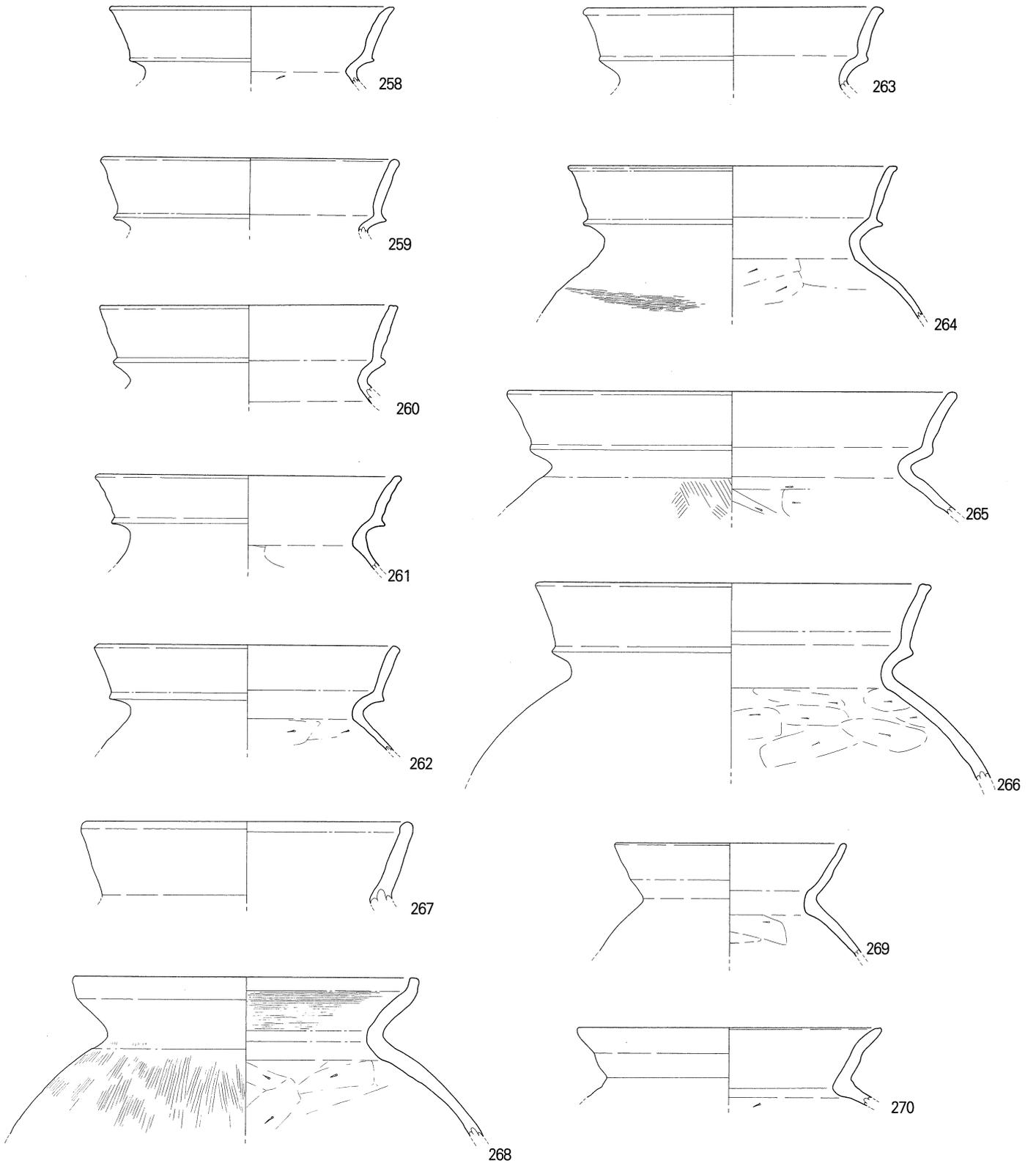
第62図 暗褐色砂層出土遺物実測図(3)



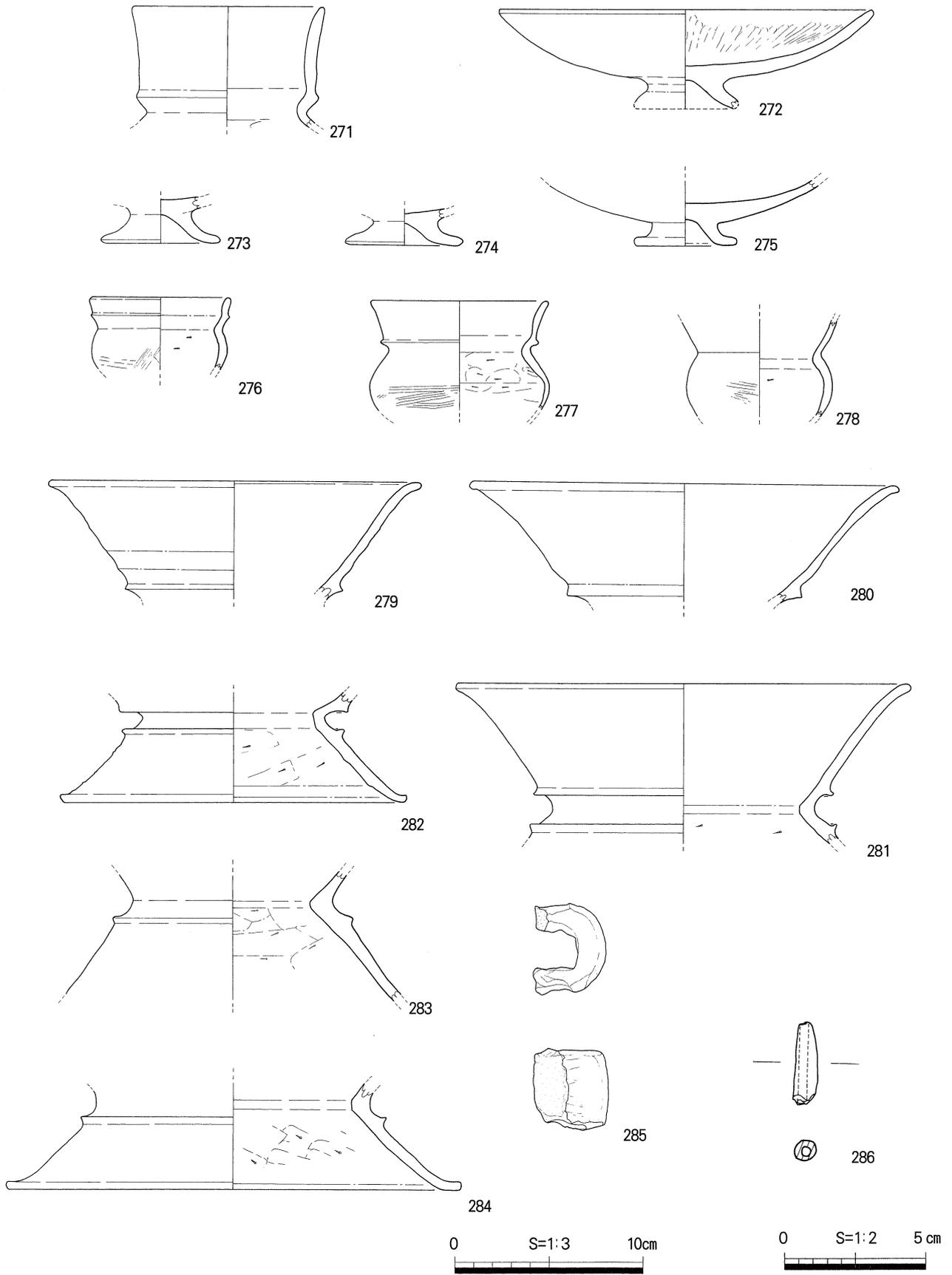
第63図 暗褐色砂層出土遺物実測図(4)



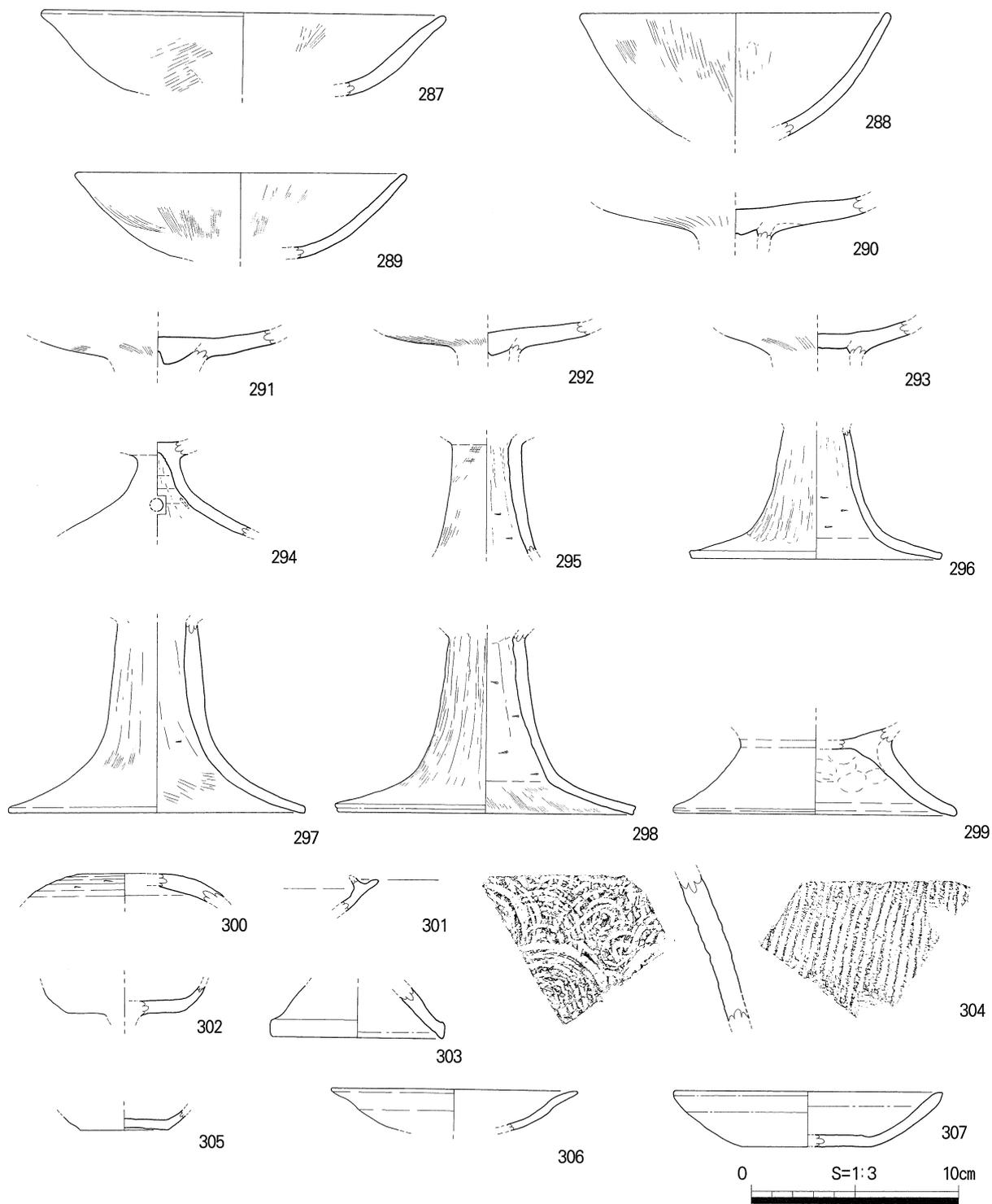
第64図 暗褐色砂層出土遺物実測図(5)



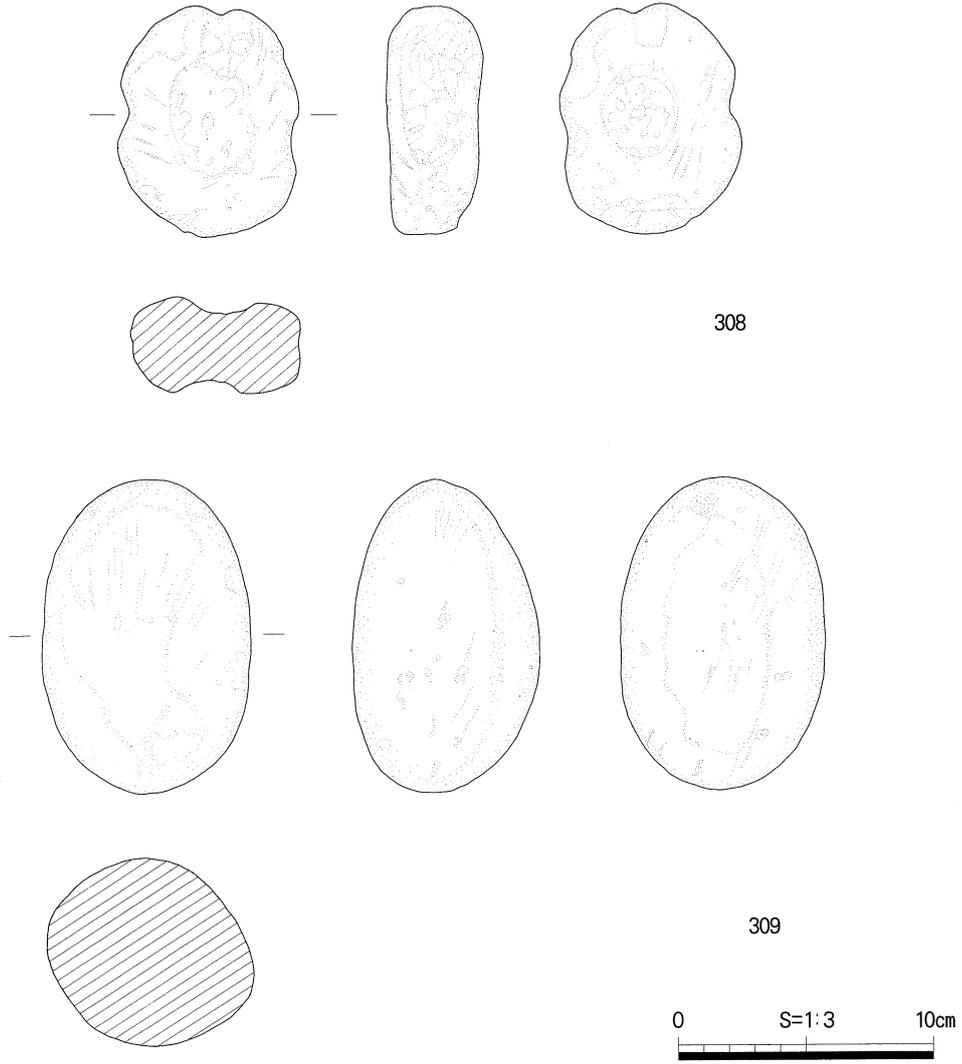
第65図 暗褐色砂層出土遺物実測図(6)



第66図 暗褐色砂層出土遺物実測図(7)



第67図 暗褐色砂層出土遺物実測図(8)



第68図 暗褐色砂層出土遺物実測図(9)

ある。

第66図272～275は低脚坏である。272は緩やかなカーブで立ち上がる坏部をもち、坏部内面を磨いている。口径19.6cm、器高5.3cmを測る。275も同様の低脚坏である。

276～278は小形丸底壺である。276は複合口縁の丸底壺で、口径7.4cm、残存高4.1cmの小さなものである。277も複合口縁の丸底壺で、胴部は偏球形を呈する。278は口縁が「ハ」の字状に開く丸底壺である。調整は口縁がナデ、体部外面ハケメ、内面ヘラケズリである。

279～284は鼓形器台である。器受部と脚台部間が縮約したものである。

285は甑の把手、286は土錘である。

第67図の287～298は高坏である。287は緩やかなカーブを経て立ち上がる坏部、288は内湾して立ち上がり深い坏部、289はやや内湾して立ち上がる坏部をもつ。外面はハケメやナデ、内面はハケメやヘラケズリが施される。290～293は脚部と坏部の接続部で、円盤充填に5mm程度の深さの刺突痕をもつ。294～298は脚部である。294は「ハ」の字状に開いた脚に穿孔している。296は底径11.8cm、残存高6.3cm、297は底径14.0cm、残存高9.4cm、298は底径14.2cm、残存高8.7cmを測る。裾部は内外面共ナデ、筒部外面はハケ後ヘラミガキ、内面はケズリを施す。

第67図、299は台付の鉢か甕の脚部と思われる。底径13.5cm、残存高4.3cmで外面ナデ、内面ヘラケズリを施す。

須恵器（第67図300～304・図版47） 第67図の300は坏蓋、301は坏身である。302は高坏の坏部、303は脚部である。302は高坏の坏部である。

土師質土器（第67図305～307・図版47） 第67図の305は底部でかすかに回転糸切り痕がみられる。306は口径12.0cmを測る皿で、底部から口縁にかけてやや内湾して立ち上がり、口縁部は外反している。307は口径13.0cm、底径6.2cmを測る皿で、厚みがある。

石製品（第68図・図版47） 第68図の308は凹石を石錘に転用したもので、全長9.2cm、厚さ3.7cm、重さ270.0gを測る。石の両面は窪み、石の側面4箇所には紐をかけるような凹みがある。309は磨石と思われる。全長12.6cm、厚さ7.4cm、重さ940gを測り、使用痕はあまりみられない。

(4) 第18層・オリブ色砂層（第69図・図版48上）

縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。土師器は細片で図面化できなかったが、他の図面化できたものを掲載した。

第69図、310は縄文土器である。外面の一部に縄文がみられる。311は弥生前期の甕の胴部片と思われる。口縁から下がったところに段があり、その下にハケメを施す。312は弥生土器の底部で、底径7.8cmを測る。底部内面はやや窪み、内外面にハケ調整を施している。313は須恵器の坏蓋である。口縁端部に沈線などはなく、丸くおさめている。古墳時代後期以降のものである。

(5) 第19層・黄褐色砂礫層（第70図・図版48上）

縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。縄文土器、弥生土器は図面化できなかったため、掲載していない。

第70図、314は鼓形器台の脚台部である。底径18.6cmを測る。内面はヘラケズリ、外面はナデ、脚

端部は内外面共ナデを施す。315は坏身である。立ち上がりが低く、古墳時代後期のものと思われる。316は甕片である。大きな甕と思われるが器壁は薄い。

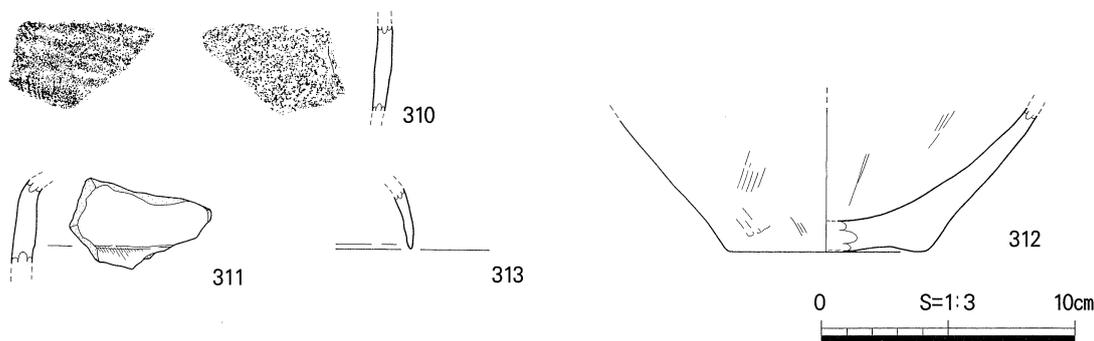
(6) 第21層～第22層・黄灰色砂礫層～淡黄褐色砂質土 (第71図・図版48下)

縄文土器、弥生土器、土師器、石製品が出土した。縄文土器が多く、弥生土器、土師器は少ないうえ細片であった。図面化できたものを記載した。

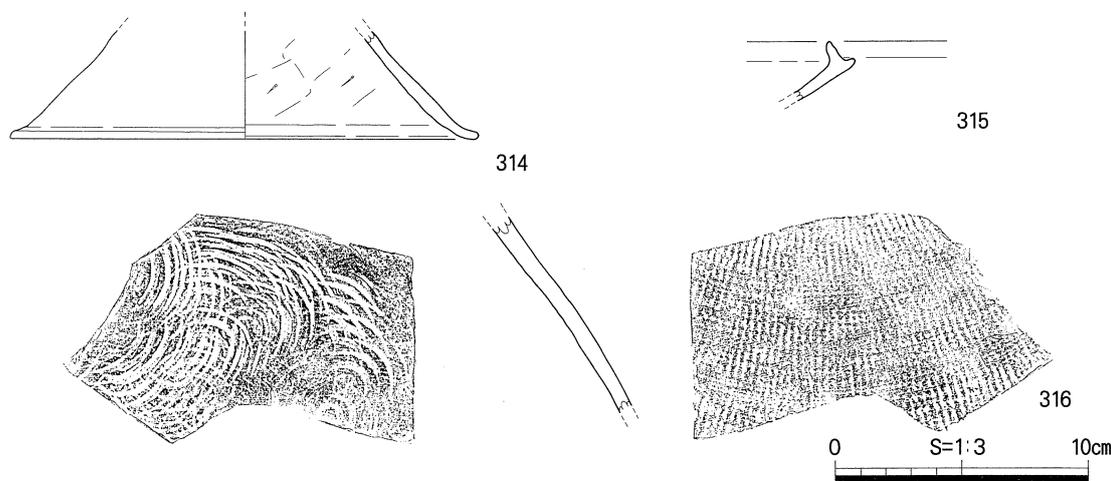
第71図の317～323は縄文土器の深鉢と思われる。口縁端部は、317は先細りで丸く、318は平坦である。器面調整はほとんどが内外面共ナデであるが、319の外面には一部縄文、321の内面には条痕が施される。323は平底の底部である。

324は土師器の脚部である。脚端部は先細りで「ハ」の字状にひらき、内面にヘラケズリを施す。

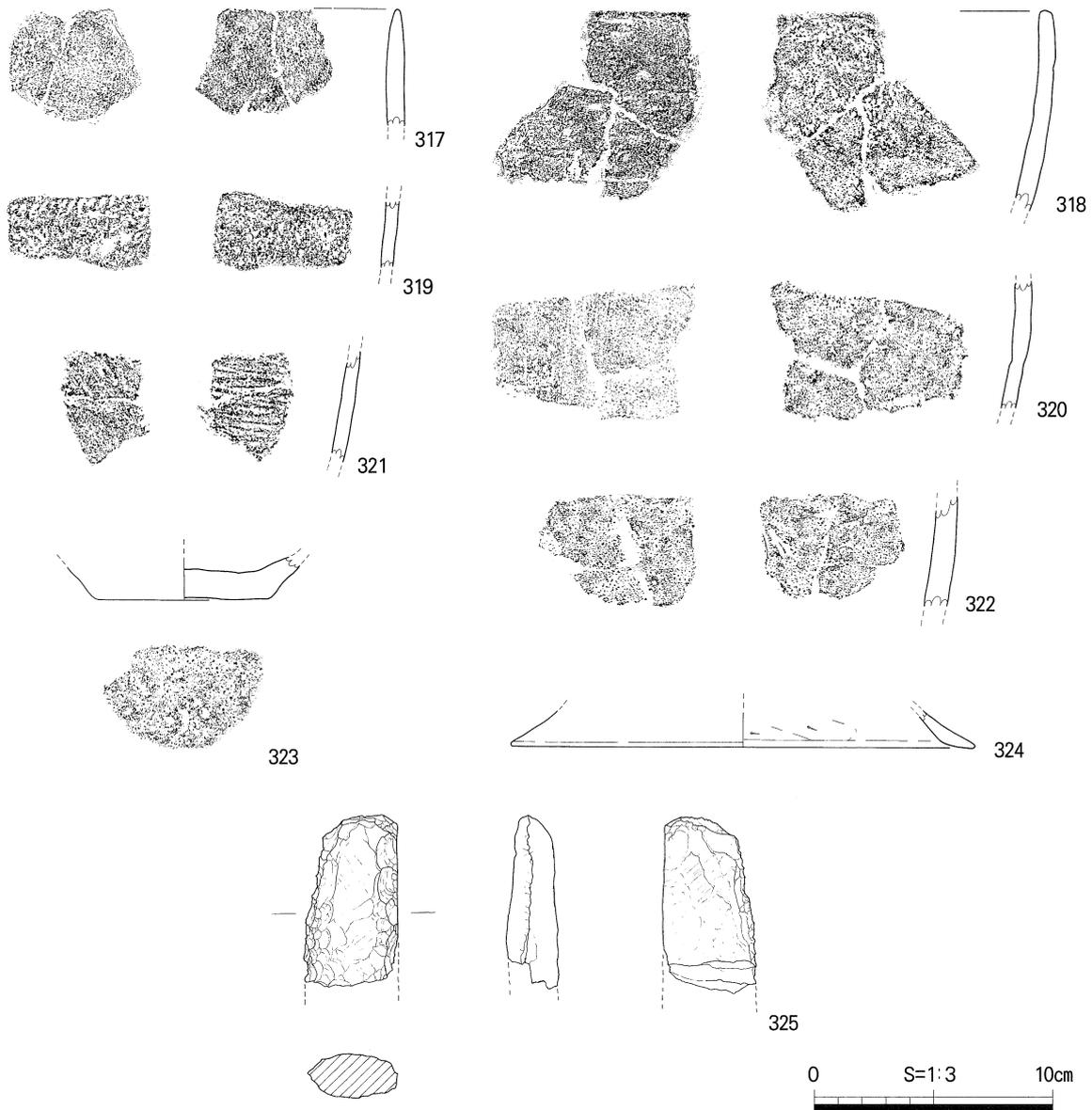
325は打製石斧である。残存長7.0cm、最大幅4.0cm、最大厚2.1cm、重さ77.18gを測る。片端の平坦面は丁寧に磨いている。片面は丁寧に、もう一方の面はやや雑に加工し、自然面を残しているところもある。



第69図 オリーブ色砂層出土遺物実測図



第70図 黄褐色砂礫層出土遺物実測図

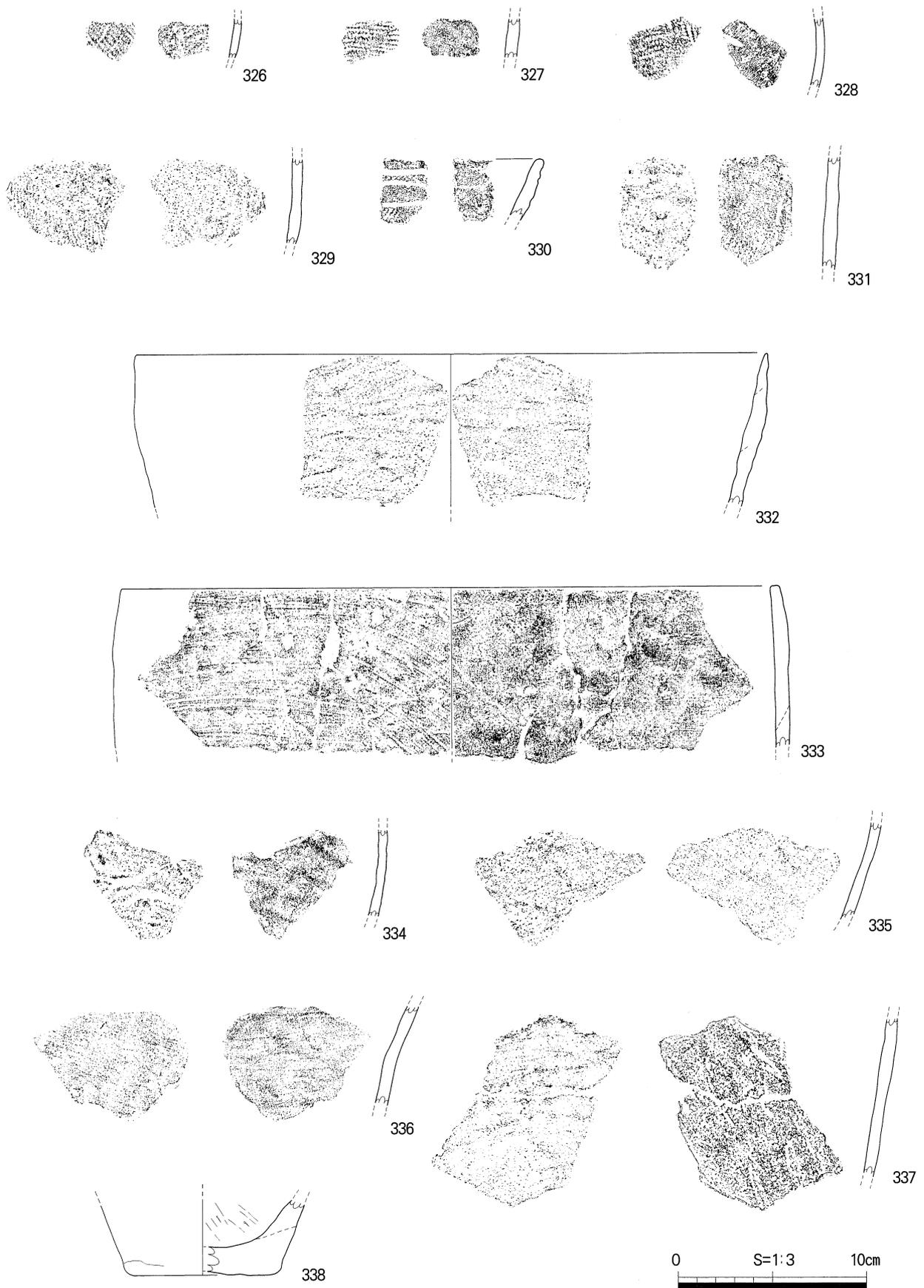


第71図 黄灰色砂礫層～淡黄褐色砂質土出土遺物実測図

(7) 第24層・青灰色砂礫層 (第72図・図版49)

縄文土器のみが出土した土層である。土器は土層中から出土したものもあるが、岩盤上の窪んだところから出土したものも多かった。これらの土器は後期中葉から晩期のものである。

第72図、326～328は縄文土器で外面縄文、内面ナデの土器片である。329の外面にも縄文が見られるが、風化してははっきりしない。330は磨消縄文の浅鉢の口縁である。331～337は粗製の深鉢である。332は口径33.6cmを測る深鉢で、口縁端部は先細りしている。内外面共ナデである。333は口径35.0cmを測る。口縁は平縁で外面にナデ、内面にミガキを施している。334～337は深鉢の破片で、器面調整はナデやミガキである。338は底部で底径8.4cmを測る。



第72図 青灰色砂礫層出土遺物実測図

6. まとめ

今回の寺ノ脇調査では、縄文時代から近世まで時期幅のある遺物が出土し、遺構面は確認できるだけで3面検出している。ここでは遺構面の時期と性格、遺物について若干触れてまとめとしたい。

第1遺構面は近・現代の遺構面であることから、本文中でも割愛したため本項においても省略する。

第2遺構面は調査区全体で検出している。北側から南側にかけて緩やかに傾斜した遺構面で、ピットや土坑を検出した。ピットは浅くて小さいものが多く、柱の並びがしっかりしたものはなかった。浅いピットが多いことから、後世に一度造成が行われ、削平されたと考えられた。また、遺構面から検出した杭は、天端が直上の第7層に突き出ているものがあり、上の遺構面からの新しい時期の遺構が混在している可能性がある。第2遺構面の基盤層となる第11、15層からは戦国時代から近世の陶磁器が出土し、遺構内からも17世紀の肥前系陶器や志野焼の破片などが出土しており、近世以降の遺構面と考えられた。

美保関町誌や郷土史ふるさと本庄によれば、中海は藩政時代から出雲における北前船などの航路であり、本庄や美保関は船の風待港（避難港）であったらしい。本調査区も同じ中海沿岸にあり、本庄や美保関程度の港とはいかないまでも、小規模な風待港で周辺に船宿や船問屋があったのかもしれない。

第3遺構面は、Ⅱ区側しか検出できなかった。第3遺構面の基盤層は第21～24層で、古いものでは縄文時代後期中葉の磨消縄文の土器、新しいものでは土師器の高坏の脚部が出土している。遺構内からは縄文時代から古墳時代後期の須恵器までが出土し、直上の第18、19層からも同時期の須恵器が出土していることから、古墳時代後期以降の遺構面と考えられた。

次に、遺構面の性格について考えてみたい。検出した遺構はピット及び杭である。建物跡としての柱の並びは確認できず、杭についても先端を尖らせた皮付きのものが多く、規則的に並べられているものではなかった。また、この面の基盤層は、水際に堆積した海浜礫を多く含む土層であることから考えると、おそらく船着場か船小屋のような簡易な施設の跡なのかもしれない。

最後に出土遺物について若干述べてみたい。寺ノ脇遺跡は、縄文時代の遺跡として知られており、今回の調査においても、縄文土器が各土層から出土した。縄文時代後期中葉から晩期の土器が出土し、なかでも晩期の突帯文土器が多かった。いずれも深鉢で、口縁端部と突帯に刻目をもつもの、突帯のみに刻目をもつもの、突帯のみで刻目のないものである。次に多かったのは粗製の深鉢で、特に岩盤上第21、22、24層から多く出土している。口縁端部を平坦にしたもの、薄くのばして丸くおさめたものがみられた。浅鉢は2点だけで、晩期の頸胴部が明瞭に屈曲したものと、後期中葉の磨消縄文のものだけである。土器の他に、打製石斧や石皿など縄文時代と思われる石製品も出土している。

弥生土器は、弥生時代前期から後期まで出土しているが、中期の土器は少なかった。前期から中期初頭の口縁部を「く」の字状にして口縁部直下にヘラ描き直線文を施した甕や、口縁端部を拡張し凹線や擬凹線を施した後期の甕が多かった。

土師器は、出土遺物中で最も多く出土している。全出土遺物の6割を占め、そのなかでも古墳時代前期の複合口縁の壺、甕類が多かった。器種も壺・甕類、器台、小形丸底壺、高坏、甌の把手など多

種にわたって出土している。また、布留系の甕など他地方からの搬入品も出土し、他地方との交流も窺われた。

須恵器は、蓋坏や高坏、底部回転系切りの坏など古墳時代後期から奈良時代（8世紀中頃以降）のものが出土している。

昭和43年12月から44年1月におこなわれた寺ノ脇遺跡発掘調査において、縄文時代のドングリの貯蔵穴が検出され、当初は縄文時代の遺跡として調査に取り掛かったが、縄文時代の遺構は検出されなかった。昭和43年から44年の調査では、今回の調査区から北東側の90mの調査区から縄文時代中期と思われる撚糸文土器や縄文地土器が出土しているが、後期から晩期の土器は極めて微量であったと記されている。今回の調査において出土した縄文時代の土器は、後期中葉から晩期のものが多く、遺構が発見されていないため、一概には言えないが、出土状況だけから考えると縄文時代中期には本調査区より東側に人々の生活の場所があり、それが晩期になると本調査区側に移動した可能性も考えられた。

幅広い時期の遺物が出土していることから、おそらく本遺跡周辺は生活に適した場所であったと推測され、付近に幅広い時期の遺構が眠っていると考えられる。

註

1) 中村唯史氏の御教示による。

参考文献

- 松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』木耳社
- 赤沢秀則1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会
- 松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討」『島根考古学会誌 第8集』島根考古学会
- 松山智弘2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌 第17集』島根考古学会
- 濱田竜彦2005「山陰地方における縄文時代晩期土器について—鳥取県、島根県東部を中心に—」『縄文時代晩期の山陰地方 発表資料集』中四国縄文研究会
- 下江健太2005「山陰地方における突帯文土器の様相」『縄文時代晩期の山陰地方 発表資料集』中四国縄文研究会
- 大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会
- 山本清 1967「美保関町サルガ鼻・権現山洞窟住居跡について」『島根県文化財調査報告書 第3集』島根県教育委員会
- 島根県教育委員会『板屋Ⅲ遺跡』1998
- 島根県松江土木事務所『寺ノ脇遺跡 県道松江一境線改良工事埋蔵文化財緊急調査報告』1969
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団『夫手遺跡発掘調査報告書』2000
- 森山公民館『もりやま—創刊号』1986
- 島根県美保関町「第1章 原始・古代の美保関」『美保関町誌 上巻』美保関町誌編さん委員会1986年

寺ノ脇遺跡出土遺物観察表

土器

挿図 番号	出土層位・遺構面	種 類	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態 文様	備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面		
1	第2遺構面 (P59)	縄文土器	深鉢	—	—	4.2	黄橙色	橙色	ナデ	条痕		
2	第2遺構面 (P60)	縄文土器	深鉢	—	—	2.1	黄橙色	黄褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
3	第2遺構面 (SK01)	弥生土器	甕	15.4	—	4.0	淡茶色	淡茶色	口：ナデ 胴：ケズリ	ナデ	口縁部：凹線	風化
4	第2遺構面 (P09)	弥生土器	小形器台	10.0	—	2.0	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ		
5	第2遺構面 (P82)	弥生土器	底部	—	8.2	3.0	灰橙色	黄橙色	ハケメ	風化 調整不明		1mm以下の 砂粒多い
6	第2遺構面 (P60)	弥生土器	底部	—	4.8	3.0	橙色	橙色	工具による縦方向 のケズリ	ハケメ	底部中央に円孔	2mm以下の 砂粒多い
7	第2遺構面 (P29)	土師器	鼓形器台	—	10 (筒部径)	4.6	橙色	赤橙色	ケズリ	ナデ		
8	第2遺構面 (P09)	土師器	鼓形器台	—	—	3.6	明茶褐色	明茶褐色	ケズリ	ナデ		
9	第2遺構面 (P83)	土師器	鼓形器台	—	7.2 (筒部径)	5.2	淡橙色	淡橙色	風化 調整不明	ナデ		
10	第2遺構面 (P08)	土師器	壺	19.4	15.4	5.6	淡茶褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ		
11	第2遺構面 (P59)	土師器	甕	18.1	—	3.5	灰褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
12	第2遺構面 (P09)	土師器	甕	—	—	4.0	淡灰褐色	淡灰色	ナデ	ナデ	口縁端部に浅い 凹線	
13	第2遺構面 (P09)	土師器	高坏	21.9	—	3.4	灰茶褐色	灰茶褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		
15	第2遺構面 (P92)	須恵器	坏蓋	—	—	1.5	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ		
16	第2遺構面 (P48)	須恵器	坏蓋	10.8	—	1.7	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
17	第2遺構面 (P03)	須恵器	坏蓋	12.5	—	2.7	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	風化 調整不明		
18	第2遺構面 (P60)	須恵器	坏	—	7.6	2.3	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ		
19	第2遺構面 (P61)	須恵器	坏	12.0	7.9	4.5	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	底部：回転系切 り痕	
20	第2遺構面 (P61)	須恵器	坏	11.8	7.3	3.7	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	底部：回転系切 り痕	
21	第2遺構面 (P63)	土師器	坏	—	5.0	1.3	褐色	桃褐色	ナデ	ナデ	底部にかすかな 回転系切り痕	
22	第2遺構面 (SK01)	陶器	皿	11.4	—	3.0	深緑色	深緑色	施釉	施釉		肥前系
23	第2遺構面 (SK04)	陶器	碗	22.6	—	5.5	暗茶褐色	暗茶褐色	施釉	施釉		瀬戸美濃の 天目茶碗
26	第3遺構面 (P10)	縄文土器	深鉢	—	—	2.3	にぶい黄橙 色	橙色	ナデ	ナデ	突帯と口縁端部 に刻目	
27	第3遺構面 (P10)	縄文土器	深鉢	—	—	2.6	明黄褐色	橙色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
28	第3遺構面 (P27)	弥生土器	甕	16.0	12.8	2.7	橙色	橙色	ナデ	ナデ	口縁部：2条の 凹線	
29	第3遺構面 (P17)	弥生土器	底部	—	7.4	2.5	灰白色	にぶい橙色	ハケメ	ナデ		風化
30	第3遺構面 (P17)	弥生土器	底部	—	4.8	5.6	灰白色	にぶい黄橙色	ハケメ	ヘラミガキ		
31	第3遺構面 (P03)	土師器	脚部	—	18.0	1.3	浅黄褐色	浅黄褐色	ヘラケズリ、ナデ	ナデ		
32	第3遺構面 (P07)	須恵器	坏蓋	14.8	—	3.8	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	肩部に稜 口縁端部内面ゆるい段状	
33	第3遺構面 (P23)	須恵器	高坏	—	8.4	2.7	青灰色	青灰色	回転ナデ	回転ナデ		
36	第3遺構面 (SD01)	縄文土器	鉢	—	—	2.6	灰黄褐色	にぶい褐色	ミガキ	ナデ	口縁部内面に1 条の沈線	
37	第3遺構面 (SD01)	縄文土器	深鉢	—	—	3.7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ		
38	第3遺構面 (SD01)	弥生土器	底部	—	10.4	2.3	にぶい褐色	にぶい橙色	風化 調整不明	風化 調整不明		
39	第3遺構面 (SD01)	弥生土器	底部	—	4.7	2.3	浅黄褐色	浅黄褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		
40	第3遺構面 (SD01)	弥生土器	底部	—	—	5.0	褐灰色	灰黄褐色	ナデ	ハケメ		
41	第3遺構面 (SD01)	土師器	甕	12.6	—	3.8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ		

挿図 番号	出土層位・遺構面	種 類	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態 文様	備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面		
42	暗茶褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	3.6	淡茶色	明茶褐色	ナデ	ナデ		
43	暗茶褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	4.3	茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ	突帯と口縁端部に刻目	
44	暗茶褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	2.5	明赤褐色	淡茶色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
45	暗茶褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	3.8	浅黄褐色	浅黄褐色	条痕	ナデ		
46	暗茶褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	4.6	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	条痕		
47	暗茶褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	4.3	浅黄褐色	浅黄褐色	口：風化 胴：ハケメ	風化 調整不明	口縁端部：刻目 口縁直下：1条のヘラ描直線文	
48	暗茶褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	3.5	淡褐色	褐色	ナデ	ナデ	口縁直下：7条のヘラ描直線文	
49	暗茶褐色砂質土	弥生土器	甕	19.4	16.0	4.1	淡茶色	淡茶色	口：ナデ 胴：ヘラケズリ	口：ナデ 胴：ハケ後ナデ	口縁部：5条の凹線	
50	暗茶褐色砂質土	弥生土器	底部	—	5.8	2.2	灰褐色	茶褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		
51	暗茶褐色砂質土	弥生土器	底部	—	8.6	2.4	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ		
52	暗茶褐色砂質土	弥生土器	底部	—	9.8	5.4	赤茶褐色	赤茶褐色	指頭圧痕、ナデ	ハケメ		
53	暗茶褐色砂質土	弥生土器	甕	17.0	—	3.6	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
54	暗茶褐色砂質土	土師器	甕	14.0	—	3.2	褐色	褐色	ナデ	ナデ		布留系
55	暗茶褐色砂質土	土師器	甕	17.0	—	3.3	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
56	暗茶褐色砂質土	土師器	甕	14.2	10.0	5.6	明茶褐色	明茶褐色	口：ナデ 胴：ヘラケズリ	ナデ		
57	暗茶褐色砂質土	土師器	甕	—	—	5.3	橙褐色	橙褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		
58	暗茶褐色砂質土	土師器	甕	18.4	15.6	4.0	褐色	褐色	ナデ	口：ナデ 胴：ヘラケズリ		
59	暗茶褐色砂質土	土師器	脚部	—	10.4	7.0	明茶褐色	明茶褐色	脚部上半：ヘラケズリ 脚部下半：ナデ	ヘラミガキ	直径0.9cmの透かし有り	
60	暗茶褐色砂質土	土師器	甕、把手	全長7.8	最大径3.7			淡茶褐色				
61	暗茶褐色砂質土	土師器	甕、把手	全長9.7	最大径3.7			淡茶褐色				
62	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏蓋	12.2	—	3.0	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	肩部：2条の沈線による突帯	
63	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏蓋	13.4	—	4.5	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	肩部：1条に沈線	
64	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏蓋	12.4	—	4.4	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	肩部：2条に沈線	
65	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏身	11.2	—	3.7	灰色	灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ		
66	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏身	11.3	—	4.0	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	底部：回転ヘラ切り	
67	暗茶褐色砂質土	須恵器	蓋	9.8	—	4.0	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ		
68	暗茶褐色砂質土	須恵器	蓋	10.6	—	3.7	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ		
69	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏身	8.6	—	3.3	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	回転ナデ、静止ナデ		
70	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏身	9.6	—	2.5	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
71	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏蓋	7.2	—	2.8	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	天：回転ヘラケズリ 後ナデ 口：回転ナデ	乳頭つまみ	
72	暗茶褐色砂質土	須恵器	坏蓋	8.0	—	2.3	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	天：風化 口：回転ナデ		
73	暗茶褐色砂質土	須恵器	長頸壺	10.4	—	5.7	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ		
74	暗茶褐色砂質土	須恵器	高坏	—	4.7	4.0	灰色	灰色	回転ナデ、静止ナデ	回転ナデ	2方に透かし、1方切れ目	
75	暗茶褐色砂質土	須恵器	高坏	17.0	—	3.5	灰色	灰色	回転ナデ	上半：回転ナデ 下半：ヘラケズリ後ナデ		
76	暗茶褐色砂質土	須恵器	直口壺	8.3	8.4	8.0	淡灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ	体部上半と下半に2条の沈線	
77	暗茶褐色砂質土	須恵器	底部	—	7.3	2.6	淡灰色	明淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	底部 回転糸切り痕	
78	暗茶褐色砂質土	土師質土器	皿	12.6	—	2.1	黄褐色	暗褐色	ナデ	ナデ		
79	暗茶褐色砂質土	土師質土器	皿	12.0	—	2.5	灰褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
80	暗茶褐色砂質土	土師質土器	火入れ道具	30.6	30.8	7.0	淡褐色	淡褐色	頸部：ハケメ 口、体：ナデ	口：ナデ 口～体：ハケメ		
81	暗茶褐色砂質土	陶器	瀬戸菊皿	12.0	—	1.7	緑黄色	緑黄色	施釉	施釉		
82	暗茶褐色砂質土	陶器	碗	12.4	—	4.2	緑灰色	青灰色	施釉	施釉		陶胎染付

挿図 番号	出土層位・遺構面	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態 文様	備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面		
83	暗茶褐色砂質土	陶器	皿	12.2	4.4	3.9	緑灰色	緑黄色 明褐色	施釉	口：施釉 体～底部：露胎		肥前系
84	暗茶褐色砂質土		碗	長径6.7	短径5.1	厚さ1.1	灰色	灰色			片面に文字が彫 られている	
92	暗褐色砂質土	縄文土器	浅鉢	20.2	—	3.8	褐色	褐色	口：ナデ 体：ミガキ	口：ナデ 体：ミガキ		
93	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	2.6	浅黄褐色	浅黄褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	突帯と口縁端部 に刻目	
94	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	2.6	淡茶褐色	茶褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	突帯に刻目	
95	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	2.7	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
96	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	2.3	赤茶褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
97	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	1.2	橙色	浅黄褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	突帯に刻目	
98	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	3.0	橙色	黄褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
99	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	1.5	黄褐色	橙色	風化 調整不明	風化 調整不明	突帯に刻目	
100	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	2.7	茶褐色	暗茶褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	突帯に刻目	
101	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	2.5	赤茶褐色	赤褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	突帯に刻目	
102	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	3.2	明茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
103	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	4.4	灰黄褐色	にぶい黄橙 色	ナデ	ナデ	突帯に刻目なし	
104	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	3.2	茶褐色	明茶褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	突帯に刻目なし	
105	暗褐色砂質土	縄文土器	深鉢	—	—	3.3	明茶褐色	茶褐色	風化 調整不明	風化 調整不明	突帯に刻目なし	
106	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	16.5	14.8	3.8	にぶい黄橙 色	にぶい黄橙 色	口：ナデ 頸：ハケメ	ハケメ	口縁端部：刻目 口縁直下：1条のヘラ描直線文	
107	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	1.8	淡茶褐色	赤茶褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：刻目	
108	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	1.6	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：刻目	
109	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	1.7	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：刻目	
110	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	16.4	15.3	5.6	にぶい黄橙 色	にぶい黄橙 色	口：ナデ 頸～体：ハケメ	口：ナデ 頸～体：ハケメ		
111	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	2.3	にぶい黄橙 色	にぶい黄橙 色	ハケメ	風化 調整不明		
112	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	5.6	淡茶色	淡茶色	ナデ	ハケメ	9条のヘラ描直線文の下に三 角形の刺突文	
113	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	4.6	淡茶色	淡茶色	ナデ	風化 調整不明	3条のヘラ描直 線文	
114	暗褐色砂質土	弥生土器	不明	—	8.7 (胴部最大径)	5.7	灰褐色	灰褐色	体：指頭圧痕、ナデ 底：指頭圧痕	指頭圧痕、ナデ		内外面一部 黒変
115	暗褐色砂質土	弥生土器	壺	37.4	—	1.9	橙色	橙褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：4条 の凹線	
116	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	15.0	—	1.5	にぶい黄橙 色	橙色	ナデ	ナデ	口縁端部：4条 の凹線	
117	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	2.0	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：3条 の凹線	
118	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	2.3	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：2条 の凹線	
119	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	14.2	11.8	3.1	灰褐色	明赤褐色	風化 調整不明	ナデ	口縁端部：3条 の凹線	
120	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	—	—	3.1	淡褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：4条 の凹線	
121	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	28.0	26.2	6.0	明茶褐色	明茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ	口縁端部：5条 の擬凹線？	
122	暗褐色砂質土	弥生土器	底部	—	9.4	5.8	橙色	橙色	ハケメ	ハケメ		
123	暗褐色砂質土	弥生土器	小形器台	10.8	—	3.3	褐色	灰褐色	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ		
124	暗褐色砂質土	弥生土器	甕	12.4	9.7	4.8	黄褐色	黄褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
125	暗褐色砂質土	土師器	甕	12.6	—	4.1	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ		
126	暗褐色砂質土	土師器	直口壺	—	7.5	5.8	橙色	橙色	口：ナデ、ハケメ、 指頭圧痕 頸：ナデ	風化		
127	暗褐色砂質土	土師器	甕	—	—	6.0	暗褐色	黄褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
128	暗褐色砂質土	土師器	甕	13.2	11.0	5.3	浅黄褐色	浅黄褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
129	暗褐色砂質土	土師器	甕	15.4	11.2	5.0	淡褐色	淡褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
130	暗褐色砂質土	土師器	甕	17.2	14.1	5.2	にぶい黄橙 色	にぶい橙色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		

挿図 番号	出土層位・遺構面	種 類	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態 文様	備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面		
131	暗褐色砂質土	土師器	甕	16.0	13.0	5.3	にぶい橙色	にぶい橙色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
132	暗褐色砂質土	土師器	甕	17.6	14.0	6.3	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
133	暗褐色砂質土	土師器	甕	18.0	13.8	6.1	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
134	暗褐色砂質土	土師器	甕	21.0	16.7	4.6	黄褐色	黄褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
135	暗褐色砂質土	土師器	甕	15.0	12.5	10.5	橙茶褐色	橙茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
136	暗褐色砂質土	土師器	壺	13.2	—	4.3	橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ		
137	暗褐色砂質土	土師器	甕	—	13.8	23 (推定)	にぶい黄褐色	橙色	頸：ナデ 体：ヘラケズリ 底面：圧延痕	頸：ナデ 頸以下：ハケメ	底面に穿孔	
138	暗褐色砂質土	土師器	甕	16.6	13.8	4.6	にぶい褐色	にぶい褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
139	暗褐色砂質土	土師器	甕	21.0	17.6	9.7	明茶褐色	明茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
140	暗褐色砂質土	土師器	鉢	32.0	—	4.8	浅黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ		
141	暗褐色砂質土	土師器	低脚坏	—	5.5	2.1	淡茶色	淡茶色	ナデ	ハケメ、ナデ		
142	暗褐色砂質土	土師器	低脚坏	20.5	5.2	6.1	橙茶褐色	橙茶褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		
143	暗褐色砂質土	土師器	低脚坏	—	7.4	4.3	浅黄褐色	浅黄褐色	坏：ハケメ 脚：ナデ	坏：ハケメ 脚：ナデ、絞り痕		
144	暗褐色砂質土	土師器	小形丸底壺	9.2	5.5	7.5	橙褐色	橙褐色	口：ナデ、ハケメ 体：ナデ、ケズリ	口：ナデ、ハケメ 体：ナデ、ハケメ		
145	暗褐色砂質土	土師器	小形丸底壺	—	7.4	7.2	淡黄褐色	淡黄褐色	頸：ハケメ 体：ハケメ、ナデ	頸：ナデ 体：ヘラケズリ 底：ナデ		
146	暗褐色砂質土	土師器	小形丸底壺	7.6	6.8	4.9	暗褐色	暗褐色	口～頸：ナデ 体：ハケ後ナデ	口：ナデ 体：ヘラケズリ		
147	暗褐色砂質土	土師器	鼓形器台	21.4	—	5.4	橙色	橙色	口縁：ハケメ 口縁以下：ヘラミガキ	口縁：ナデ 口縁以下：ハケメ		
148	暗褐色砂質土	土師器	鼓形器台	19.6	—	6.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口縁：ハケメ 口縁以下：ヘラミガキ	風化 調整不明		
149	暗褐色砂質土	土師器	鼓形器台	—	21.2	5.6	橙色	橙色	筒部下：ヘラミガキ 脚端部：ナデ	ナデ		
150	暗褐色砂質土	土師器	鼓形器台	—	17.2	5.0	黄褐色	黄褐色	筒部下：ヘラミガキ 脚端部：ナデ	ナデ		
151	暗褐色砂質土	土師器	高坏	24.0	—	7.3	明茶褐色	明茶褐色	風化 調整不明	口縁：ナデ 坏部：ヘラミガキ		
152	暗褐色砂質土	土師器	高坏	18.0 (坏部最大径)	—	4.6	暗赤褐色	橙色	ミガキ	ナデ、ハケメ	有段坏	
153	暗褐色砂質土	土師器	高坏	29.2	—	6.4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口縁：ナデ 坏部：ヘラミガキ	口縁：ナデ 坏部：ナデ後ヘラミガキ		
154	暗褐色砂質土	土師器	高坏	—	—	3.4	橙色	橙色	ハケメ	ハケメ		
155	暗褐色砂質土	土師器	高坏	—	—	1.4	茶褐色	茶褐色	ナデ	ハケメ		
156	暗褐色砂質土	土師器	高坏	—	17.4	2.5	浅黄褐色	橙色	端部：ナデ 脚部：ヘラミガキ	端部：ナデ 脚部：ヘラミガキ	透かし有り	
157	暗褐色砂質土	土師器	高坏	—	—	6.0	茶褐色	茶褐色	絞り痕、ナデ	頸：ナデ 脚：ヘラミガキ後ナデ		
158	暗褐色砂質土	須恵器	坏蓋	12.2	—	3.1	淡褐色	灰褐色	回転ナデ	口、肩：回転ナデ 天：回転ヘラケズリ	肩部に浅い1条の沈線	
159	暗褐色砂質土	須恵器	坏蓋	—	—	2.2	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ヘラケズリ		
160	暗褐色砂質土	須恵器	坏蓋	—	—	2.3	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 雑なヘラケズリ		
161	暗褐色砂質土	須恵器	坏身	10.4	—	4.9	青灰色	暗青灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ		
162	暗褐色砂質土	須恵器	坏身	—	—	2.5	淡灰色	淡灰色	回転ナデ 静止ナデ	底：ヘラおこし後ナデ 坏部：回転ナデ		
163	暗褐色砂質土	須恵器	ハソウ	—	8.4 (胴部最大径)	5.3	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	体下半：回転ヘラケズリ、上半：回転ナデ	1条の沈線	
164	暗褐色砂質土	須恵器	坏蓋	—	—	1.3	青灰色	暗緑色	回転ナデ	回転ナデ	輪状つまみ	
165	暗褐色砂質土	須恵器	底部	—	7.8	1.0	暗灰色	暗灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ	回転系切り痕	
166	暗褐色砂質土	須恵器	甕片	—	—	5.8	灰紫色	灰色	格子目の当て具痕	叩き痕		
167	暗褐色砂質土	土師質土器	皿	8.6	4.6	2.2	浅黄褐色	浅黄褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		
168	暗褐色砂質土	磁器	碗	—	4.6	4.7	緑灰色	淡灰色	回転ナデ 底面：砂付着	施釉 (青磁釉)	青磁	
169	暗褐色砂質土	陶器	皿	—	—	2.3	暗緑灰色	暗緑灰色	施釉	施釉	肥前系	
170	暗褐色砂質土	陶器	碗	5.0	—	—	暗緑灰色	黄灰色	施釉	露胎	肥前系	
171	暗褐色砂質土	陶器	碗	—	—	2.9	暗緑灰色	暗緑灰色	施釉	施釉	肥前系	

押図 番号	出土層位・遺構面	種 類	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態 文様	備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面		
172	暗褐色砂質土	陶器	播鉢	—	—	2.5	にぶい赤褐色	灰赤色	施釉	施釉		
173	暗褐色砂質土	陶器	鉢	—	—	4.2	淡黄灰色 褐色	淡黄灰色	施釉	施釉		布志名焼
190	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	5.2	—	—	茶褐色	暗茶褐色	ナデ	ナデ 一部に縄文?		風化
191	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	4.7	—	—	茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ 一部に縄文?		風化
192	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	2.4	—	—	灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	口縁端部に刻目	
193	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	3.4	—	—	灰褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
194	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	2.0	—	—	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
195	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	4.3	—	—	灰褐色	明褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目	
196	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	4.5	—	—	明赤褐色	淡赤褐色	ナデ	条痕	突帯に刻目	
197	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	2.5	—	—	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目なし	
198	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	3.3	—	—	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目なし	
199	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	3.2	—	—	灰褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目なし	
200	暗褐色砂層	縄文土器	深鉢	2.0	—	—	淡茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ	突帯に刻目なし	
201	暗褐色砂層	縄文土器	底部		6.6	2.0	明茶褐色	暗黄褐色	ナデ	ナデ		
202	暗褐色砂層	縄文土器	底部		5.0	1.3	茶褐色	赤茶褐色	ケズリ	ナデ		
203	暗褐色砂層	縄文土器	底部		8.8	3.4	茶褐色	橙茶褐色	ナデ	ナデ		
204	暗褐色砂層	縄文土器	底部		8.8	4.1	暗茶褐色	赤褐色	ナデ	ナデ		
205	暗褐色砂層	弥生土器	甕	16.2	—	3.7	淡褐色	桃褐色	ハケメ	ハケメ	口縁に浅い刻目	
206	暗褐色砂層	弥生土器	甕	—	—	3.2	明茶褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ	口縁に刻目	
207	暗褐色砂層	弥生土器	甕	—	—	1.5	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ	口縁に刻目	
208	暗褐色砂層	弥生土器	甕	16.1	14.7	5.5	淡褐色	淡褐色	口：ナデ 体：僅かにハケメ	口～頸：ナデ 体：僅かにハケメ	頸部に段	
209	暗褐色砂層	弥生土器	甕	—	15.4	4.6	褐色	褐色	僅かにハケメ	風化 調整不明	頸部に段	
210	暗褐色砂層	弥生土器	甕	—	17.4	5.3	黄褐色	黄褐色	風化 調整不明	ナデ、ハケメ	2条のヘラ描直 線文	
211	暗褐色砂層	弥生土器	甕	23.6	22.7	10.8	淡茶色	淡茶色	口：ナデ 体：僅かにハケメ	口：ナデ 体：ハケメ	口縁直下に僅かな ヘラ描の痕跡有り	外面：一部 スス付着
212	暗褐色砂層	弥生土器	甕	27.0	25.4	5.3	淡褐色	茶褐色	口：ナデ 体：縦方向 に指で撫でた様な痕	ナデ	口縁直下に1条のヘラ描直線文 を施し、その下に刺突文 穿孔	
213	暗褐色砂層	弥生土器	壺	—	—	2.2	淡茶褐色	明茶褐色	風化 調整不明	ナデ	口縁端部：3条 の凹線	
214	暗褐色砂層	弥生土器	壺	—	—	1.7	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	口縁端部：3条 の凹線	
215	暗褐色砂層	弥生土器	甕	18.6	17.4	3.8	褐色	暗褐色	口：ナデ 体：ヘラケズリ	ナデ	口縁端部に凹線 なし	
216	暗褐色砂層	弥生土器	甕	10.6	10.9	2.8	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：3条 の凹線	
217	暗褐色砂層	弥生土器	甕	14.2	12.8	2.4	淡褐色	淡褐色	口：ナデ 体：ヘラケズリ	ナデ	口縁端部：3条 の凹線	
218	暗褐色砂層	弥生土器	甕	22.4	—	2.6	暗灰褐色	明茶褐色	ナデ	ナデ	口縁端部：5条 の凹線	
219	暗褐色砂層	弥生土器	高坏	—	11.4	4.5	にぶい橙色	淡黄橙色	ヘラケズリ	ナデ	側面に4条の凹 線	
220	暗褐色砂層	弥生土器	小形の壺	7.0	3.6	4.5	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ		底部：一部 黒変
221	暗褐色砂層	弥生土器	壺か甕の 胴部	—	—	5.6	淡茶色	明茶褐色	ヘラケズリ	ナデ	直線文の間に列 点文	
222	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	8.0	1.6	黄褐色	灰褐色	風化 調整不明	ナデ		2mm以上の 砂粒
223	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	8.2	3.0	暗褐色	暗褐色	ナデ	ハケメ		2mm以上の 砂粒
224	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	9.1	2.9	黄橙色	黄橙色	指頭圧痕	指頭圧痕、ナデ		2mm以上の 砂粒
225	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	6.9	2.1	赤褐色	赤褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		2mm以上の 砂粒
226	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	8.6	3.5	褐色	褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		2mm以上の 砂粒
227	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	8.3	3.7	赤褐色	黄褐色	ハケメ、ナデ	ハケメ		2mm以上の 砂粒
228	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	8.0	4.2	淡茶色	橙色	ハケメ	ハケメ		2mm以上の 砂粒

挿図 番号	出土層位・遺構面	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態 文様	備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面		
229	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	8.8	6.2	淡茶色	明茶色	ハケメ	ヘラミガキ		2mm以上の砂粒
230	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	4.2	2.4	茶褐色	茶褐色	ヘラケズリ	ヘラミガキ		2mm以下の砂粒
231	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	4.6	3.1	茶褐色	赤茶褐色	ヘラケズリ	ナデ		2mm以下の砂粒
232	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	8.0	2.5	淡灰色	黒色	ヘラケズリ	ナデ		2mm以下の砂粒
233	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	7.0	2.3	淡黄褐色	橙褐色	風化調整不明	風化調整不明		2mm以下の砂粒
234	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	7.8	1.7	黄褐色	赤褐色	風化調整不明	風化調整不明		2mm以下の砂粒
235	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	8.9	2.3	淡橙色	橙色	ハケメ	ナデ		2mm以下の砂粒
236	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	10.4	5.0	淡茶色	褐色	ヘラミガキ ハケメ	ハケメ		2mm以下の砂粒
237	暗褐色砂層	弥生土器	底部	—	15.2	4.5	暗茶褐色	橙茶褐色	ナデ	風化調整不明	外面：粘土剥離	2mm以下の砂粒
238	暗褐色砂層	土師器	壺	15.0	12.4	3.8	淡茶灰色	淡茶灰色	ナデ	ナデ		
239	暗褐色砂層	土師器	壺	14.4	10.4	5.4	淡茶褐色	赤茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
240	暗褐色砂層	土師器	壺	18.8	13.7	6.2	茶褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	頸部：羽状文	
241	暗褐色砂層	土師器	壺	19.4	16.0	5.4	淡橙色	灰褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
242	暗褐色砂層	土師器	壺	20.0	16.0	5.8	淡橙茶色	淡橙茶色	ナデ	ナデ		
243	暗褐色砂層	土師器	壺	—	23.4 (最大径)	4.7	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ		
244	暗褐色砂層	土師器	壺	—	11.6	9.6	灰白色	淡黄褐色	口：ナデ 頸：絞り痕 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
245	暗褐色砂層	土師器	壺	20.0	10.2	7.6	淡橙色	淡橙色	ナデ	ナデ		
246	暗褐色砂層	土師器	壺	20.8	11.9	9.4	黄褐色	明黄褐色	口：ナデ 頸：絞り痕 頸以下：ヘラケズリ	ナデ (ハケメ)		
247	暗褐色砂層	土師器	壺	24.8	15.8	8.7	茶褐色	茶褐色	口：ナデ 頸：絞り痕 頸以下：ヘラケズリ	口～頸：ナデ 頸以下：僅かにハケメ		
248	暗褐色砂層	土師器	壺	30.6	—	6.3	淡橙色	淡橙色	ナデ	ナデ		
249	暗褐色砂層	土師器	壺	29.0	—	6.4	淡茶色	淡茶色	ナデ	ナデ		
250	暗褐色砂層	土師器	甕	15.0	13.0	5.3	明茶褐色	明茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
251	暗褐色砂層	土師器	甕	16.0	13.4	5.6	淡灰褐色	淡灰褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
252	暗褐色砂層	土師器	甕	15.4	11.0	6.7	淡橙色	淡橙色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
253	暗褐色砂層	土師器	甕	15.7	12.9	7.2	明茶褐色	明茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ 頸以下：僅かにハケメ		
254	暗褐色砂層	土師器	甕	19.4	16.8	6.4	淡灰色	灰褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
255	暗褐色砂層	土師器	甕	13.8	11.6	18.7	淡黄褐色	淡黄褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
256	暗褐色砂層	土師器	甕	15.8	11.9	24.0	明茶褐色	明茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ 底：指頭庄痕	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
257	暗褐色砂層	土師器	甕	25.0	21.7	20.4	橙茶褐色	橙茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ	肩部：波状文	
258	暗褐色砂層	土師器	甕	15.2	11.3	4.2	淡橙灰色	淡橙灰色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
259	暗褐色砂層	土師器	甕	15.5	12.7	4.0	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ	ナデ		
260	暗褐色砂層	土師器	甕	15.5	12.6	5.4	明茶褐色	明茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
261	暗褐色砂層	土師器	甕	16.2	11.2	5.1	淡橙色	淡橙色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
262	暗褐色砂層	土師器	甕	16.0	12.6	5.7	淡橙灰色	淡灰褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
263	暗褐色砂層	土師器	甕	15.5	12.3	4.5	淡橙色	橙灰色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
264	暗褐色砂層	土師器	甕	17.2	13.6	8.3	茶褐色	茶褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
265	暗褐色砂層	土師器	甕	23.2	17.8	6.6	淡橙色	淡橙色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
266	暗褐色砂層	土師器	甕	20.3	17.2	10.6	黄褐色	暗灰色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：風化		
267	暗褐色砂層	土師器	甕	17.3	15.5	4.5	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	布留系	
268	暗褐色砂層	土師器	甕	18.6	14.8	9.6	灰褐色	灰褐色	口：ナデ、ハケメ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
269	暗褐色砂層	土師器	甕	12.2	9.4	6.2	灰色	橙灰色	口：ナデ、ハケメ 頸以下：ヘラケズリ	風化調整不明		

挿図 番号	出土層位・遺構面	種類	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態 文様	備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面		
270	暗褐色砂層	土師器	甕	15.8	13.2	4.2	明茶褐色	橙茶褐色	口：ナデ、ハケメ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
271	暗褐色砂層	土師器	直口壺	9.8	8.4	6.5	淡橙色	淡橙灰色	口：ナデ、ハケメ 頸以下：ヘラケズリ	ナデ		
272	暗褐色砂層	土師器	低脚坏	19.6	—	5.3	暗褐色	暗褐色	坏：ヘラミガキ 脚：ナデ	坏：風化 脚：ナデ		
273	暗褐色砂層	土師器	低脚坏	—	5.9	2.5	淡黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
274	暗褐色砂層	土師器	低脚坏	—	5.8	2.0	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
275	暗褐色砂層	土師器	低脚坏	—	5.2	3.6	黄灰色	黄灰色	風化 調整不明	ナデ		
276	暗褐色砂層	土師器	小形丸底壺	7.4	6.7	4.1	橙色	橙色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
277	暗褐色砂層	土師器	小形丸底壺	9.2	8.5	5.9	にぶい黄橙 色	にぶい黄橙 色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
278	暗褐色砂層	土師器	小形丸底壺	—	5.6	5.2	灰褐色	褐色	口：ナデ 頸以下：ヘラケズリ	口：ナデ 頸以下：ハケメ		
279	暗褐色砂層	土師器	鼓形器台	19.4	—	6.4	茶褐色	茶褐色	風化 調整不明	ナデ		
280	暗褐色砂層	土師器	鼓形器台	22.4	—	6.1	明茶色	明茶色	風化 調整不明	ナデ		
281	暗褐色砂層	土師器	鼓形器台	24.0	14 (筒部径)	8.6	淡茶褐色	茶褐色	器受部：不明 脚台部： ヘラケズリ、ナデ	器受部：ナデ 脚台部：ナデ		
282	暗褐色砂層	土師器	鼓形器台	18.0	9.6 (筒部径)	5.9	茶褐色	茶褐色	筒部：ナデ 脚台部： ヘラケズリ、ナデ	筒部：ナデ 脚台部：ナデ		
283	暗褐色砂層	土師器	鼓形器台	—	8.2 (筒部径)	6.8	淡橙色	淡橙色	筒部：ナデ 脚台部：ヘラケズリ	筒部：ナデ 脚台部：ナデ		
284	暗褐色砂層	土師器	鼓形器台	—	24.0	5.7	明茶褐色	明茶褐色	筒部：ナデ 脚台部：ヘラケズリ	筒部：ナデ 脚台部：ナデ		
285	暗褐色砂層	土師器	甕、把手	—	—	4.3	淡褐色	淡褐色	絞り痕、ナデ	ナデ		
287	暗褐色砂層	土師器	高坏	19.2	—	4.0	明茶褐色	明茶褐色	口：ナデ 坏：ハケメ	口：ナデ 坏：ハケ後ナデ		
288	暗褐色砂層	土師器	高坏	14.6	—	6.0	橙茶褐色	橙茶褐色	口：ナデ 坏：ヘラミガキ	口：ナデ 坏：ハケメ		
289	暗褐色砂層	土師器	高坏	15.8	—	4.2	明黄褐色	明黄褐色	口：ナデ 坏：ハケメ	口：ナデ 坏：ハケメ		
290	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	—	2.1	暗褐色	灰褐色	ナデ	ハケメ、ナデ		
291	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	—	1.7	暗灰褐色	灰褐色	ナデ	ハケメ		
292	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	—	1.5	淡灰黄色	淡黄色	ナデ	ハケメ		
293	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	—	1.7	灰褐色	灰褐色	風化 調整不明	ハケメ		
294	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	—	4.6	淡黄褐色	淡黄褐色	絞り痕、ナデ	風化 調整不明	3方に透かし	
295	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	—	5.6	茶褐色	茶褐色	ヘラケズリ、絞り痕	ハケ後ナデ		
296	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	11.8	6.3	茶褐色	茶褐色	筒：ケズリ 裾：ナデ	筒：ハケ後ミガキ 裾：ナデ		
297	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	14.0	9.4	淡桃褐色	淡桃褐色	筒：ケズリ 裾：ハケメ	筒：ハケ後ミガキ 裾：ナデ		
298	暗褐色砂層	土師器	高坏	—	14.2	8.7	淡橙褐色	橙褐色	筒：ケズリ 裾：ハケメ	筒：ハケ後ミガキ 裾：ナデ		
299	暗褐色砂層	土師器	脚部	—	13.5	4.3	淡褐色	淡褐色	筒：ケズリ 裾：ナデ	ナデ		
300	暗褐色砂層	須恵器	坏蓋	—	—	1.4	淡灰色	灰色	静止ナデ	回転ヘラケズリ		
301	暗褐色砂層	須恵器	坏身	—	—	1.8	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
302	暗褐色砂層	須恵器	高坏	—	—	1.5	淡灰色	灰色	ナデ	回転ナデ	坏部外面底部： カキメ	
303	暗褐色砂層	須恵器	高坏	—	8.2	2.5	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
304	暗褐色砂層	須恵器	甕片	—	—	7.6	淡紫色	淡紫色	当て具痕	叩き痕		
305	暗褐色砂層	土師質土器	皿	—	4.2	1.0	橙灰色	橙褐色	風化 調整不明	風化 調整不明		
306	暗褐色砂層	土師質土器	皿	12.0	—	2.0	淡黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ		
307	暗褐色砂層	土師質土器	皿	13.0	6.2	2.7	淡黄灰色	淡黄灰色	ナデ	ナデ		
310	オリーブ色砂層	縄文土器	深鉢	—	—	3.8	灰黄褐色	にぶい褐色	ナデ	縄文		
311	オリーブ色砂層	弥生土器	甕	—	—	3.4	にぶい黄橙 色	橙色	風化 調整不明	ナデ、ハケメ	外面に段	
312	オリーブ色砂層	弥生土器	底部	—	7.8	5.8	橙色	にぶい橙色	ハケメ	ハケメ		
313	オリーブ色砂層	須恵器	坏蓋	—	—	2.5	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		

挿図 番号	出土層位・遺構面	種 類	器 種	法 量 (cm)			色 調		調 整		形態 文様	備考
				口径	底径・頸部径	器高(残高)	内面	外面	内面	外面		
314	黄褐色砂礫層	土師器	鼓形器台	—	18.6	4.4	橙色	橙色	脚台部：ヘラケズリ 裾部：ナデ	ナデ		
315	黄褐色砂礫層	須恵器	坏身	—	—	2.5	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
316	黄褐色砂礫層	須恵器	甗片	—	—	7.5	灰色	灰色	当て具痕	叩き痕		
317	黄灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	4.9	にぶい褐色	明褐色	ナデ	ナデ		
318	黄灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	8.5	褐灰色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ		
319	黄灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	3.0	黄灰色	褐灰色	ナデ	縄文		
320	黄灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	5.5	黒褐色	暗褐色	ナデ	ナデ		
321	黄灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	4.8	灰黄褐色	褐灰色	条痕	ナデ		
322	黄灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	4.7	橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ		
323	黄灰色砂礫層	縄文土器	底部	—	7.4	1.8	褐灰色	にぶい橙色	ナデ	ナデ		
324	黄灰色砂礫層	土師器	高坏	—	19.3	1.6	浅黄褐色	浅黄褐色	ヘラケズリ	ナデ		
326	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	2.2	黄灰色	にぶい黄褐色	ナデ	縄文		
327	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	2.0	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	縄文		
328	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	3.7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	縄文		
329	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	4.6	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	縄文		
330	青灰色砂礫層	縄文土器	浅鉢	—	—	3.4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	磨消縄文		
331	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	6.2	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ		
332	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	33.6	—	8.3	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ		
333	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	35.0	—	8.7	淡赤褐色	淡赤褐色	ミガキ	ナデ		
334	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	5.7	褐灰色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ		
335	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	5.4	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ		
336	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	5.3	にぶい黄褐色	黄褐色	ミガキ	ミガキ		
337	青灰色砂礫層	縄文土器	深鉢	—	—	5.3	灰褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ		
338	青灰色砂礫層	縄文土器	底部	—	8.4	4.0	褐灰色	にぶい黄褐色	ケズリ	ナデ		

木製品

挿図 番号	遺構面	品目	法 量 (cm)			樹種	備 考
			残存長	最大幅	最大厚		
24	第2遺構面 (K01)	杭	43.8	15.8	13.5		
25	第2遺構面 (K02)	杭	58.0	22.0	22.0	松	松皮が付いている

土製品

挿図 番号	出土層位・遺構面	器 種	法 量 (cm)			重量 (g)	色調	焼成
			最大長 (残長)	最大径	孔径			
14	第1遺構面	土玉	3.0	2.8	0.6	19.21	橙褐色	良好
34	第2遺構面	土錘	5.0	2.0	1.2	16.00	橙色	良好
35	第2遺構面	土錘	3.2	0.7	0.3	14.20	暗褐色	良好
85	暗茶褐色砂質土	土玉	3.7	3.8	0.7	46.71	黄褐色	良好
86	暗茶褐色砂質土	土錘	3.7	3.5	0.9	47.64	黄褐色～桃褐色	良好
87	暗茶褐色砂質土	土錘	5.0	2.1	1.0	15.95	暗褐色	良好
88	暗茶褐色砂質土	土錘	4.2	1.0	0.3	4.32	橙色	良好
89	暗茶褐色砂質土	土錘	3.1	1.7	0.4	9.12	橙色	良好
174	暗褐色砂質土	土錘	5.0	2.5	0.9	19.18	明赤褐色	良好
175	暗褐色砂質土	土錘	4.2	2.0	0.8	14.39	にぶい赤褐色	良好
176	暗褐色砂質土	土錘	3.7	1.0	0.3	2.64	橙色	良好
177	暗褐色砂質土	土錘	3.4	0.8	0.4	1.30	赤褐色	良好
286	暗褐色砂層	土錘	2.9	0.8	0.3	2.0	赤褐色	赤褐色

石製品

挿図 番号	出土層位・遺構面	種 類	法 量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
			最大長 (残長)	最大幅	最大厚			
90	暗茶褐色砂質土	不明	7.2	5.3	5.5	225.91		両端に円錐状の穴あり
91	暗茶褐色砂質土	石皿	15.3	13.0	4.1	870.00	大海崎石	
178	暗褐色砂質土	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.31	黒曜石	凹基無茎鏃
179	暗褐色砂質土	石鏃	2.5	1.8	0.8	1.60	黒曜石	凹基無茎鏃
180	暗褐色砂質土	石錐	4.7	1.4	0.6	3.75	黒曜石	
181	暗褐色砂質土	石錐	3.4	1.3	0.7	2.57	黒曜石	
182	暗褐色砂質土	スクレーパー	3.0	4.2	0.8	7.82	黒曜石	右側辺縁：刃部 左側辺縁：微細剥離痕
183	暗褐色砂質土	楔形石器	2.7	2.4	1.1	7.16	黒曜石	
184	暗褐色砂質土	石核	5.3	2.8	2.8	15.01	黒曜石	
185	暗褐色砂質土	スクレーパー	1.7	3.0	0.7	3.78	安山岩	
186	暗褐色砂質土	石斧	10.0	5.0	3.2	242.9	塩基性岩	
187	暗褐色砂質土	磨石	9.0	6.8	3.7	338.0		擦痕有り
188	暗褐色砂質土	打製石斧 (石鏃)	10.1	6.6	1.8	159.9	黒色泥岩 (頁岩)	
189	暗褐色砂質土	砥石	27.5	9.4	6.4	3260.0		使用痕有り
308	暗褐色砂層	石錘	9.2	6.7	3.7	270.0		凹石から転用？
309	暗褐色砂層	擦石？	12.6	7.3	7.4	940.0		
325	黄灰色砂礫層	打製石斧	7.0	4.0	2.1	77.2	黒色泥岩 (頁岩)	

版 图



A区 調査前全景
(西から)



B区 調査前全景
(東から)



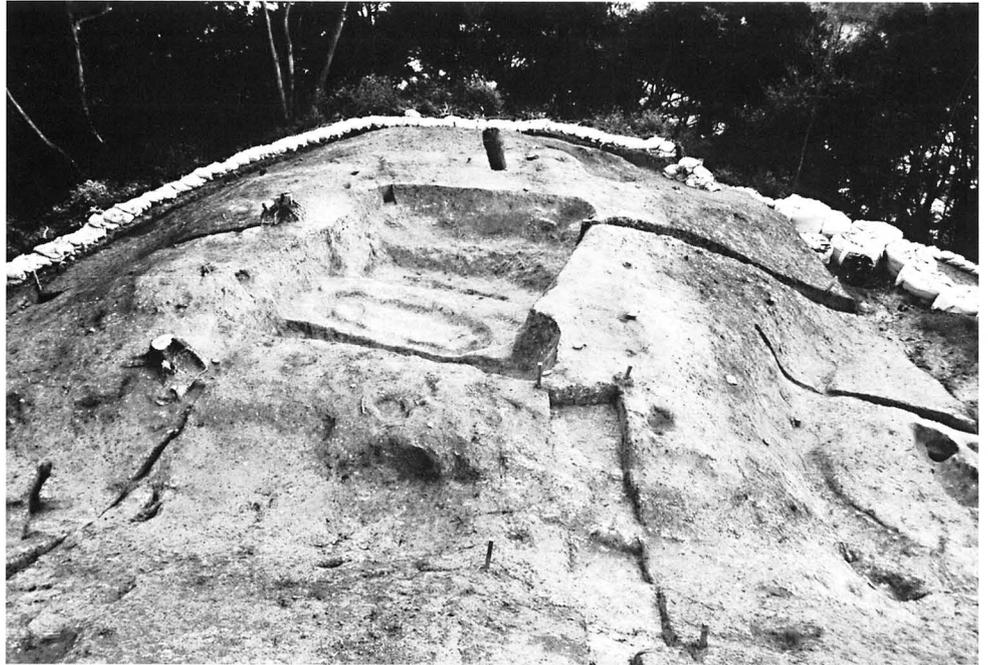
C区 調査前全景
(北東から)



春日山古墳群 調査後全景（北側上空から）



1号墳主体部（西から）



1号墳 全景
(西から)



1号墳主体部
土層断面 (南西から)



1号墳主体部
土層断面 (北から)



1号墳第1主体部（北東から）



1号墳第2主体部（北東から）



1号墳第3主体部（北東から）



2号墳主体部（北から）



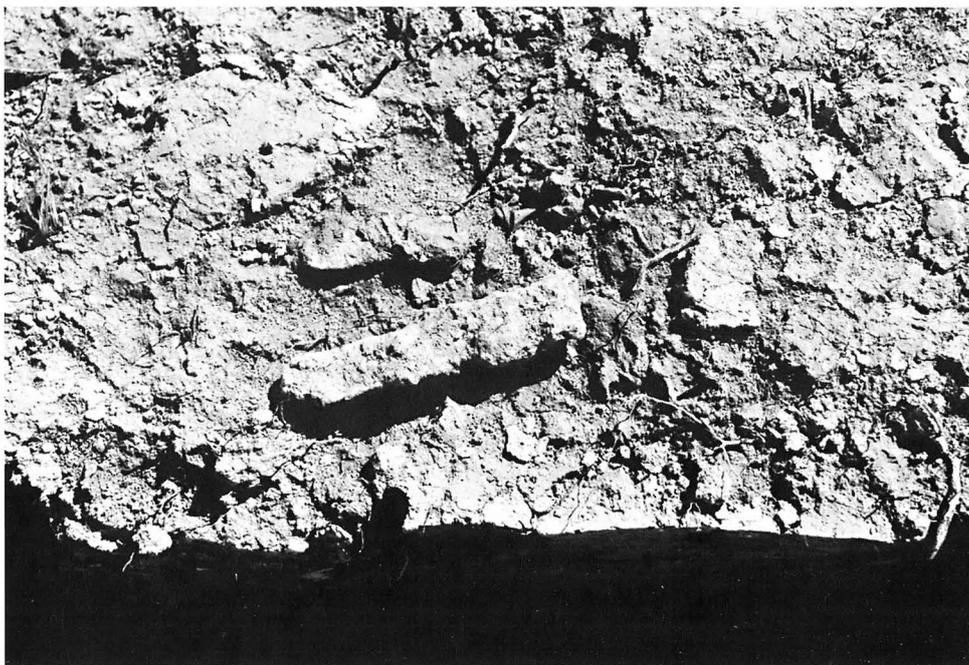
2号墳主体部（西から）



2号墳主体部
南北土層断面（西から）



2号墳主体部
東西土層断面（南から）



3号墳東側溝
遺物出土状況（南から）



3号墳 全景 (西から)



3号墳主体部 (南から)